

一橋大学審査学位論文

博士論文

どのような相手であれば被排斥経験後に再親和できるのか
—被排斥者の社会不安および再親和相手の集団成員性と集団
の類似性からの検討—

津村 健太

一橋大学大学院社会学研究科

SD121010

WHICH KIND OF PEOPLE WOULD BE THE SOURCE OF REAFFILIATION
AFTER OSTRACISM? EXAMINATION FROM SOCIAL ANXIETY OF
OSTRACIZED PEOPLE, GROUP MEMBERSHIP OF REAFFILIATION PARTNER,
AND GROUP SIMILARITY

TSUMURA, Kenta

Doctoral Dissertation

Graduate School of Social Sciences

Hitotsubashi University

私は、博士学位請求論文を作成するにあたり、「一橋大学における研究活動に係る行動規範」*
および、本研究科の「大学院生研究倫理規範」**を遵守したことを、ここに宣誓します。

*「一橋大学における研究活動に係る行動規範」(2007年7月4日)

**「一橋大学大学院社会学研究科 大学院生研究倫理規範」(2015年11月11日)

2017年 2月 22日

学位申請者(自署): 津村 健太

目次

第一部 問題

序章	2
0.1 はじめに.....	2
0.2 本研究における社会的排斥、およびその操作方法について	2
0.3 誰から排斥されるのか	5
0.4 本研究の概要.....	6
0.5 本論文の構成.....	8
1章 社会的排斥と攻撃行動・再親和	9
1.1 社会的排斥とその影響	9
1.2 被排斥経験後の反応—脅威を受けた欲求の充足—	12
2章 被排斥経験後の集団類似性の知覚と再親和	20
2.1 排斥経験後、誰に再親和を求めるか	20
2.2 再親和相手の見極めと集団類似性知覚	23
2.3 再親和相手の集団成員性、および集団の類似性知覚が再親和に与える影響	26
3章 社会不安と被排斥経験後の再親和	29
3.1 社会不安とは.....	29
3.2 社会不安と被排斥経験後の再親和.....	30
4章 本論文の目的と実証研究の概要	33
4.1 本論文の目的および仮説	33
4.2 実証研究の概要.....	34

第二部 実証研究

5章 社会的排斥が集団の類似性の知覚に与える影響	38
5.1 実験1	38
5.2 実験2	41
5.3 実験1および実験2のまとめ	51
6章 再親和相手の集団成員性が被排斥経験後に再親和を求める程度に与える影響	53
6.1 実験3	53
6.2 実験4	58
6.3 実験3と実験4のまとめ	63
7章 集団類似性の知覚の低減が被排斥経験後に外集団成員に再親和を求める程度に与える影響	66
7.1 実験5	66
7.2 実験6	71
7.3 実験5と実験6のまとめ	77

第三部 総合考察

8章 総合考察	81
8.1 実証研究の結果のまとめ	81
8.2 本研究の意義と今後の展望	86
8.3 結語	90
引用文献	89
付録	100

第一部 問題

序章

0.1 はじめに

人は社会的動物であり、一人では生きていくことが出来ない (Baumeister & Leary, 1995)。そのため、社会的排斥経験後には再び他者とのつながりを得る、すなわち再親和(reaffiliation)を果たすことが重要である。本研究の目的は、社会的排斥経験後に生じる認知上の変化と、その認知上の変化が被排斥経験後の再親和に与える影響を社会心理学的観点から検討することである。特に、これまでの研究で排斥経験後に他者に再親和を求めるのが困難である可能性が示されている、社会不安の高い人々がどのような相手であれば再親和を求めることができるのかを検討する。具体的には、社会的排斥経験後には、集団成員同士の類似性の知覚が高まると予測し、この予測を実証的に検討する。また、集団に対する類似性の知覚が高まることで、排斥経験後に外集団に対して再親和を求める程度が低下するが、内集団に対して再親和を求める程度が高まると予測し、この予測についても実証的に検討する。加えて、外集団に対する類似性の知覚が低減すれば、社会的不安の高い人であっても外集団成員に対しても再親和を求めるようになるのか、検討する。

なお、被排斥経験後に再び社会的なつながりを得ることに対して、研究によっては(social) reconnectionという語を用いる場合もあるが、本研究では reaffiliation (再親和) を用いることとする。また再親和は、必ずしも自らを排斥してきた者に対して社会的つながりを得ようとするを指すわけではなく、排斥に無関係な他者や集団との社会的つながりを得ることも含む。本研究では、後者について検討した。

0.2 本研究における社会的排斥、およびその操作方法について

社会学や政治学をはじめとする社会科学において、社会的排除 (social exclusion) という概念は1970年代にもたらされた。社会的排除とは、主要な社会的関係から締め出され、社会のメインストリームから弾き出されることを指し、社会問題としてその現状や、いかにして社会に包摂 (inclusion) していくべきか、といったことが論じられ、様々な提言がなされてきた (for a review, see 岩田, 2008; 樋口, 2004)。

心理学においても、社会的なつながりを失うことの心理的な影響について、様々な研究がおこなわれてきた。そういった研究文脈の中では、拒絶 (rejection)、社会的排除 (social exclusion)、排斥

(ostracism)、などの概念・用語が用いられ、研究がなされている。これらの概念・用語に対して、それぞれを心理学的、あるいは語義の上から区別しようという試みもなされている (Leary, 2001) が、これらの概念・用語は必ずしも弁別的に用いられているわけではない。そこで K. D. Williams らは、拒絶や社会的排除、排斥といった研究文脈において共通しているのは、「集団あるいは個人から無視されたり、のけ者にされたりすること」、すなわち社会的なつながりを欠くことであると論じた。そのうえで、拒絶や社会的排除、排斥は相互に交換可能な概念・用語であると捉え、主に排斥 (ostracism) という用語を用い、社会的なつながりを欠くこと自体がもたらす心理的影響について検討した (for a review, see Williams, 2007a, 2009)。本稿においても、社会的なつながりを欠くこと自体がもたらす心理的影響や、それに対する認知的・行動的反応について着目し検討した。また、用語としても(社会的)排斥という用語を用いることとした。

心理学実験において、社会的排斥の操作として用いられる手法には複数の種類がある。例えば、ある研究の実験参加者は、実験のパートナー(とされる人物)と一緒に実験の受けるのは嫌であると言って帰ってしまった、と実験者から伝えられた (e.g., Maner, DeWall, Baumeister, & Schaller, 2007)。類似した手続きとしては、複数名が参加する実験で、参加者は他の誰からも実験のパートナーとして指名されない、といった操作方法が用いられた研究もある (e.g., Maner et al., 2007)。あるいは別の研究では、参加者はパーソナリティテストを受け、その診断結果として将来は孤独に過ごすであろうと伝えられた (e.g., Twenge, Baumeister, Tice, & Stucke, 2001)。このように、あからさまに拒絶されたり、将来の社会的排斥を予期させたりといったような、露骨な社会的排斥の操作が用いられることがある。他方で、サイバーボール (Cyberball) と呼ばれる課題では、参加者は 3 人ないし 4 人程度のプレーヤーによる簡単なキャッチボールゲームをパソコン上で行う(図 0-1 参照)が、その際に受容条件と排斥条件のいずれかに割り振られる。受容条件では均等な割合で参加者にもボールが回ってくるのに対して、排斥条件では序盤に数回程度ボールが回ってきた以降はボールが全く来なくなってしまう (e.g., Williams, Cheung, & Choi, 2000; Williams & Jarvis, 2006)。あるいは、紙筆による実験の場合には、自身が過去に経験した排斥について想起して記述させる方法 (e.g., Maner et al., 2007) や、架空の被排斥状況を描いたシナリオを読ませイメージさせる場面想定法 (DeWall et al., 2011; Fiske & Yamamoto, 2005; Hitlan, Kelly, Schepman, Schneider, & Zárate, 2006)、プライミング (Sommer & Baumeister, 2002) といった方法が用いられることもある。このような、排斥のわずかな手がかりが与えられる操作方法であったとしても、所属欲求やコントロール欲求が脅威にさらされ、また、苦痛を感じる (for a review, see Williams, 2009)。人の進化の過程においては、社会的なつながりから排斥されてしまうことは、死を意味していたといっても過言ではない。それはつ

まり、排斥のシグナルを見逃してしまうコストが非常に大きいことを意味している。それと比して、実際には排斥される可能性は無いにもかかわらず排斥される危険性があると判断することには、大きなリスクは伴わない (cf. エラー管理理論、Haselton & Buss, 2000)。そのため、サイバーボール課題のようなわずかな手がかりであっても、人は排斥の可能性を素早く自動的に検知し、反応を示すことが適応的であったと考えられる (see Williams, 2007b, 2009)。

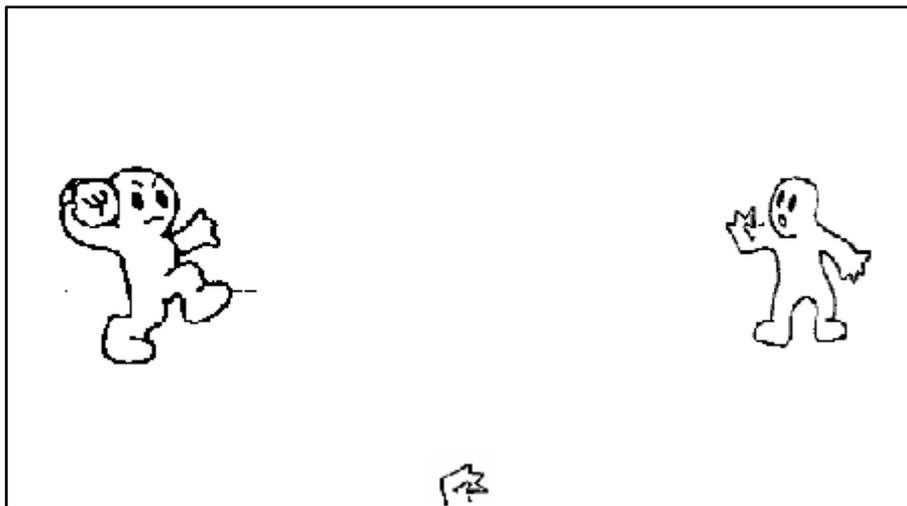


図 0-1. サイバーボール課題のゲーム画面

(下部に表示されている手が、実験参加者)

以上を踏まえ、本研究では、実験室実験においてはサイバーボール課題を用いることとした。サイバーボール課題は社会的排斥の研究において多く用いられており、確立された研究手法であると言える。また、サイバーボール課題は社会的な文脈を排し、排斥を経験することの心理的影響を検討することができる手法である (see Williams, 2009)。社会的排斥の操作方法が参加者に与える影響についてのメタ分析によれば、サイバーボール課題を用いた研究においても十分な効果量が見られ、サイバーボール課題における被排斥経験によって所属欲求に脅威が及ぶことが確認されている (Gerber & Wheeler, 2009)。そのため、社会的な文脈から切り離された状況下でサイバーボール課題によって排斥された後にも、他者に対して再親和を求めるような行動が生起すると予測される。また、サイバーボール課題によって排斥を経験した際のネガティブな感情は、課題終了後比較的早く回復する (Williams, 2009)。そのため、露骨な社会的排斥の操作と比べて実験参加者への負担が少なく、研究倫理の観点からも望ましい手法であると言える。

他方で紙筆による実験の場合には、本研究ではシナリオを用いた場面想定法による実験を行うこととした。過去の被排斥経験を想起してもらう方法が用いられる場合もあるが、この方法では実験参加者によって経験の内容が異なる、あるいは適切な経験を想起してもらえない、といった問題が生じる危険性がある。また、参加者に辛い経験を想起してもらわなければならないため、不必要に重い心理的な負担を課してしまう恐れもある。場面想定法であっても、シナリオの内容によっては実験参加者への負担が大きくなる場合もあるため、本研究で用いるシナリオはあからさまに排斥をされるようなものではなく、些細な被排斥経験を扱ったシナリオとした。また、被排斥経験による心理的影響を検討するため、社会的文脈の影響を排することができるよう考慮した。

0.3 誰から排斥されるのか

排斥にはもう一点重要な問題がある。それが、「誰から排斥されるのか」ということである。排斥の検知や被排斥経験への反応が進化適応の過程で身についたと考えた場合には、そこで前提にされているのは内集団(の成員)からの排斥であろう。しかし現代においては、外集団成員との接触や交流が頻繁に行われており、また、多くの人が様々な集団に属している。そのため、外集団成員からの排斥を経験することもあり得るだろう。排斥の手がかりが些細なものであった場合にも敏感に検知され、根源的な欲求に対する脅威や苦痛の知覚が(自動的に)生じる。それと同様に、排斥を誰から受けたのかということに関わらず、被排斥者には否定的な影響が生じると考えられる。実際に、外集団成員とのサイバーボール課題において排斥された参加者は、所属欲求に対して脅威が生じたと報告していた (Williams et al., 2000)。ただし、この研究における内/外集団は、使用しているパソコンの種類(Windows or Macintosh)によって分けられたものであり、実験参加者にとってあまり意味のない集団成員性であった可能性もある。しかし、別の研究では、民族集団の成員性を用いて検討しており、民族的な外集団から排斥された場合も、民族的な内集団から排斥された場合と同様に、所属欲求等の根源的な欲求に対する脅威が生じていた (Goodwin, Williams, & Carter-Sowell, 2010)。さらには、軽蔑されているような外集団(クー・クラックス・クラン)の成員から排斥された時にも、内集団成員からの排斥された時と同程度に、根源的な欲求に脅威が生じネガティブな感情状態が生じたことが示されている (Gonsalkorale & Williams, 2007)。またこの研究では、クー・クラックス・クランから受容された条件と内集団成員から受容された条件のいずれにおいても、参加者は同程度の所属感を得ることができており、またネガティブな感情も生じていなかった。

上述のように、外集団成員からの排斥であってもネガティブな影響が生じる。さらには、コンピュータープログラムのような、集団成員性とは無関係な存在からの排斥であったとしても、排斥経験は脅威となる (Zadro, Williams, & Richardson, 2004)。Zadro らの実験では、通常のサイバーボール課題の操作 (i.e., 排斥の有無)に加えて、半数の参加者には課題の相手が実在の人物であると教示し、残りの参加者には相手がコンピューターのプログラムであると教示した。サイバーボール課題後、所属欲求や被受容感・被排斥感に関する質問に回答を求めたが、排斥経験が所属欲求や被受容感・被排斥感に与えた影響は、教示によって差が見られなかった。

このように、所属欲求等の根源的な欲求に対する脅威や苦痛を生じさせるという点に関しては、誰からの排斥からであっても同様の影響が見られる。しかし一方で、特に民族集団の成員性に関しては、排斥をした者や集団に対する態度や排斥経験の原因帰属が、排斥された相手の集団成員性によって変化することも示されている。民族的な外集団の成員から排斥された場合は、民族的な内集団の成員から排斥された場合と比べて、排斥してきた外集団成員個人やその外集団に対する敵意が増加しており (Schaafsma & Williams, 2012)、また、その排斥が差別的態度によって引き起こされた行為であると原因帰属していた (Goodwin et al., 2010; Mendes, Major, McCoy, & Blascovich, 2008)。対して、内集団成員から排斥された場合には、外集団成員から排斥された時のように外的帰属が出来ず、自分の素質等が原因で排斥された、と考える可能性がある (cf. Mendes et al., 2008; Williams et al., 2000)。これらのことから、排斥者の集団成員性が明らかにすることで、排斥経験後の行動が影響を受ける可能性がある。

これらの点を踏まえ、本研究ではいずれの実験も、排斥者の集団成員性を明かさず、あるいは集団成員性とは無関係な状況で行うこととした。これにより、社会的つながりが欠如した(のを検知した)こと、あるいは排斥されたと感じること自体が、再親和欲求や認知的な変化に及ぼす影響を検討できるであろうと考えられる。

0.4 本研究の概要

人は排斥に敏感に反応し、排斥されると再親和を果たそうとする (e.g., Jamieson, Harkins, & Williams, 2010; Maner et al., 2007)。しかし、相手によっては再親和を得るのが難しいという場合もあり、被排斥者は自身を受容してくれる可能性の高い他者を見極める必要があるだろう (cf. DeWall & Richman, 2011)。例えば、笑顔は好意的な対人意図の現れであると考えられるのに対して (e.g., Brown & Moore, 2002)、怒り顔は敵意を示していると考えられる (cf. Carver & Harmon-Jones,

2009)。そのため、排斥されると、笑顔と怒り顔をより正確に峻別できるようになる (Sacco, Wirth, Hugenberg, Chen, & Williams, 2011)。他方でこの研究では、カテゴリー内(e.g., 笑顔と笑顔)に関しては、その差異を見極められなくなることが示された。このことから、カテゴリー内の事例同士の類似性の知覚が高まっていることが読み取れる。この研究では個々の事例間での類似性の知覚が検討されているが、集団の類似性の知覚には、集団の全体的な同質性の知覚という側面も重要である (Park & Judd, 1990)。そこでまず、排斥経験後に集団の全体的な同質性の知覚も含めた集団の類似性の知覚が高まるか検討するため、2つの実験を実施した。

集団の類似性の知覚は内集団と外集団の弁別と関連しており、各集団内の成員同士を似ていると知覚するほど、内集団と外集団をより弁別するようになる (e.g., Hogg & Turner, 1987; Turner, Hogg, Oakes, Reicher, & Wetherell, 1987)。人は、外集団成員を脅威だと知覚しやすい (e.g., Hart et al., 2000; Olsson, Ebert, Banaji, & Phelps, 2005) ことから、排斥を受け集団に対する類似性の知覚が高まり、外集団と内集団を峻別するようになると、外集団成員に対して再親和を求めにくくなると考えられる。特に、他者とのコミュニケーションに不安を抱きやすい、すなわち社会不安 (social anxiety) の高い人は、社会的な場面において脅威を過度に見積もりやすく、否定的な結果を予測しやすい (Foa, Franklin, Perry, & Herbert, 1996) ことから、外集団に再親和を求めるのがさらに困難であると予測される。

これまでの研究で、社会不安の高い人は、排斥をされても他者に再親和を求められない可能性が示唆されている (e.g., Mallott, Maner, DeWall, & Schmidt, 2009)。社会的排斥は心身の不適応をもたらす恐れがあり、社会不安の高い者がどのような相手であれば再親和を得ることができるのか検討することが重要である。この点に関して、外集団と比べて内集団との相互作用は不安を喚起しにくい (e.g., Plant & Devine, 2003; Shelton, Richeson, & Salvatore, 2005; Trail, Shelton, & West, 2009) ことから、内集団に対してであれば社会不安が高い人であっても再親和を求めることが出来る、と考えられる。本研究では、社会不安の高い人であっても、内集団成員に対してであれば排斥経験後に再親和を求めることが出来るだろうと、予測した。本研究では、2つの実験を実施し、以上の予測を検討した。

加えて本研究では、被排斥経験後の外集団成員に対する再親和欲求の程度を高める方略についても検討することを目的とした。上述のように、外集団の類似性の知覚が高まることにより外集団成員に対する再親和が阻害されているのであれば、外集団の類似性の知覚が低減することで外集団に対しても再親和を求めるようになると予測される。本研究では、2つの実験によってこの予測を検討した。

0.5 本論文の構成

本論文は、全三部から成る。

「第一部: 問題」では、本論文の目的について述べていく。「1 章 社会的排斥と攻撃行動・再親和」では、初めに、これまでの研究で明らかにされてきた社会的排斥が人々の心身に与える影響について概観する。その中でも、人が持つ根源的な欲求(所属欲求とコントロール欲求)への影響に着目し、社会的排斥経験後には他者との再親和を求めるような反応が生じる、という知見を紹介する。「2 章 被排斥経験後の集団類似性の知覚と再親和」では、社会的排斥経験後に生じる認知的な変化について、本論文における予測を呈示する。再親和相手の見極めという観点から先行研究を概観し、その上で排斥経験後には集団に対する類似性の知覚が高まるという仮説を導いていく。また、集団への類似性の知覚が高まることにより、外集団よりも内集団に対しての方が再親和を求められるようになるという仮説を導いていく。「3 章 社会不安と被排斥経験後の再親和」では、排斥経験後に再親和を求めるのが困難である可能性が指摘されている社会不安の高い人が、どのような相手であれば再親和を求めることができるのか検討する。「4 章 本論文の目的と実証研究の概要」では、ここまでの本論文での議論をまとめ、本論文の目的および仮説を整理する。また、本論文で実施した実証研究の概要についても述べる。

続く「第二部: 実証研究」では、本研究における仮説を検討するために実施した、実証研究について具体的に説明していく。「5 章 社会的排斥が集団の類似性の知覚に与える影響」では、被排斥経験後には集団の類似性の知覚が高まるという仮説を、2 つの実験によって検討した。「6 章 再親和相手の集団成員性が被排斥経験後に再親和を求める程度に与える影響」では、被排斥経験後には再親和を求める程度が高くなるが、その程度は外集団成員に対してよりも内集団成員に対しての方が高く、さらに、この傾向は社会不安の低い者において顕著に表れるであろうという仮説を、2 つの実験によって検討した。「7 章 集団類似性の知覚の低減が被排斥経験後に外集団成員に再親和を求める程度に与える影響」では、外集団の類似性の知覚を低減させることで、外集団成員に対しても再親和を求められるようになるだろうという仮説を、2 つの実験によって検討した。

最後に「第三部: 総合考察」の「8 章 総合考察」では、第一部での議論、および第二部で示した 6 つの実証研究で得られた研究知見を簡潔にまとめる。その上で、本研究の意義や本研究から示唆されることについて議論をしていく。同時に、本研究の限界点や今後の展望について議論する。

1章 社会的排斥と攻撃行動・再親和

1.1 社会的排斥とその影響

人は進化の中で、生存や繁殖、資源の獲得など多くの面で集団や他者に依拠してきた。例えば、集団で暮らすことで食料を共有でき、互いに助け合いながら子育てができる。また、食料を獲得する、捕食動物から身を守る、といった生存上の問題も、集団で生きることによって解決してきた。このように人は社会的動物であり、集団や他者とのつながり無くしては生きていくことができなかった。そのため、人は集団や他者とのつながりを持つことに対して欲求を持つ。これが所属欲求 (need to belong) である (Baumeister & Leary, 1995)。社会的排斥とは、集団あるいは個人から無視されたり、のけ者にされたりすることを指す (Williams, 2007a, 2009)。様々な技術が発達した現代では、1人で生きていくことも困難ではないかもしれない。しかし、上述のように所属に対する欲求は進化的な基盤を持つがゆえに、現代においても社会的なつながりから排斥されることによって心身の不適応が引き起こされる。

例えば、大規模サンプルを対象とした調査 (Eng, Rimm, Fitzmaurice, & Kawachi, 2002) では、結婚の有無、親しい友人や親類との接触頻度、宗教団体への所属の有無 (例えば、教会に通っているか、など)、その他のグループ・コミュニティ等への所属の有無、の4つの指標を基に、有している社会的つながりの程度を測定した。調査の結果、社会的なつながりが多い人と比べてつながりが少ない人の方が、喫煙や飲酒、運動不足といった非健康的な生活習慣を持つことが分かった。なぜ、社会的排斥が非健康的な生活習慣につながるのかというと、一つには社会的排斥を経験することによって自己制御が損なわれるため、ということが考えられる。Baumeister, DeWall, Ciarocco, & Twenge (2005) は、一連の実験により、社会的排斥を予期した参加者はそうでない参加者と比べて、自己制御をうまく行うことができなくなることを示した。とくに、実験1および実験2では健康と関連するような行動指標によって自己制御への影響が検討された。実験の結果、排斥条件の参加者は健康的だが不味い飲み物をあまり飲まず、他方で美味しそうだが健康には良くないであろうクッキーをたくさん食べる、という結果が示された。このように、社会的排斥を経験することで自己制御が損なわれ、健康を害してしまう可能性がある。

また、別の研究では、社会的排斥を経験した者は、他者との接点を持つために非健康的な行動を取る可能性が示唆された。全米のサンプルを対象とした調査 (DeWall & Pond, 2011) では、社

会的なつながりが欠如しているほど喫煙率が高いという関連が認められたが、喫煙率の高い地域、つまり、喫煙が社会的に認められている地域(具体的にはアメリカ合衆国中西部)において、この関連がより強かった。これらの結果から、社会的なつながりが少ない人が喫煙者とのつながりを求めて喫煙する、という可能性が考えられる。また、別の実験では、参加者は排斥された経験、受容された経験、もしくは身体的な病気にかかった経験のいずれかの想起を求められ、その後、コカインを使用することに対する興味を尋ねられた。実験の結果、コカインを他者と一緒に使用するという場合のみ、排斥を想起した参加者はそれ以外の参加者と比べて、コカインに高い興味を示した。しかし、コカインを1人で使用する場合には、興味に差が見られなかった (Mead, Baumeister, Stillman, Rawn, & Vohs, 2011)。この実験結果も、社会的なつながりを求め、非健康的・反社会的な習慣に走るようになる、という可能性を示している。このように、排斥されると非健康的な習慣を持つても人とのつながりを求める、ということが考えられる。

さらには、社会的なつながりからの孤立は、死のリスクをもたらす恐れがある。前掲の Eng et al. (2002)の調査や、フランスの労働者を対象とした大規模サンプルによる他の調査 (Berkman et al., 2004) では、病歴や調査時点での病気の有無、あるいは喫煙や飲酒の習慣、運動の習慣など、健康状態と関連すると思われる他の要因の影響を統制してもなお、社会的なつながりが少ない人は、つながりが多い人と比べて死亡するリスクが高いことが明らかにされた。社会的なつながりが少ない人々は多い人々と比較して、死亡リスクが1.2倍 (Eng et al., 2002)、あるいは約3倍 (Berkman et al., 2004) 高くなっていた。これらの調査結果は、社会的排斥が死亡リスクを高めることを示唆しているといえよう。またこれらの調査では、身体的な健康に対する影響だけでなく、精神的な健康に及ぼす影響についても検討されている。Berkman et al. (2004) では抑うつ症状を経験した人の割合、Eng et al. (2002) では抗うつ剤の使用率が調べられており、いずれも社会的なつながりが多い人よりも、つながりが少ない人の方が割合が高いことが示された。さらに別の調査では、他者からの拒絶や排斥を経験することで、抑うつ程度が高まることが示された。この調査は、小学6年生の児童を対象に3年間にわたってパネル調査を実施したもので、調査の結果、ある年に経験した周囲の人々からの拒絶や排斥の経験が、翌年の抑うつ程度を高めていることが分かった (Nolan, Flynn, & Garber, 2003)。

このように、社会的なつながりから切り離されることは、心身の不適応や死につながる恐れがある。そのため、人には排斥の危機を知らせるためのメカニズムが備わっている。その一つが、排斥を経験した際に生じる社会的痛み (social pain) である。人から無視されたり、冷たくされたりすると、心に痛みが生じたように感じることはないだろうか。これが、社会的痛みと呼ばれる現象である。「痛み」と

いう言葉が用いられるが、これは身体的な痛みからの単なる類推ではない。実際に、排斥を経験すると、身体的な痛みを感じる際に賦活する脳の部位と同様の脳部位（前帯状皮質，Anterior cingulate cortex）が賦活することが明らかになっている（e.g., Eisenberger, Lieberman, & Williams, 2003）。身体的痛みと社会的痛みは、いずれも生存を脅かす危険へのシグナルである。身体的な痛みが、痛みやその原因に注意を向けさせ対処行動を導くのと同様に、社会的痛みは排斥に対する対処を導く。この社会的排斥を検知するメカニズムは、身体的痛みのメカニズムからの前適応¹によって身に付けられたと考えられている（for a review, see MacDonald & Leary, 2005; 小野田, 2010）。

また、排斥されると社会的痛みを感じるとともに、人が持つ4つの欲求が脅威にさらされる（Williams, 2009）。その4つの欲求とは、所属（Baumeister & Leary, 1995）、（合理的なレベルでの）高い自尊心の維持（e.g., C. M. Steele, 1988; Tesser, 1988）、周囲の社会的環境へのコントロール（の知覚）（e.g., Seligman, 1975）、存在を認められ社会や他者にとって意味のある存在（meaningful existence）であること（Solomon, Greenberg, & Pyszczynski, 1991）、への欲求である。これらの欲求はそれぞれ進化的な基盤を持ち、人にとって根源的な欲求であると考えられている（Spoor & Williams, 2007）。なぜ社会的排斥によって上記の4つの欲求が脅威にさらされるのか、以下に順に見ていく。

所属欲求 社会的排斥が他者や集団とのつながりを奪われる（失う）ことを指していることから、社会的排斥によって所属欲求が脅威にさらされることは明らかであると言ってもよいであろう。この点に関しては、多くの研究者の間で同意が得られていることである（e.g., Baumeister & Leary, 1995; Smart Richman & Leary, 2009; Williams, 2009; see also DeWall & Richman, 2011）。

自尊心 しばしば、社会的排斥は事前の説明なしに、突然行われる。そのため、排斥された者はその理由について考え、自身の言動等に瑕疵があったのではないかと考えてしまうこともあるだろう。こうしたことによって自尊心が低下してしまう恐れがある（Williams, 2009）。また、ソシオメーター理論（Leary & Baumeister, 2000）によると、自尊心は、他者からの受容や集団への所属の程度を感知する主観的な計器として機能する。そして、他者との関係に危機が生じた際には、自尊心の低下という形で警告が発せられる。

コントロール欲求 社会的排斥の多くは、一方的になされる。また、先述のように、被排斥者は前触れもなく排斥されてしまう場合もある。そのため、被排斥者はそれに抵抗したり、抗議したりする術

¹ 生物の進化において、それまで他の機能を果たすために存在していた形質が転用され、新しい環境下で有利な形質として機能すること。

を持たないことが多い。このように、排斥という出来事に対して被排斥者は自身のコントロールを及ぼすことが出来ず、被排斥者のコントロールの欲求が脅威にさらされる。

意味ある存在であることに対する欲求 排斥されることは、社会的な死を意味する。また、排斥された者は他者から注意を払われず、存在していないかのように扱われる。そのため、他者から存在を認められたい、という欲求が妨げられる。また、排斥を経験すると死に関連する思考へのアクセスビリティが上昇する (C. Steele, Kidd, & Castano, 2015)。死が顕現化することで、他者や社会にとって有意味な存在でありたいという欲求が高まる (cf. Solomon et al., 1991)。

1.2 被排斥経験後の反応—脅威を受けた欲求の充足—

先にみたように、社会的排斥は、所属、自尊心、コントロール、意味ある存在であること、の4つの欲求に影響を及ぼす。そして被排斥者は、脅威にさらされたこれらの欲求を充足させるような反応や行動を示す。このうち、自尊心や意味ある存在であることに対する欲求は、自己の能力等に関する自己認知や、他者からの評価というものが大きく関わっている。他方で、所属欲求やコントロール欲求は、例えば他者と社会的なつながりを作る、他者に対して影響力を行使する、といった社会的行動によって欲求を回復させることが可能であり、社会的行動と直結している。また、ソシオメーター理論によれば自尊心は他者や集団からの受容の程度を反映していることから、所属欲求とともに他者との社会的なつながりに関する欲求であると言える。あるいは、他者や社会にとって意味ある存在であることは、他者や社会に対して影響力を持つことによっても達成可能であり、コントロールの欲求と併せてとらえることができる (Williams, 2009; see also Bernstein, Sacco, Brown, Young, & Claypool, 2010)。そのため本研究では、社会的行動との関連が強い所属欲求とコントロール欲求の2つの欲求の観点から、被排斥経験後の社会的な行動による欲求回復に着目した。

1.2.1 所属欲求の回復

排斥を受けると所属欲求が脅威にさらされる。そのため、被排斥者は所属欲求を回復させようとする。実際、被排斥者が所属欲求を回復させようとする試みに関して、これまでの研究で多くの知見が示されている。

情報処理 他者に関する情報を処理する際、社会的な関係性についての情報を自発的に用いる (Sedikides, Olsen, & Reis, 1993) ように、社会的なつながりに関する情報は人の認知過程において非常に大きなウェイトを占める (for a review, see Baumeister & Leary, 1995)。そのため、他者から受容されている(と知覚する)程度によって、社会的な手がかりに向けられる注意や社会的な情報に

対するバイアスの程度が変化する。例えば、他者から受け入れられたいと思っている程度が強い人は、そうでない人と比べて、人物が描かれた曖昧な絵を見た際に社会的な関係の構築・維持・修復にまつわるようなストーリーを見出しやすい (e.g., Atkinson, Heyns, & Veroff, 1954)。

また、実際に被排斥経験の有無を操作した実験では、被排斥者において社会的な情報が記憶されやすいことが示された (Gardner, Pickett, & Brewer, 2000)。この実験の参加者は、まず他の参加者とのチャットに参加した。実際にはチャットはコンピュータープログラムによって制御されており、実在の参加者とのチャットではなかった。このチャットの内容によって排斥の有無が操作され、他者とのチャットに参加できる参加者と、参加できない参加者に分けられた。続いて参加者は、自身と同性の人物が書いたとされる日記を読んだ。日記の中には、個人的な出来事と、他者と共に経験した出来事の記述が含まれていた。その後、参加者は日記に記されていた出来事の想起を求められた。なお、参加者には、日記の内容に関して記憶テストが行われることはあらかじめ伝えられていなかった。実験の結果、チャットで排斥された参加者は、排斥されなかった参加者よりも、他者と共に経験した出来事に関する記述をよく記憶していた。この結果は、排斥されることで、社会的な情報に対して注意を向けるようになることを示している。

受容の手がかりへの注意 人の認知資源には限りがあるため、数多ある情報の中から注意を向けるべき対象を取捨選択しなければならぬ。そのため、現在の目標に応じて、目標と関連した情報に対して(ある程度自動的に)認知資源が割かれる (e.g., Gibson, 1979)。このことから、排斥されることで受容の手がかりとなる社会的な手がかりへの注意が増加すると考えられ、実際にそのことが実験によって示されている (DeWall, Maner, & Rouby, 2009; Wirth, Sacco, Hugenberg, & Williams, 2010)。

DeWall, Maner, et al. (2009) の実験1では、参加者はまず偽の性格テストを受けた。性格テストの結果のフィードバックにおいて、将来他者とのつながりに恵まれると伝えられる条件、将来を孤独に過ごすと言えられる条件、あるいは、病気やけがなどの不幸に見舞われると伝えられる条件のいずれかに参加者は割り振られた (cf. Twenge et al., 2001)。その後、3×3のマトリックス上に並べられた9つの顔の中から、ターゲットとなる顔(笑顔、悲しみの表情の顔、怒りの表情の顔、のいずれか1つ)を探し出すという課題に取り組んだ。なお、ターゲット以外は、ニュートラルな表情(無表情)の顔が呈示された。実験の結果、将来の排斥を予期した参加者は、他の条件の参加者と比べて、笑顔を見つけ出すのにかかる時間が短くなっていた。それに対して、悲しみ顔や怒り顔では、反応時間に差は見られなかった。さらに実験3では、同様の操作で将来の社会的排斥の予期の有無を操作した後、参加者に複数の刺激を呈示し、どの刺激に最も注目するか視線の動きを測定した。呈示された

刺激は、笑顔、悲しみ顔、怒り顔、ニュートラル顔、非社会的なポジティブな画像(e.g., 綺麗な風景)、非社会的なニュートラルな画像(e.g., 椅子)の6つだった。実験の結果、他の条件の参加者よりも将来の排斥を予期した参加者の方が、より長い時間笑顔を注視していた。対して、他の刺激に対する注視時間は、条件間で有意な差は見られなかった。このように、被排斥経験後に笑顔に対する注意が増加するのは、笑顔が友好的な対人的意図を示すサインとなる (e.g., Parkinson, 2005) ためだと考えられる。

笑顔と同様に、視線も受容に関する手がかりとなる。視線を合わせることが社会的相互作用の意図を表すのに対して、視線を逸らすことは拒絶の意図の表れとなる (e.g., Mason, Tatlow, & Macrae, 2005)。Wilkowski, Robinson, & Friesen (2009) の実験2では、参加者は自身が他者から受容された、あるいは排斥された経験を想起し、記述した。その後、パソコン上で以下のような課題に取り組んだ。課題では初めに、画面の中央に人の顔の画像が、視線を正面に向け参加者を正視した状態で表示された。その後 (500ms 後)、画像の人物の視線が左右のいずれかに向けられた。視線の移動の後 (50ms 後、もしくは600ms 後)、アスタリスク記号がパソコン画面の左右のいずれかに表示されるので、参加者はアスタリスク記号が表示された方向に対応するキーを押すことを求められた。前述の通り、他者の視線は重要な社会的な情報である。それゆえ、人には他者の視線を追従する反応傾向が先天的に備わっていて、またこの反応がかなり自動的・無意識的なものであることが知られている (for a review, see Frischen, Bayliss, & Tipper, 2007)。そのため、画面中央の顔画像が視線を向けた先にアスタリスク記号がある場合 (valid gaze-cue) と比べて、視線とは反対の方向にある場合 (invalid gaze-cue) の方が、反応に時間がかかってしまう。実験の結果、受容条件と排斥条件のいずれにおいても、valid gaze-cue の時よりも invalid gaze-cue の時の方が、反応時間が遅かったが、排斥条件においてこの傾向がより顕著だった。この結果は、社会的排斥を経験することによって他者の視線(の向く方向)に対する注意が増加することを示している。

向社会的行動と再親和行動 上述のように、排斥されると社会的な情報の処理が促進されたり、受容に関する社会的な手がかりに対する注意が増加したりする。これらはいずれも、被排斥経験後に再び他者とのつながりを作る、すなわち再親和を果たすにあたって、その手がかりを探すためであると考えられる。これまでの研究で、再親和の手がかりを探すだけでなく、実際に他者に対して向社会的行動 (prosocial behavior) をとったり、再親和を求めるようになったりすることが示されている。

社会的排斥を受けた人物は、社会的相互作用をする可能性のある他者に対して好意的に振る舞う (Maner et al., 2007)、後続の課題において尽力する (Jamieson et al., 2010)、集団に協力する

(Williams & Sommer, 1997)、といった向社会的な行動を示す。向社会的行動とは、他者に利益をもたらさる自発的な行動全般を指すが (久崎, 2006)、向社会的行動を取る際の動機の一つは、他者から承認されたい、という動機である (Batson, 1987)。被排斥経験は、他者から承認され受け入れられたいという動機を高め、向社会的行動を引き起こす引き金となると考えられる。また、集団や人間関係において、関わる人物が協力的であるかどうかというのは重要な問題であり (e.g., Cosmides & Tooby, 1992)、他者や集団に協力的な人は受容されやすい。そのため、排斥された人は他者や集団に協力することで、自身が受容される可能性を高めようとしていると考えられる。あるいは、好ましい人物や能力が高い人物は、社会的関係を結ぶ価値、つまり関係的価値 (relational value) があると認知され、他者から受け入れられやすい (Leary & Alenn, 2011)。社会的排斥を経験した際に他者に好意的に振る舞ったり、課題で尽力して能力を示したりするのは、これらの行為によって自身の関係的価値を他者に示していると考えられる。

また、Maner et al. (2007) は一連の研究で、社会的排斥を受けた人が、その後に再親和を求めようとする反応を示すことを明らかにした。実験1では、参加者は自身が他者から排斥された経験、受容された経験、あるいは実験前日のことを想起し、記述した。その後、学生が交流したり友人を作ったりすることを促すためのイベントに対して、どの程度興味を惹かれるか、開催されたら参加してみたいと思うか、といった質問に回答した。実験の結果、他の2つの条件と比べて、排斥された経験を想起した参加者の方が、他者との交流のためのイベントに興味を持ち、参加したいと思っていた。さらに実験2では、参加者は偽の性格テストのフィードバックにより、将来の受容を予期する条件、孤独を予期する条件、あるいは、病気やけがなどの不幸を予期する条件のいずれかに割り振られた。その後参加者は、続けて別の実験を受けてもらうと言われた。その際、一人で参加する実験と、何人かの参加者と一緒に取り組む実験があるが、参加者の希望を基にどちらに参加してもらうかを決めると伝えられ、他者と一緒に取り組む実験に参加したいと思う程度を尋ねられた。実験の結果、将来の排斥を予期した参加者は、他の条件の参加者と比べて、後続の実験を他者と一緒に行きたいと思う程度が高くなっていた。

1.2.2 コントロール欲求の回復

上述のように、被排斥経験後には、他者に対して向社会的に振る舞ったり、再親和を求めたりするような反応が見られる。他方で、それとは正反対のような反応、つまり他者への攻撃行動が生じるケースも知られている。現実の社会でも、アメリカでの銃乱射事件や日本での無差別殺傷事件などの背景に、犯人の社会からの孤立があったことが指摘されることも少なくない (e.g., 木村, 2014; Leary, Kowalski, Smith, & Phillips, 2003; 碓井, 2008)。また、実験的に社会的排斥の有無を操作した研

究においても、社会的排斥を経験した者が、他者を酷評し、より大きく不快なノイズをより長く聴かせ、(相手は辛い食べ物が苦手だと知らされていても)辛いソースをたくさん食べさせようとする事が示されている (e.g., Buckley, Winkel, & Leary, 2004; DeWall, Twenge, Bushman, Im, & Williams, 2010; DeWall, Twenge, Gitter, & Baumeister, 2009; Twenge et al., 2001)。

向社会的行動や再親和行動は、被排斥経験によって脅威にさらされた所属欲求を回復させるための反応であった。それに対して、攻撃行動はコントロール欲求回復のための反応であると考えられる (cf. Williams, 2009)。攻撃行動はコントロール感と関連していて (Tedeschi, 2001)、例えば、他者に対するコントロールを回復させるために他者に攻撃を与える場合がある (Depret & Fiske, 1993)。実際に、被排斥経験後に別の手段でコントロール感を得ることができた場合には、他者に攻撃的に振る舞わないことが示されている (Warburton, Williams, & Cairns, 2006)。この実験では、実験の最後に実施された課題において、辛い食べ物が苦手だと言っている他者に対して食べさせた辛いソースの量が、攻撃行動の指標として用いられた (cf. Lieberman, Solomon, Greenberg, & McGregor, 1999)。実験は、以下のような流れで行われた。実験が始まると、実験者が作業のため実験室からいったん出ていった。その際に、一緒にいた他の2名の参加者(実際には実験のサクラ)のうちの1名が実験室内に置いてあったボールを持ち出し、参加者たちとキャッチボールを始めた。その際、受容条件に割り振られた参加者には他の者と均等な割合でボールが回ってきたが、排斥条件の参加者には初めに3度回ってきた以降はボールが全く来ず、アイコンタクト等も取られなくなってしまった。その後、実験者が実験室に戻ってきて、参加者たちはそれぞれ個室に案内され、実験が続けられた。次に参加者は、後続の課題の為という名目で、様々な種類の不快な音を全部で10回聞かされた。その際、半数の参加者は、各ノイズの再生時間やノイズとノイズの間のインターバルの時間が不規則に変化する状態で聴かされた。残りの参加者は、ノイズの再生時間が一定で、なおかつノイズ間のインターバルを自身で決める(好きなタイミングで次のノイズを再生する)ことができた。その後、参加者は先述の味覚に関する課題に取り組んだ。実験の結果、排斥され、なおかつ聴かされるノイズをコントロールできなかった参加者は、他の3つの条件の参加者と比べて、4倍以上もの辛いソースの量を相手に食べさせようとしていた。対して、聴かされるノイズをコントロールできた参加者は、排斥されても、辛いソースを相手に食べさせようとした量は他の条件の参加者と変わらなかった。この結果は、排斥を経験した後に、コントロール感を回復することができれば攻撃行動が減少することを示唆している。このことから、被排斥経験後の攻撃行動が、排斥を受けることで脅威にさらされたコントロール感を回復させるための反応であると考えられる。

1.2.3 所属欲求の回復か、コントロール欲求の回復か

排斥されることで所属欲求とコントロール欲求が脅威にさらされる。そのため、排斥経験後には所属欲求やコントロール欲求を回復させるような反応が見られる。所属欲求の回復の為の反応は、向社会的行動や再親和行動である。それに対して、コントロール欲求の回復のための反応は、攻撃行動である。このように、被排斥経験後における所属欲求の回復とコントロール欲求の回復には、相反するような行動が必要となる。それでは、排斥された後に向社会的な行動を取るのか、それとも反社会的(つまり、攻撃的)な行動を取るのかというのは、何をきっかけにして分化するのであろうか。その一つとして考えられるのが、新たな社会的なつながりを得ることができる見込みの有無である(DeWall & Richman, 2011)。社会的なつながりを再び得ることができる、すなわち所属欲求を回復させることができる可能性があるときには、向社会的行動や再親和を試みるが、そうでないときには向社会的行動を取ったり、再親和を求めたりしないと考えられる。向社会的行動には、時間、物質的資源、身体的エネルギーといったコストが伴うため、社会的なつながりが得られる可能性が低い場合に向社会的に振る舞うことは得策ではない。また、受容される可能性が低い人物に対して再親和を求めたとしても、更なる排斥を経験する危険性が高く、そのような事態は避けなければならないだろう。あるいは、被排斥経験によってコントロール欲求が損なわれるのは、他者との相互作用においてコントロールを及ぼすことができない、つまり、排斥が予期せず一方的に行われ、また、他者と相互作用を取ろうとしても取ることができないことによるとすれば、他者と社会的なつながりを得て(能動的に)相互作用をすることができれば、コントロール欲求も満たされると考えられる。この予測の傍証として、社会的排斥に関する実験のメタ分析を行った研究を挙げることができるだろう。Gerber & Wheeler (2009) によるメタ分析の結果、コントロール欲求を満たす機会がない、あるいはコントロール欲求と所属欲求を同時に満たせる機会がある場合には、所属欲求を満たすような行動(i.e., 向社会的行動)が見られることが明らかになった。

また実際に実験でも、社会的排斥経験後に、社会的なつながりを得ることができる可能性の有る相手に対しては好意的に振る舞うが、可能性がない相手には好意的に振る舞わないことが示されている(Maner et al., 2007, Study 6)。この実験の参加者は初めに、自己紹介のビデオを撮影した。そして、別の部屋にいる同性の実験パートナー(実際には実験のサクラ)が撮影したビデオと交換し、互いに相手の自己紹介ビデオを視聴した。ビデオ視聴後、排斥条件では、ビデオを見たパートナーと一緒に実験するのは嫌だと言って帰ってしまった、と伝えられた。対して統制条件では、パートナーが済まさないといけない用事があったのを急に思い出して帰ってしまった、と伝えられた。その後、帰ってしまった実験パートナーの埋め合わせとして新しい同性のパートナー(こちら、実際には

実験のサクラ)を紹介され、別の課題に取り組んだ。その課題では参加者は評価者の役を割り当てられ、パートナーが描いた絵の創造性を20点満点で評価することが求められた。評価にあたって、実験者から参加者に5ドルが与えられた。その中から参加者が絵に付けた評点1点あたり25セントがパートナーに与えられ、残ったお金は一時的に預かり全実験が終了した後に評価者役の参加者で均等に分配する、と参加者に伝えられた。パートナーの絵を評価する際、半数の参加者には課題後にパートナーと実際に会う機会があると伝えられ、残りの参加者にはパートナーと会うことはないと言われた。実験の結果、パートナーと会う機会があると言われた場合、統制条件の参加者よりも排斥条件の参加者の方が、パートナーの絵を高く評価し多くの金額を与えていた。しかし、パートナーと会うことはないと言われた場合には、排斥条件と統制条件の間でパートナーの絵の評価に差が見られなかった。

他の研究においても、同様の知見が得られている。Jamieson et al. (2010) の実験 2 では、参加者はサイバーボール課題によって受容条件か排斥条件に割り振られた。サイバーボール課題後、参加者はサックード課題と呼ばれる認知課題に取り組んだ。サックード課題では画面の中央に注視点が表示された後、手がかり刺激(cue)が画面の左右どちらかに現れた(400ms)。参加者は、この手がかり刺激を必ず見るように教示されていた。手掛かり刺激呈示後には、矢印の形をしたターゲット刺激(target)が画面の左右どちらかに現れた(150ms)。参加者は、ターゲット刺激の矢印が上・左・右のどの方向を向いていたのか、なるべく早く、かつ正確にキーを押して回答することが求められた。この課題には、手がかり刺激とターゲット刺激が画面の同じ側に表示される順サックード課題と、手がかり刺激と反対側にターゲット刺激が呈示される抗サックード課題の2つのパターンがあった。順サックード課題では、手がかり刺激とターゲット刺激が同じ位置に表示されるため、すばやく反応することが可能である。それに対して抗サックード課題では、手がかり刺激に向けられていた注意を画面の反対側に表示されたターゲット刺激に注意を移す必要があるため、反応に遅延が生じる。もし、課題への動機づけが高まっていれば、抗サックード課題における反応時間が短くなる(遅延が減少する)と予測される。

実験の結果、自身の課題の成績が誰にも知られないと伝えられた場合、受容条件の参加者よりも排斥条件の参加者の方が、抗サックード課題における反応時間が遅かった。対して、自身の成績を他の参加者も見ることができると伝えられた場合、排斥条件の参加者の抗サックード課題の反応時間は遅くならず、受容条件の参加者の成績と同程度であった。この結果は、他者に自身の能力を示すことができる場合、被排斥者は課題において努力することで自身の関係的価値の高さを示そうとしていたと考えられる。また別の研究(Baumeister et al., 2005)では、排斥されると自己制

御がうまく行えなくなってしまうことが示されたが、社会的なスキルを測定するための課題であると伝えられた上で自己制御の程度を測定した場合には、排斥された後でもうまく自己制御を行うことができていた。この結果も、社会的スキルが高いことを示すために、被排斥経験条件の参加者は自己制御課題において良い成績を残そうとしていたと考えられる。

他方では、被排斥経験後に所属欲求を回復できなかった場合は他者に攻撃的に振る舞い、所属欲求を回復できた場合には攻撃的に振る舞わない、ということを示すような知見も得られている。例えば、排斥を受けた実験参加者でも、実験者と友好的な相互作用をしてささやかでも社会的つながりを感じた場合や、自分の家族や友人について考えた場合には、被排斥経験後における攻撃性の高まりが見られなかった (Twenge et al., 2007)。また、DeWall et al. (2010) の実験では、参加者は計4人、あるいは5人でキャッチボールをするサイバーボールに取り組んだ。その際、参加者にボールを回してくれる参加者の人数が、0人、つまり誰からもボールを回されない条件から、全員からボールを回される条件まで、参加者にボールを回すプレイヤーの数が段階的に操作された。実験の結果、ボールを回してくれる人が誰もいなかった場合には、後続の課題で攻撃性の高まりが見られたが、1人でもボールを回してくれる人がいれば、攻撃性は大幅に低下していた。これらの知見は、排斥を経験した後に、社会的なつながりを得られる場合には攻撃性は高まらず、逆に、つながりを得ることができなかった場合には攻撃的な行動が生じる、と捉えることができる。

2章 被排斥経験後の集団類似性の知覚と再親和

2.1 排斥経験後、誰に再親和を求めるか

以上で見てきたように、被排斥経験後には所属欲求とコントロール欲求が脅威にさらされ、それらの欲求を回復させるような反応が生じる。しかし、社会的なつながりを持つことは心身の適応に重要であり、社会的なつながりを欠くことが心身の不適応につながる恐れがあることから、被排斥経験後には社会的なつながりを再び得ること、すなわち再親和を果たすことが重要であると考えられる。また、被排斥経験によってコントロール欲求が損なわれるのは、他者との相互作用においてコントロールを及ぼすことができないためであり、コントロール欲求は社会的なつながりを得ることによっても回復可能であると考えられる。この点を鑑みても、やはり被排斥経験後には再親和を果たすことが重要であると言えるであろう。

しかし、再親和を求める際、誰に対してでも再親和を求め向社会的に振る舞うわけではない。他者から受容されるために向社会的に振る舞うには、物質的、あるいは身体的・心理的な資源が必要となるため、受容の見込みが低い、あるいは無い相手に対して向社会的に振る舞うのは得策ではない。また、再親和を求めた相手から再び排斥されるようなことは避けなければならないであろう (DeWall & Richman, 2011)。そのため、排斥された人は、再親和を求めるにあたって自身を受容してくれる可能性のある人物を探し出す必要があると考えられる。実際にこれまでの研究によって、排斥を経験すると受容の手がかりを峻別できるようになる、ということが示されている。

例えば、DeWall, Maner, et al. (2009)では、被排斥経験後に笑顔に対する注意が増加することが示された。これは、笑顔が友好的な対人的意図を表し (e.g., Parkinson, 2005)、受容の手がかりとなるためだと考えられる。ただし、それは笑顔が表情筋の自動的な収縮によって現れた真正の笑顔 (Duchenne smile; Ekman, Davidson, & Friesen, 1990) であった場合である (Brown & Moore, 2002)。他方で、人は表情を偽ることが可能で、作り笑顔をすることも可能である。意図的に作られた作り笑顔 (non-Duchenne smile) はネガティブな情動や意図を隠すことも可能である (Ekman, Friesen, & O'Sullivan, 1988)。そのため、作り笑顔は必ずしも受容の手がかりとはならず、再親和を求める際には真正の笑顔と作り笑顔を峻別する必要がある。真正の笑顔と作り笑顔では、活性化する表情筋が異なると言われており、真正の笑顔では眼輪筋と呼ばれる目の周りの筋肉が収縮するのに対して、作り笑顔では眼輪筋の収縮はあまり見られない (Duchenne, 1990/1862)。よく「笑顔だが

目は笑っていない」と言われるような表情は、この眼輪筋の収縮が見られない作り笑顔を指していると考えられる (cf. 高橋, 大坊, & 趙, 2007)。このような筋肉の収縮の違いから、真正の笑顔と作り笑顔を見分けることが可能である。M. J. Bernsteinらは、一連の研究で排斥経験によって真正の笑顔と作り笑顔を、より正確に峻別できるようになることを示した。彼らの実験では、参加者は排斥経験、受容経験、あるいは実験前日の出来事のうちのいずれかを想起し、記述した。その後、画面上に映し出された人物の表情が中性表情から笑顔に変化する映像(およそ4秒)を、20名分視聴した。なお、20名のうち、半数が真正の笑顔を表出していて、残りは作り笑顔だった。参加者はそれぞれの笑顔をみて、真正の笑顔であると思うか、それとも作り笑顔であると思うか、回答した。実験の結果、排斥を想起した参加者は、他の2つの条件の参加者と比べて、真正の笑顔と作り笑顔をより正確に見分けられるようになり (Bernstein, Young, Brown, Sacco, & Claypool, 2008)、また、作り笑顔を表出した人物よりも真正の笑顔を表出した人物をより好意的に評価する傾向が強くなる (Bernstein et al., 2010) ことが示された。

このように、排斥を受けた人物は受容と排斥の手がかりを弁別しようとし、そして実際に弁別できるようになる。これをカテゴリー認知の観点から検討したのが、Sacco et al. (2011) の研究である。排斥とは無関係に人には元来、カテゴリー内の差異よりもカテゴリー間の差異を大きく知覚する傾向がある (Tajfel & Wilkes, 1963)。このようなカテゴリー認知は、はじめ非社会的な事物において示されたが、その後の研究により表情(感情表出) (Calder, Young, Perrett, Etcoff, & Rowland, 1996; Etcoff & Magee, 1992) や人種 (Levin & Beale, 2000) といった、社会的な刺激においても生じることが明らかになった。Sacco et al. (2011) は、排斥をされると、受容と排斥に関わる社会的な手がかりに基づくカテゴリーにおいて、このカテゴリー認知の傾向がより強まると予測した。彼らの研究ではまず、サイバーボール課題によって受容条件か排斥条件のいずれかに参加者を割り振った。その後、受容と排斥に関わる社会的手がかりとして笑顔と怒り顔、あるいは黒人の顔と白人の顔の異同を判断させる課題を実施した。判断のターゲットとなった画像は、笑顔と怒り顔、あるいは白人と黒人の顔を合成させた画像で、その合成割合を笑顔100%/怒り顔0%(あるいは白人100%/黒人0%)から笑顔0%/怒り顔100%(あるいは白人0%/黒人100%)まで10%ずつ変化させた11通りの合成画像だった(図2-1参照)。参加者にはこの中から合成割合が同じ画像2つ、もしくは合成割合が20%異なる画像2つのいずれかが提示された。前者の場合は同じ画像が提示された、後者の場合は異なる画像が提示された、と参加者は判断しなければならなかった。また、合成割合が0%/100%から30%/70%(もしくは70%/30%から100%/0%)までの画像を用いた試行をカテゴリー内での判断、40%/60%から60%/40%までの画像を用いた試行をカテゴリー間での判断とした。なお、異なる2つの画

像を呈示した場合は、2つの画像の合成割合の平均値を用いて分類した (e.g., 20%/80%の画像と40%/60%の画像を呈示した場合は、30%/70%、すなわちカテゴリー内での判断とした)。前述のとおり、笑顔が受容の可能性のシグナルとなることから、笑顔と怒り顔を見分けることは再親和の相手を選ぶうえで重要である。同様に、外集団成員よりも内集団成員の方が社会的つながりを構築できる可能性が高く (Correll & Park, 2005)、集団成員性を見極めることも再親和獲得の可能性を高めると考えられる。

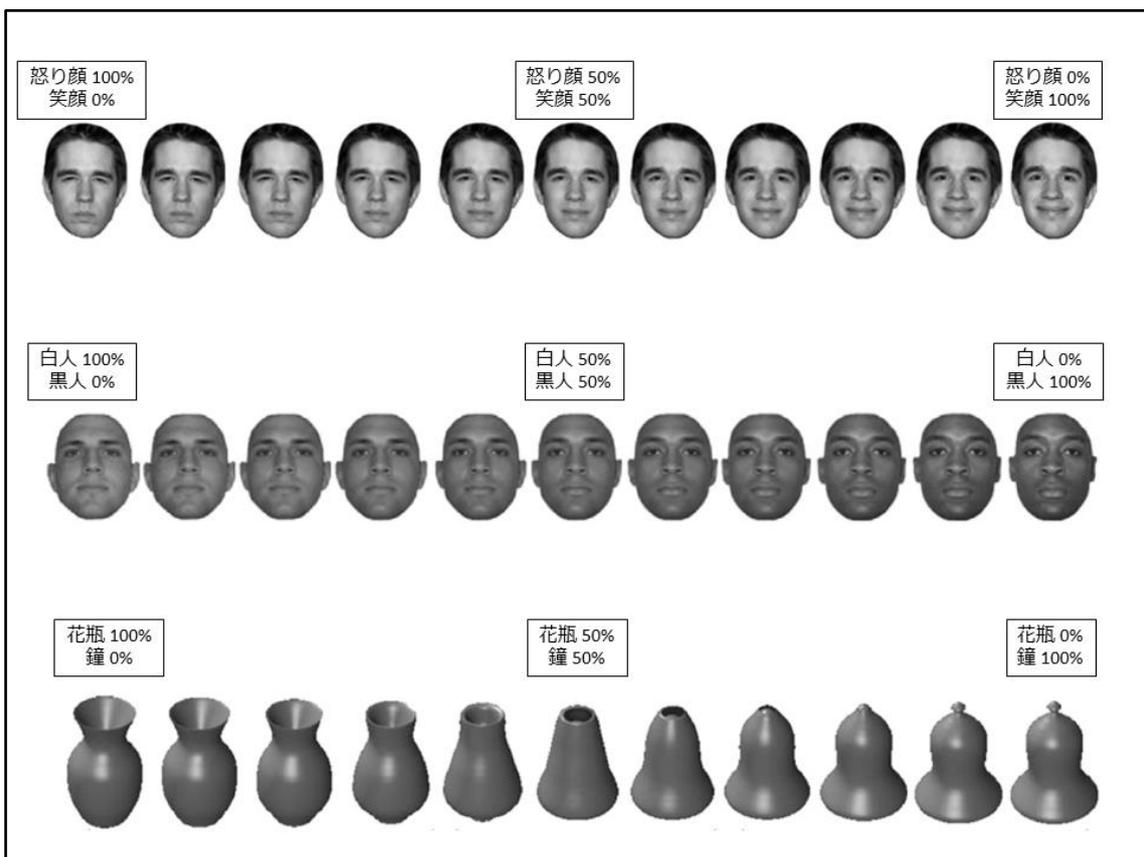


図 2-1. Sacco et al. (2011) で用いられた合成画像の例(Sacco et al. (2011) より作成)

実験の結果、提示された2つの画像の合成割合の差は常に同じであったにもかかわらず、どちらの条件においてもカテゴリー内(e.g., 笑顔と笑顔/白人と白人)での判断よりもカテゴリー間(笑顔と怒り顔/白人と黒人)での判断の方が、正答率が高い傾向が見られた。さらに、排斥条件では、カテゴリー内での判断よりもカテゴリー間での判断の方が、正答率がより高くなっていた。つまり、いずれの条件でもカテゴリー認知の傾向が確認されたが、排斥条件ではこの傾向がさらに強まっていた。他方で、非社会的なカテゴリー(鐘と花瓶)の合成画像(図2-1参照)を用いた場合には、受容条件

と排斥条件でカテゴリ認知の傾向に違いは見られなかった。このように Sacco et al. (2011) では、被排斥経験後には受容と排斥に関わる社会的カテゴリにおいて、カテゴリ間の差異をより正確に区別できるようになるが、カテゴリ内の差異を区別できなくなることが示された。これは、排斥経験後に再親和の相手を見極めるために、受容と排斥に関わる社会的な手がかりのカテゴリにおいて、カテゴリ間の境界をより明確に弁別するようになったことを示唆している。

2.2 再親和相手の見極めと集団類似性知覚

上述のように、排斥を受けると、受容と排斥に関わる社会的手がかりのカテゴリにおいて、カテゴリ間の差異を区別できるようになり、反対にカテゴリ内の差異は区別できなくなることが示された (Sacco et al., 2011)。このことから、カテゴリ内の事象同士の類似性の知覚が高まっていることが読み取れる。

カテゴリ化とは、さまざまな事物や事象を分類し1つの範疇にまとめることを言う。このカテゴリ化のプロセスには、類似性の知覚が関連していると考えられている。カテゴリ化のプロセスに関してはいくつかの理論が唱えられているが、例えばプロトタイプモデルでは、各カテゴリにそのカテゴリ全体を代表するような中心的な表象 (i.e., プロトタイプ) が存在している、とする。プロトタイプは必ずしも一つの特定の事例ではなく、個々の事例の平均、あるいは要約と言えるようなものである。そして、そのプロトタイプとの類似性によって、事象が当該カテゴリに属する事例であるのかが決定される (e.g., Rosch & Mervis, 1975; Rosch, Mervis, Gray, Johnson, & Boyes-Braem, 1976)。また事例モデルでは、プロトタイプの存在を仮定せず、個々の事例同士の類似性に従ってグループ化され、カテゴリが形成されるとしている。そして、新しい事例に遭遇した際には、すでにカテゴリに分類されている事例と比較され、類似性をもとにカテゴリに分類される (e.g., Medin & Schaffer, 1978)。これらのモデル以外にも、類似性に基づいてカテゴリ化がなされる、とするモデルが提唱されており (for a review, see 坪井, 2003)、類似性の知覚がカテゴリ化において重要であることが分かる。他方で、事例の類似性によってカテゴリが形成されるというボトムアップ的な処理を想定する立場に対して、人々が有する知識や理論によってカテゴリ化がなされる、とする、トップダウン的な処理を想定する立場もある (e.g., Murphy & Medin, 1985)。この理論ベースのモデルでは、すでに有している体制化された知識(理論)に基づき、個々の事例がカテゴリに分類される、とする。ただし、理論ベースのモデルと、プロトタイプモデルや事例モデル等の類似性によるカテゴリ化のモデ

ルは、必ずしも互いに排反なものではなく、これらのモデルを統合したモデルも考えられている (cf. 京屋, 2007; 坪井, 2003)。また、生後3から4か月の乳児であっても、形状の類似性からカテゴリーを形成することが報告されており (Eimas & Quinn, 1994)、カテゴリー化において事例の類似性の知覚が重要な役割を果たしていることは間違いないであろう。

本研究では、受容と排斥に関わる社会的な手がかりのカテゴリーの中でも集団(group)²に着目した。自己と他者がどの集団に属するのか、すなわち集団成員性は人の行動や認知に影響を与える重要な要素の一つである。実際に、集団間関係に関する社会心理学研究が盛んに行われ、多くの理論やモデルが打ち立てられている (for a review, see Taylor & Moghaddam, 1994 野波・岡本・小杉訳, 2010)。また、集団間関係だけでなく、個人の認知や行動においても集団に関する情報が影響を与える。例えば、他者を認知する際には、所属する社会的カテゴリーに基づく情報(i.e., ステレオタイプ)が自動的に活性化する (e.g., Devine, 1989)。これらを踏まえ、本研究では集団成員性を用いて実験を行った。集団、特に内集団と外集団のカテゴリー化にも、集団の成員同士の類似性の知覚が関連している。内集団とは自身が所属する集団のことであり、それに対して、外集団は自身が所属していない集団のことを指す。社会的なカテゴリー化においても、非社会的な事象におけるカテゴリー化と同様の原理が働き、集団内の成員同士の類似性が高く、集団間の差異が大きくなるようなカテゴリーに基づいて内集団と外集団のカテゴリー化が行われる (Hogg & Turner, 1987; Turner et al., 1987; see also McGarty, 1999)。

それでは、集団のカテゴリー化において、類似性はどのようにして知覚されるのであろうか。この点に関して事例モデルでは、非社会的な事象のカテゴリー化と同様に、集団内の個々の成員同士の類似性の知覚が重要であるとされた (e.g. Linville, Salovey, & Fischer, 1986; Linville, Fischer, & Salovey, 1989)。しかし B. Parkらは、成員間の類似性が知覚されるだけでなく、抽象化されたイメージとして、集団全体の類似性の知覚も重要な働きを持つと論じた。実際に、Park & Judd (1999) の研究では、参加者は集団に属する成員が、ある性格特性の次元において、どのような散らばりを持っているのかを推測することができていた。参加者は、集団内の成員同士の類似性に着目して散らばりを推測していたと考えられる。他方で、参加者は、集団全体として、集団のステレオタイプのな特徴(あるいはプロトタイプのな特徴)を多くの成員が共有している(すなわち同質的である)のか、そ

² 英語の group という単語は、人や物の集まりや群れなどを指す。心理学、特に社会心理学においても group の語が指す範囲は広く、性別や人種・民族のような規模が大きく成員同士が直接の相互作用を持たないような社会的カテゴリーに対しても、group の語が用いられてきた。日本においては group の語に対して「集団」という訳語を用い、理論や概念の呼称等においても group を集団と訳すことが多い。これにない、本研究においても group に対して集団という訳語を用いた。

れとも多様性を持っているのか、ということも知覚していた。このように、集団のカテゴリー化においては、集団内の個々の成員同士の類似性の知覚と、抽象化された集団全体としての類似性の知覚が重要であると考えられる。

以上を踏まえ、本研究では、集団の類似性の知覚を、集団内の成員間の類似性の知覚から成り立つ要素と、集団の全体的なイメージとしての類似性の知覚から成り立つ要素を併せ持つものとして定義した。Sacco et al. (2011) では、特定の事例間での類似性の知覚が問題とされていた。他方で、上述のように、集団の類似性の知覚には、集団全体に対する類似性の知覚の要素も含まれる。そこで本研究では、先行研究では検討されなかった、抽象化された集団全体に対する類似性の知覚も含めた集団の類似性の知覚を対象とし、被排斥経験後に集団の類似性の知覚が高まるのか検討することとした。また本研究の実験では、集団の類似性の知覚の測定には自己報告の尺度だけでなく、Park & Judd (1990) で用いられた課題を参考に、その集団に属する人々が、ある性格特性（集団に典型的な特性、あるいは非典型的な特性）の評価次元においてどのように分布していると思うか、分布を表すヒストグラムを作成してもらい、ヒストグラムから分散の値を算出した。この分散の値が小さいほど、集団を類似していると知覚していることになる。この課題において、ヒストグラムを作成するにあたっては、個々の事例を想起し、事例同士を比較して類似性を判断していく必要がある。他方で、ヒストグラムの山の高さや分布の裾の広さを推測するにあたっては、集団に典型的特性を有する人が多いのかといったことや、成員がその典型的特性を同質的に有しているのかといったことを判断しなくてはならない。そのため、この課題によって、集団の類似性知覚の2つの要素、すなわち、個体間の類似性の知覚と、全体的なイメージとしての集団の類似性の知覚のいずれも測定が可能となる (cf. Park & Judd, 1990)。

以上の議論をまとめると、本研究の仮説の一つ目は以下の通りとなる。排斥を経験しなかった場合と比べて、排斥を経験した後の方が、集団の類似性の知覚が高まるだろう。なお、先行研究ではカテゴリーにおける視覚的な類似性について検討されていた。しかし、集団や集団成員の認知において、集団成員の性格特性も重要な要素の一つであり、例えばステレオタイプや外集団同質性効果などは、集団内の成員の性格特性に対する類似性の知覚が関連している。そこで、本研究では集団の類似性を性格特性の点から検討した。

2.3 再親和相手の集団成員性、および集団の類似性知覚が再親和に与える影響

先に述べたように、集団の類似性の知覚は内集団と外集団の弁別と関連しており、集団内の成員同士を似ていると知覚するほど、内集団と外集団をより弁別できるようになる (e.g., Hogg & Turner, 1987; Turner et al., 1987)。被排斥経験後には、自身を受容している可能性のある他者に対して再親和を求める必要があり、そのため、被排斥経験後には集団の類似性の知覚が高まることで、内集団と外集団の成員を峻別できるようになると考えられる。被排斥経験後に内集団と外集団を弁別するのは内集団成員に対して再親和を求めるためであることから、被排斥経験後に外集団成員には再親和を求めず、内集団に成員に対して再親和を求めると予測される。管見の限り、この点について実証的に検討した研究はなされていない。そこで本研究では、被排斥経験後に再親和を求めた程度が、外集団に対してよりも内集団に対しての方が高くなるのか、検討した。

加えて人は、外集団成員を脅威だと知覚しやすい (e.g., Hart et al., 2000; Olsson et al., 2005)。例えば、内集団の見知らぬ成員の顔写真を見たときには、繰り返し呈示されることにより脳の扁桃体の賦活が徐々に低下していった、つまり馴化が生じたのに対して、外集団の見知らぬ成員の顔写真の場合には繰り返し呈示された後でも扁桃体の賦活が強いままであったことが報告されている (Hart et al., 2000)。扁桃体は恐怖感情を喚起するような刺激を呈示されることによって賦活する (e.g., Morris et al., 1996) が、刺激が繰り返し呈示されると馴化が生じる (e.g., C. I. Wright et al., 2001)。外集団成員の写真を繰り返し呈示しても扁桃体の賦活が馴化しないことは、外集団が脅威として知覚されていることを示していると解釈できる。このことから、排斥を受け集団に対する類似性の知覚が高まり外集団と内集団を峻別するようになることで、外集団をより脅威だと知覚しやすくなる可能性が考えられる。このように、被排斥経験後には外集団と内集団を峻別するだけでなく、外集団成員をより脅威であると知覚しやすくなり、外集団に対して再親和を求めるのが困難になることが予測される。

他方で、被排斥経験による集団類似性の知覚の高まりは、内集団に対しても生じると予測される。さらに、内集団に対しては、内集団の類似性を高く知覚するだけではなく、自身と他の内集団成員をより類似していると知覚するようになる (渡辺・唐沢, 2012)。これは、内集団と自己の連合を強めることが、被排斥経験を含む自己への脅威に対する防衛的機能を果たすためである (渡辺, 2014)。内集団の類似性を高く知覚し、また、自身と内集団成員を類似していると知覚すると、内集団への同一視が高まる (Leach et al., 2008) ことから、被排斥経験後には内集団への同一視の程度が高まると考えられる。内集団への同一視が高まると、内集団やその成員に対してより愛着を感じ (e.g.,

Karasawa, 1991)、また、内集団成員をより信頼するようになる (e.g., Han & Harms, 2013; Kramer, Hanna, Su, & Wei, 2001)。以上より、被排斥経験後に内集団の類似性を高く知覚するようになることで、内集団成員に対する再親和が促進されることが予測される。

上記のように、被排斥経験後には、(内集団と比較して)外集団成員に対しては再親和を求めないと考えられる。最小条件集団パラダイムを用いた研究によれば、実際には大きな意味を持たないであろう些細な手がかり(e.g., 絵画の好み)によって内集団と外集団に分けた場合でも、集団間の行動や知覚などに様々な影響をもたらす (e.g., Tajfel, 1970; Turner, 1975)。そのため、そのような包括性の低い集団をもって自己をカテゴリー化した場合にも、被排斥経験後に外集団に再親和を求めにくくなる、ということが生じると考えられる。しかし、いつでも外集団成員との再親和を避けるべきなのであろうか。先に見たように、外集団成員は、外集団の成員であるというだけで脅威だと知覚されやすい (e.g., Hart et al., 2000; Olsson et al., 2005)。進化の過程を顧みれば、内集団とは自らが共に生活を営む人々の集団であり、そうではない集団の人々は自分たちに害をなす可能性が高かったであろう。よって、外集団であるということは、それだけで十分な脅威となり得るものであったと推測される。しかし、現代では人々はより複雑な社会を形成し、様々な集団に属するようになった。社会的カテゴリーはその包括性において階層構造を成していると考えられ (Turner et al., 1987)³、社会的属性や社会的な役割や地位といったものをあまり伴わないような、包括性の低い集団(e.g., 学校のクラス)の成員として自己を捉えることも可能である。そのような包括性の低い社会的カテゴリーによって内集団と外集団を区別した場合には、外集団の成員であるというだけでは実質的な脅威とはならないであろう。その場合には、単に外集団成員であるという理由だけで再親和を求めなくなってしまうことは、社会的なつながりを得る機会を逸してしまっているとも言える。

排斥されてしまった後に再び社会的なつながりを得ることの重要性については、本稿でもこれまでに述べてきた通りである。それでは、外集団成員に対して再親和を求められるようになるには、どのような要因が必要となるであろうか。すでに述べたように、外集団に対する類似性の知覚が高まることで外集団成員を脅威であると知覚する傾向が高まり、外集団成員に対して再親和を求めなくなると考えられる。このことから、外集団の類似性を低く知覚すること(言い換えると、外集団の多様性を知覚するようになること)で外集団への脅威の知覚が低減し、その結果、外集団に対して再親和を求める程度が高まるのではないだろうか。本研究では以上のように予測し、これを検討した。

以上の議論をまとめると、本研究における二つ目、および三つ目の仮説は以下の通りとなる。

³ ここで言う階層構造は、社会的な地位や階級、価値等の高低を意味するものではない。

排斥されると、他者との再親和を求めるようになるだろう。その際、外集団成員に対してよりも、内集団成員に対しての方が、再親和を求める程度が高くなるだろう。また、外集団に対する類似性の知覚の程度が高い時よりも低い時の方が、被排斥経験後に外集団成員に対して再親和を求める程度が高くなるだろう。

3章 社会不安と被排斥経験後の再親和

これまでに述べてきたように、排斥をされた後には再親和を求めるような反応が見られる。しかし、一部の人々は、被排斥経験後であっても再親和行動を取らない可能性が指摘されている。それは、社会不安の高い人々である。本章では、社会不安と被排斥経験後の再親和との関連を見ていく。

3.1 社会不安とは

社会不安 (social anxiety) とは、現実または想像上の対人場面において、自身が評価されること、あるいは評価されることへの予期から生じる不安である (Schlenker & Leary, 1982)。社会不安をもたらす要因としては、複数の要因が考えられている。例えば、社会的なスキルが低い人は、他者とうまく相互作用をできなかった経験を多く持ち、また、他者との相互作用における失敗の想像をしやすく、その結果、社会不安が生じる。他方で、実際に有している社会的スキルの高低に関わらず、社会的スキルが低いと本人が主観的に捉えていると、社会不安が生じることも示されている。あるいは、シャイネスなどの性格特性が、社会不安を生む要因として挙げられる場合もある。また、別の研究では、古典的条件付けによって社会不安が生まれる、とする立場もある。これは、元来は社会的な場面对する不安は持っていないくとも、社会的な場面でネガティブな経験を繰り返す (e.g., 言い間違いをして笑われる、話しかけたのに返事をしてもらえない) ことで、社会的な場面に不安が条件づけられる、というものである (for a review, see Schlenker & Leary, 1982)。あるいは、社会的排斥も社会不安と関連しており、社会的排斥の経験は社会不安を引き起こす要因の一つである (MacDonald & Leary, 2005)。

社会不安は、社会的場面において誰しもが経験しうる不安である。しかし、社会的場面に遭遇した際に、社会不安を抱きやすい人々がいる。そのような人々を、社会不安の高い人 (高社会不安者) と呼ぶ。社会不安の高い人は、社会的な場面对する不安を抱きやすいだけでなく、社会的な場面における認知や行動においても、社会不安の影響を受けやすい。例えば、社会不安の高い人は、他者からの拒絶を恐れ、社会的な脅威を避ける傾向がある (e.g., Kashdan, McKnight, Richey, & Hofmann, 2009)。また、社会不安の高い人は、社会的な場面における潜在的な脅威や、社会的な場面で否定的な結果が起こる頻度を過度に高く見積もりやすい、といった認知的なバイアスを持つ

(Foa et al., 1996)。そして、新しい社会的相互作用の場面でもネガティブな期待を形成しやすく (e.g., Maddux, Norton, & Leary, 1988)、新規の社会的相互作用場面においても苦痛を予期してしまい、結果として相互作用を持とうとしなくなってしまう (Heimberg, Liebowitz, Hope, & Schneier, 1995)。このように、社会不安の高い者は他者との相互作用に困難を抱えやすい。そのため、社会的なつながりの量も、社会不安の低い人と比べて少ない傾向がある。大学および専門学校の新生を対象とした調査 (河崎・岩永・生和, 2004) では、社会不安の高い学生よりも低い学生の方が、大学・専門学校入学前の時点における友人の数が多かった。このように、社会不安の高い人は社会不安の低い人と比べて、保有する社会的なつながりが少ない。また、大学・専門学校入学直後(4月)では現在所属する学校における友人の数に、社会不安の高低による差は見られなかった、しかし7月になると、社会不安の高い学生よりも低い学生の方が、友人の数が多くなっていた。また別の研究では、高社会不安者が相互作用の相手から排斥されやすいということも示されており (Papsdorf & Alden, 1998)、社会不安の高い人は社会的なつながりの構築や維持が難しいことを示唆している。

3.2 社会不安と被排斥経験後の再親和

上記のように、社会不安の高い人々は、社会的な場面において不都合を抱えやすい。本研究では特に、社会不安の高い人が排斥された際に、再親和を求めるのが困難である、ということに着目した。これまでの研究では、社会不安の高い人においては被排斥経験後であっても再親和を求めるような反応が生じない可能性が示されている。Maner et al. (2007) の実験 4 の実験参加者は、実験 6 (本稿 1.2.3 参照)と同様に、一緒に実験するのは嫌だという理由で実験パートナーに帰られてしまう排斥条件か、済まなければならない用事があったのを急に思い出したという理由で帰られてしまう統制条件に割り振られた。その後、新しい実験パートナーの写真を呈示され、写真に写った人物の印象について答えるよう求められた。その結果、社会不安の低い人々では、統制条件よりも排斥条件の方がパートナーを友好的な人物であると知覚していた。しかし、社会不安の高い人は、排斥された後もパートナーを友好的であると知覚していなかった。人は自己の社会的な動機や欲求に沿うように他者の特性を知覚するという知見 (Maner et al., 2005) と照らし合わせると、他者を友好的な人物であると知覚するようになるのは、その人物と友好的な関係を持ちたいと思っているためだと考えられる。他方で、他者を友好的でないと感じている場合には、その人物に対して関係構築の欲求を抱いていないと考えられる。

また、実験 5 では、実験参加者は実験 4 や実験 6 と同様に、一緒に実験するのは嫌だという理由で実験パートナーに帰られてしまう排斥条件か、済まさなければならない用事があったのを急に思い出したという理由で帰られてしまう統制条件に割り振られた。その後、新しい同性の実験パートナーと別の課題に取り組み、実験パートナーが書いた絵を評価した。実験の結果、社会不安の低い人々では、統制条件よりも排斥条件の方がパートナーの絵を高く評価していた。しかし、社会不安の高い人は、排斥された後でもパートナーの絵を高く評価することはなかった。さらに Mallott et al. (2009) では、上記の実験の手続きに加え、絵の評価をパートナーに伝えるところを想像し演じてもらい、その様子をビデオで撮影した。実験の結果、Maner et al. (2007) と同様、社会不安の低い参加者は排斥されるとパートナーの絵を高く評価していたが、社会不安の高い参加者は排斥されてもパートナーの絵を高く評価していなかった。さらに、パートナーに評価を伝える際の参加者の話し方や視線等を分析した結果、社会不安の低い参加者では、統制条件と比べて排斥条件の方が、適切なアイコンタクトを取る、あたたかく声をかける等、より社会的に振る舞っていた。対して、社会不安の高い参加者では、統制条件と比べて排斥条件の方が、非社会的に振る舞っていた。

これらの結果は、社会不安の高い人は排斥をされても他者に対して好意的に振る舞わず、再親和を得る可能性が難しい可能性を示している。しかし、社会不安の高い人々も、排斥された後には所属欲求が高まっており (Zadro, Boland, & Richardson, 2006)、社会的なつながりを必要としないわけではない。Kashdan, Elhai, & Breen (2008) によれば、社会不安の高い人は、他者と相互作用を持つことの利点はわかっていながらも、相互作用における社会的な脅威に対して不安を感じてしまう。社会的なつながりを持つことの重要性や、社会的排斥を受けることで心身に不適応が生じる恐れがあることを考えると、社会不安の高い人々が社会的排斥経験後に再親和を得られない可能性があることは、非常に重要な問題となる。また、被排斥経験後の攻撃性の高まりを抑制するといった観点からも、再親和をいかに果たすべきか、というのは検討すべき課題であろう。しかし、管見の限り、この点に関して検討する研究はなされてこなかった。そこで本研究では、社会不安の高い人が、どのような相手に対してであれば再親和を求めることができるのかを検討することを目的とした。この点を検討するにあたって、本研究では再親和相手の集団成員性と、集団の類似性知覚に着目した。

2章で見たように、被排斥経験後には集団の類似性の知覚が高まり、内集団と外集団を峻別するようになると考えられる。また、外集団を内集団と峻別するようになることで、外集団を脅威であると知覚しやすい (e.g., Hart et al., 2000; Olsson et al., 2005) 傾向が強まると予測される。これらの結果、被排斥経験後には外集団成員よりも内集団成員に対しての方が、再親和を求める程度が高くなると

予測される。加えて、この傾向は社会不安の高い人においてより顕著に表れると予測される。社会不安の高い人は社会的な脅威を過度に高く見積もりやすく (Foa et al., 1996)、社会的な脅威を避ける傾向がある (Kashdan et al., 2009)。社会不安の高い人はこのような特徴を持つことから、被排斥経験後に社会不安の低い人よりも更に外集団を脅威であると知覚し、外集団との再親和を避けるだろうと予測される。他方で、内集団に対しては、すでに述べたように内集団への同一視が高まり、内集団やその成員に対してより愛着を感じ (e.g., Karasawa, 1991)、また、内集団成員をより信頼するようになる (e.g., Han & Harms, 2013; Kramer et al., 2001) と考えられる。加えて、外集団と比べて内集団との相互作用は不安を喚起しにくい (e.g., Plant & Devine, 2003; Shelton et al., 2005; Trail et al., 2009)。以上より、社会不安の高い人であっても、被排斥経験後に内集団成員に対してであれば再親和を求めることができるであろうと予測される。

それでは、社会不安の高い人々も、外集団成員に対して再親和を求められるようになるには、どのような要因が必要となるであろうか。前述の通り、外集団に対する類似性の知覚が高まることで外集団成員からの排斥の予期が高まり、外集団成員に対して再親和を求めなくなると考えられる。社会不安の高い人は、他者との相互作用に対して脅威を感じやすい。しかし、社会不安の高い人も、常に相互作用を避けようとしているわけではなく、他者と相互作用を取りたいという欲求とそれらの活動に対する不安の間で葛藤を感じている (Kashdan et al., 2008)。このことから、再親和における不安を取り除くことができれば、社会不安の高い人々も外集団成員に対して再親和を求めることができると考えられる。つまり、外集団の類似性を低く知覚し外集団の多様性を知覚することで外集団に対する脅威の知覚が低減すると、外集団成員に対して再親和を求める程度が高まるのではないだろうか。本研究では以上のように予測し、これを検討した。

以上の議論をまとめると、2章3節で示した本研究の二つ目の仮説に対して、社会不安による調整効果が想定される。すなわち、被排斥経験後に他者との再親和を求める際、外集団成員に対してよりも内集団成員に対しての方が、再親和を求める程度が高くなるだろうが、この傾向は社会不安の高い人においてより顕著に表れるだろうと予測される。

4章 本論文の目的と実証研究の概要

4.1 本論文の目的および仮説

以上の議論を整理し、本研究の目的および仮説をまとめると以下の通りとなる。

人は他者とのつながりなくして生きていくことはできないため、社会的排斥を経験した後は新たな他者との再親和を果たそうとする。しかし、社会不安の高い人は、被排斥経験後であっても他者に対して再親和を得るのが困難である可能性がある。社会的なつながりを欠いた状態のままいることは心身の不適応を招きかねず、避けるべき状態であろう。また、排斥されてしまったあとに再親和を得られなかった場合には、他者に対する攻撃性が高まる恐れもある。そこで本論文では、社会不安の高い人が、どのような相手、あるいはどのような条件下であれば他者に対して再親和を求めることができるか検討することを目的とした。

上記の点を検討するにあたって本研究では初めに、再親和に影響を与えると考えられる、被排斥経験後に生じる認知的な変化について検討する。上述の通り、社会的排斥を経験した者は他者に対して再親和を求める。再親和を求める際には、相手の人物や集団が自身を受容してくれる可能性があるかどうかを判断する必要がある。そのため、排斥を経験すると、受容と排斥に関わるような社会的な手がかりを区別できるように、認知的な変化が生じる。具体的には、排斥されると、受容と排斥に関わる社会的な手がかりにおいてカテゴリー間の差異をより正確に峻別できるようになる一方で、カテゴリー内に関しては、その差異を見極められなくなる。このことは、カテゴリー内の事例同士の類似性の知覚が高まっていることを示していると考えられる。本論文では、排斥経験後にはカテゴリーの類似性の知覚が高まると予測し、集団に対する類似性の知覚の点から検討する。

上記のように、排斥を受けると、集団に対する類似性の知覚が高まると予測される。各集団内の成員同士を似ていると知覚するほど内集団と外集団を峻別するようになり (Hogg & Turner, 1987; Turner et al., 1987)、その結果、被排斥経験後には外集団成員よりも内集団成員に対して再親和を求めるようになると予測される。また、人は外集団成員を脅威だと知覚しやすい (Hart et al., 2000; Olsson et al., 2005)。そのため、排斥を受け集団に対する類似性の知覚が高まり外集団と内集団を峻別するようになると、外集団成員をより脅威だと知覚しやすくなると考えられる。このことから、外集団成員に対して再親和を求めにくくなることが予測される。特に、社会不安の高い人々は社会的な脅威を大きく見積もりやすいことから、外集団に対して再親和を求めないという傾向が社会不安の

低い人よりも社会不安の高い人において顕著に表れると予想される。対して、内集団に対しては、社会不安の高低に関わらず再親和が促進されると予測される。集団の類似性の知覚は、内集団に対しても生じる。さらに、内集団に対しては、成員同士の類似性の知覚が高まるだけでなく、内集団の成員と自身の類似性の知覚も高まる。これによって内集団に対する集団同一視が強まり、内集団成員に対する愛着や信頼が高まる。また、内集団成員との相互作用は、外集団成員との相互作用と比べて不安を喚起しにくいことから、社会不安の高い人であっても、内集団成員に対しては再親和を求めることが可能であると考えられる。

このように、被排斥経験後には外集団成員に対する再親和が阻害される。その原因が、外集団に対する類似性知覚が高まることにあるとするのであれば、外集団に対する類似性の知覚を低減させることができれば、外集団の多様性を知覚し、外集団に対する脅威の知覚が低減すると考えられる。その結果、外集団成員に対しても再親和を求められるようになると予測される。本研究では、この予測に基づき、外集団に対する類似性の知覚を低減させた時、被排斥経験後に外集団成員に対して再親和を求める程度が高まるか検討した。

以上より、本研究で検討する仮説は以下の3点である。

仮説1. 排斥を経験しなかった場合と比べて、排斥を経験した後の方が、集団の類似性の知覚が高まるだろう。

仮説2. 排斥されると、他者との再親和を求めるようになるだろう。その際、外集団成員に対してよりも、内集団成員に対しての方が、再親和を求める程度が高くなるだろう。この傾向は、社会不安の高い人々において、顕著に現れるだろう。

仮説3. 外集団に対する類似性の知覚の程度が高い時よりも低い時の方が、被排斥経験後に外集団成員に対して再親和を求める程度が高くなるだろう。

4.2 実証研究の概要

4.2.1 本研究で扱う集団、集団成員性

一口に内集団—外集団と言っても、それぞれの集団は質的に異なっている。集団に対する認知や集団間の関係性は、集団ごとに異なる場合もある (e.g., Lickel et al., 2000; Lickel, Hamilton, & Sherman, 2001)。最小条件集団パラダイムではそのような側面を捨象し、社会的カテゴリーそれ自体が持つ影響を検討できるという大きなメリットがある。最小条件集団パラダイムとは、内集団への好意的・協力的な行動 (i.e., 内集団ひいき) や外集団に対する差別を生起させる要因を検討すべく、

H. Tajfelらが一連の研究で用いた手法である (e.g., Tajfel, 1978; Tajfel, Billig, Bundy, & Flament, 1971)。この実験手法は、対面での相互作用や他の集団成員に関する情報、集団間の関係性といった、内集団ひいきや外集団差別を引き起こすと考えられるような要因を排除し、必要最低限の集団状況を設定することを目的に考え出された。その後は、単に社会的なカテゴリー化を行うことが集団間における行動や判断、知覚等に与える影響を検討するためにも用いられるようになった (e.g., 顔認知における自集団バイアス, Bernstein, Young, & Hugenberg, 2007; フォールス・コンセンサス効果, Krueger & Clement, 1994; 集団同質性効果, Ostrom & Sedikides, 1992)。これまでの研究で、最小条件集団を用いた実験でも、内集団よりも外集団をネガティブに評価するバイアスが見られる (e.g., S. C. Wright, Aron, McLaughlin-Volpe, & Ropp, 1997) ことが報告されている。そのため、最小条件集団を用いた場合でも、被排斥経験後の再親和において本研究が想定したような社会的カテゴリーの影響が見られると考えられる。

実在の集団を用いた研究の場合によく用いられる社会的カテゴリーの一つが、人種 (ethnicity) や民族 (race) 集団である。進化の過程において、民族や人種を区別することが、人の集団生活における適応的問題を解決するうえで重要であった。そのため、民族や人種は基本的で本質的なカテゴリーとして働くようになった (Gil-White, 2001; Hirschfeld, 1998)。あるいは、民族や人種は、偏見や差別、戦争・紛争などの現実の社会問題とも深く関連していることから、そのような社会問題の解決という観点からもよく研究の題材として用いられる。また、性別(ジェンダー)も用いられることが多い。例えば、生殖においては当然のことながら男女のカテゴリーが問題となってくるように、性別もまた基本的で本質的なカテゴリーであると言える。実際、乳児でも男女の区別を行うこと、性別に基づいた判断や行動がかなり幼い時期(1歳前後)から数多く見られることが分かっている (for a review, see Powlisha, 2004)。かたや、大学生を対象とした実験では、所属する大学や大学での専攻など、大学に関する社会的カテゴリーが用いられることも多い。所属する大学や大学での専攻は、その成員を個々に認識することが難しく、1つの“集まり”(group)として知覚される。また、多くの大学生にとって、大学は最も身近な社会的カテゴリーであり、具体的なイメージを持ちやすいであろう。そのため、大学生を対象にした実験では比較的好く用いられているカテゴリーである (e.g., Brewer, Manzi, & Shaw, 1993; 原島・小口, 2007; 池上, 2001; Pickett, Silver, & Brewer, 2002; 寺口・釘原, 2015; Wilder & Thompson, 1980)。本研究では、本質的な社会的カテゴリーとして考えられる、性別(ジェンダー)を用いた。民族や人種も本質的な社会的カテゴリーではあるが、日本ではあまり馴染みがないカテゴリーであると言える。例えば、2015年時点での人口に占める移民の割合を見てみると、OECD諸国の平均が11.6%なのに対して日本は1.6%と圧倒的に低い (United Nations, 2016)。

また、日本国内においても民族問題が存在していないわけではないにもかかわらず、「日本は“単一民族国家”である」といった(誤った)認識が持たれることも少なくない(小熊, 1995)。こういった点を鑑み、民族や人種のカテゴリーは用いず、性別を用いることとした。また、本研究の実験の参加者は大学生であるため、参加者にとって身近なカテゴリーとして、所属大学を用いた。

4.2.2 実証研究の概要

本研究の目的は、社会的排斥経験後に生じる認知上の変化と、その認知上の変化が被排斥経験後の再親和に与える影響を検討することである。具体的には、再親和相手の集団成員性と、集団に対する類似性の知覚に着目し、本章冒頭でも示した3つの仮説を検討することを目的としている。まず、排斥を経験しなかった場合と比べて、排斥を経験した後の方が、集団に対する類似性の知覚が高まるだろうと予測される(仮説1)。また、排斥されると、他者との再親和を求めるようになるが、外集団成員に対してよりも、内集団成員に対しての方が、再親和を求める程度が高くなるだろうと予測される。加えて、この傾向は、社会不安の高い人々において、顕著に現れるだろうと予測される(仮説2)。しかし、外集団に対する類似性の知覚の程度が低減した時には、被排斥経験後に外集団成員に対して再親和を求める程度が高くなるだろうと予測される(仮説3)。第二部では、以上の3つの仮説を検討するために行った実証研究について説明していく。

「5章 社会的排斥が集団の類似性の知覚に与える影響」では、被排斥経験後には集団の類似性の知覚が高まるという仮説(仮説1)を、2つの実験によって検討した。続く「6章 再親和相手の集団成員性が被排斥経験後に再親和を求める程度に与える影響」では、被排斥経験後には再親和を求める程度が高くなるが、その程度は外集団成員に対してよりも内集団成員に対しての方が高く、さらに、この傾向は社会不安の低い者において顕著に表れるであろうという仮説(仮説2)を、2つの実験によって検討した。最後に、「7章 集団類似性の知覚の低減が被排斥経験後に外集団成員に再親和を求める程度に与える影響」では、外集団の類似性の知覚を低減させることで、外集団成員に対しても再親和を求められるようになるだろうという仮説(仮説3)を、2つの実験によって検討した。

第二部 実証研究

5章 社会的排斥が集団の類似性の知覚に与える影響

人は社会的動物であり、他者とのつながりなくしては生きていくことが出来ない (Baumeister & Leary, 1995)。そのため、排斥された者は他者に対して向社会的に振る舞い、再親和を得ようとする (e.g., Jamieson et al., 2010; Maner et al., 2007)。しかし、誰に対しても向社会的に振る舞ったり、再親和を求めたりするわけではない。なぜならば、他者に対して向社会的に振る舞うことはコストが必要であり、受容を見込めないような相手にまで向社会的に振る舞うことは得策ではないためである (see DeWall & Richman, 2011)。また、再親和を求めた結果、さらなる排斥を受けるという事態は避けなければならないだろう。実際、これまでの研究で、排斥を受けた人が、その後再親和を得られる可能性のある人物に対しては向社会的に振る舞ったが、再親和を得られる可能性が低い(あるいは無い)人物に対しては向社会的に振る舞わなかった (Jamieson et al., 2010; Maner et al., 2007) ということを示されている。

このように、排斥を受けた後に再親和を求める際には、受容される見込みがあるのかどうかを見極める必要がある。そのため、排斥を受けた人は、被排斥者は受容と排斥の手がかりを弁別しようとするだけでなく、実際に弁別できるようになる。これをカテゴリー認知の観点から検討したのが、Sacco et al. (2011) の研究である。排斥とは無関係に、人には元来、カテゴリー内の差異よりもカテゴリー間の差異を大きく知覚する傾向がある。Sacco et al. (2011) は、排斥をされると、受容と排斥に関わる社会的カテゴリーの認知において、受容と排斥の手がかりを弁別するためにこの傾向がより強まると予測した。実験の結果、受容された場合と比べて、被排斥経験後にはカテゴリー間の差異をより正確に区別できるようになるが、カテゴリー内の差異を区別できなくなることが示された。このことから、カテゴリー内の事象同士の類似性の知覚が高まっていることが読み取れる。以上より、排斥されると、カテゴリー内における類似性を高く知覚するようになると考えられる。そこで本研究では社会的カテゴリーの中でも集団成員性に着目し、被排斥経験後に集団の類似性の知覚が高まるか2つの実験を通じて検討した。

5.1 実験1

実験1は、質問紙実験を実施した。架空のシナリオを用いて排斥条件あるいは受容条件に参加者を割り振り、その後、集団の成員同士をより類似していると知覚するようになるか検討した。この実

験では、集団のカテゴリとして性別を用いた。具体的には、男性参加者にとっては男性が内集団で、女性が外集団ということになる(女性参加者にとっては、その逆)。

5.1.1 方法

実験参加者と実験計画 東京大学の学生 88 名 (男性 33 名、女性 55 名; 年齢 $M = 19.5$, $SD = 0.8$) が参加した。参加者は排斥条件か受容条件のいずれかにランダムに割り当てられた。各条件の参加者の人数は、排斥条件が 43 名(男性 29 名、女性 14 名)、受容条件が 45 名(男性 34 名、女性 11 名)だった。

排斥の操作 初めに、参加者にシナリオの呈示を行った。参加者には SNS (ソーシャルネットワーキングサービス) 利用に関する調査であると伝え、とある架空の SNS サイトにおける出来事について書かれたシナリオが書かれているので、実際にシナリオに描かれているような場面に遭遇したところを想像しながら読むように求めた。制限時間は 3 分間とした。呈示したシナリオは、架空の SNS 内で他のユーザーとオンラインチャットをしている場面を描いたもの (約 970 字) で、条件によりその内容が一部異なっていた。排斥条件では、初めはチャットにうまく参加できていたものの、次第に会話に混ざることができなくなっていく、最終的には誰からも話しかけられず会話に参加できなくなったため、チャットから退出した、というシナリオが書かれていた。対して、受容条件では、他のチャット参加者との会話にうまく混ざることができたものの、インターネット回線の不都合が生じてしまいやむなくチャットから退出することになってしまった、というシナリオが書かれていた。なお、シナリオの全文は付録 A に記した。

集団の類似性知覚の程度の測定 シナリオ呈示後、シナリオに関するいくつかの質問に回答を求めた。この質問は、実験の冒頭で説明した実験目的の信憑性を保つためのもので、仮説とは無関係のものだった。続いて、男性をどの程度類似しているだと知覚しているのか、「全体として男性は似ていると思う」と「男性の価値観や意見は一致していると思う」の 2 項目で尋ねた。同様に女性に関しても、上述の項目の男性の部分女性に替えた 2 項目で尋ねた。いずれも、「まったくあてはまらない」(1 点)から「とてもよくあてはまる」(7 点)の 7 件法だった。

操作チェック 続いて、排斥の操作チェックを行った。操作チェックは、Zadro et al. (2004) で用いられていたものの中で、被排斥感に関する 3 項目を本実験の内容に沿うように表現を改め、用いた。具体的には、「自分はチャットの部外者だったと思う」、「チャットの他の参加者から自分が受け入れられていなかったと思う」、「チャットの間、他の参加者とのつながりを感じることができていたと思う」(逆転項目)の 3 項目だった。いずれも、「まったくあてはまらない」(1 点) から「非常にあてはまる」(7 点)の 7 件法で尋ねた。

実験後のアンケート、およびデブリーフィング 最後に、実験に関するアンケートへの回答を求め、そこで実験の目的に気付いた参加者がいなかったかどうかを確認した。アンケートへの回答終了後、参加者に実験の目的等の説明が記された書面を配布し、実験は終了した。

5.1.2 結果

排斥の操作チェック 被排斥感に関する3項目の合算平均値を求め、被排斥感の指標とした ($\alpha = .73$)。この指標についてt検定を行った結果、受容条件 ($M = 3.27, SE = 0.17$) よりも排斥条件 ($M = 4.70, SE = 0.17$) の方が、被排斥感の指標が高かった ($t(86) = 6.00, p < .001, Hedge's g = 1.27$)。この結果は、排斥条件の参加者において被排斥感が高まっていたことを表している。よって、シナリオによる排斥の操作は有効であったと言える。

集団の類似性知覚 参加者の性別に合わせて、内集団と外集団に対する類似性知覚の程度の指標を作成した。具体的には、男性参加者では「全体として男性は似ていると思う」と「男性の価値観や意見は一致していると思う」の2項目の合算平均を内集団の類似性知覚、女性参加者では「全体として女性は似ていると思う」と「女性の価値観や意見は一致していると思う」の2項目の合算平均を内集団の類似性知覚とした(外集団の類似性知覚は、この逆)(内集団 $r = .41, p < .001$; 外集団 $r = .54, p < .001$)。

この指標に対して 2 (シナリオ: 受容/排斥) \times 2 (集団成員性: 内集団/外集団) の混合要因計画の分散分析を実施した(表 5-1)。その結果、いずれの主効果、交互作用も有意ではなかった(シナリオの主効果 $F(1,86) = 2.01, p = .154, \eta^2_p = .02$; 集団成員性の主効果 $F(1,86) = 0.17, p = .683, \eta^2_p = .00$; 交互作用 $F(1,86) = 2.71, p = .103, \eta^2_p = .03$)。

交互作用が有意ではなかったものの、単純主効果検定を行った。その結果、外集団に対する類似性知覚においてシナリオの単純主効果が有意で ($t(172) = 2.09, p = .038, d = .63$)、受容条件より排斥条件の方が、類似性知覚の程度が高くなっていた。しかし、内集団に対する類似性知覚に関しては、シナリオの単純主効果は有意ではなかった ($t(172) = 0.37, p = .712, d = .15$)。集団成員性の単純主効果は、いずれの条件でも有意ではなかった(排斥条件 $t(86) = 1.44, p = .154, d = .30$; 受容条件 $t(86) = 0.89, p = .378, d = .14$)。

上記の結果は、異性(i.e., 外集団)に対しては、被排斥経験後に類似性の知覚が高まっていたことを表しており、予測と一致するものであった。しかし、同性(i.e., 内集団)に対しては被排斥経験後も類似性の知覚は高まっていなかった。

表 5-1. 各集団に対する類似性知覚の程度 (カッコ内は標準誤差)

	内集団	外集団
排斥条件	3.19 (0.21)	3.50 (0.21)
受容条件	3.08 (0.21)	2.89 (0.21)

5.1.3 考察

実験1の目的は、排斥されると集団の類似性を高く知覚するようになるのか検討することであった。性別カテゴリーを用いて実験を行った結果、異性(i.e., 外集団)に対しては、被排斥経験後に類似性の知覚が高まっていた。この結果は仮説を支持するものであった。しかし、同性(i.e., 内集団)に対しては被排斥経験後でも類似性の知覚は高まっておらず、仮説を支持するような結果は得られなかった。

被排斥経験後に内集団に対する類似性の知覚が高まっていなかった理由の一つとして、被排斥経験が自己への脅威として働いた可能性が考えられる。自己に脅威が及ぶと、自己を高揚させようとする動機が強まる。内集団を類似していないとみなす背景には、内集団成員の独自性を認めることで内集団(ひいては、そこに所属する自己)を肯定的に捉えようとする動機が存在している可能性がある(see Wilder, 1984)。そのため、個人の動機が反映されやすいと考えられる自己報告の尺度以外の方法を用いて、集団の類似性の知覚を測定する必要がある。また、実験1で用いた尺度では、集団全体に対する抽象化されたイメージとしての類似性の知覚のみを測定していた可能性がある。そこで実験2では、集団内において性格特性があてはまる程度がどのように分布していると思うか、想像上のヒストグラムを作成させ、個体間の類似性の知覚を含めた集団の類似性知覚を測定した。また、実験1ではシナリオを用いて排斥を操作したが、参加者は実際に排斥を経験したわけではない。そこで実験2では、サイバーボール課題を用い、実験室で排斥状況を参加者に経験してもらい、集団に対する類似性知覚が変化するか検討した。

5.2 実験2⁴

実験2は、実験室実験を実施した。参加者にはサイバーボール課題を通じて排斥あるいは受容を経験してもらい、その後、集団に対する類似性の知覚の程度を測定した。評定の対象となる社会的カテゴリーとしては、所属する大学と性別に関する4つの集団を用いた。所属大学に関しては、参加者が所属する一橋大学と慶応義塾大学を用いた。慶応義塾大学は、入学試験の難易度や卒業

⁴ 実験2は、津村・村田(2016)で発表した内容を博士論文の主張に従って構成しなおしたものである。

生の就職先などに関して、一橋大学の引き合いに出されることが比較的多い大学である。参加者にとっては、一橋生が内集団で慶応生が外集団となる。また、性別に関しては、男性と女性を用いた。男性参加者にとっては前者が内集団で後者が外集団となり、女性参加者にとってはその逆となる。

5.2.1 予備調査

実験で用いる性格特性語について検討するため、実験参加者とは別の一橋大学の学生 28 名（男性 12 名、女性 16 名；年齢 $M = 19.6$, $SD = 1.3$ ）の協力のもと、予備調査を実施した。調査では、一橋生、慶応生、男性、女性の各集団について、16 の性格特性語について、まったくあてはまらない人を 0 ポイント、とてもよくあてはまる人を 10 ポイントとして、集団のメンバーの平均点はどのくらいだと思いか、11 件法で評定を求めた。評定結果から、対になる集団において、一方の集団にあてはまるが他方の集団にはあてはまらないと評定されたものを選び出した。選定された性格特性語、および評定結果は以下の通りだった（表 5-2）。

調査の結果、一橋生に典型的な特性として「几帳面な」（一橋生 $M = 6.75$, $SE = 0.31$ ；慶応生 $M = 5.39$, $SE = 0.29$ ； $t(27) = 3.80$, $p = .001$, $r = .59$ ）と「現実的な」（一橋生 $M = 6.71$, $SE = 0.34$ ；慶応生 $M = 5.50$, $SE = 0.24$ ； $t(27) = 3.47$, $p = .002$, $r = .56$ ）、慶応生に典型的な特性として「大胆な」（一橋生 $M = 4.54$, $SE = 0.30$ ；慶応生 $M = 6.32$, $SE = 0.26$ ； $t(27) = 5.05$, $p < .001$, $r = .70$ ）と「自己主張の強い」（一橋生 $M = 5.00$, $SE = 0.30$ ；慶応生 $M = 6.68$, $SE = 0.27$ ； $t(27) = 4.02$, $p < .001$, $r = .61$ ）が選定された。

また、男性に典型的な特性として「大胆な」（男性 $M = 6.32$, $SE = 0.26$ ；女性 $M = 5.36$, $SE = 0.31$ ； $t(27) = 3.10$, $p = .004$, $r = .51$ ）と「現実的な」（男性 $M = 5.96$, $SE = 0.38$ ；女性 $M = 5.14$, $SE = 0.31$ ； $t(27) = 1.34$, $p = .193$, $r = .25$ ）、女性に典型的な特性として「感情的な」（男性 $M = 5.11$, $SE = 0.29$ ；女性 $M = 7.18$, $SE = 0.27$ ； $t(27) = 5.48$, $p < .001$, $r = .73$ ）と「几帳面な」（男性 $M = 5.07$, $SE = 0.34$ ；女性 $M = 6.46$, $SE = 0.30$ ； $t(27) = 3.33$, $p = .003$, $r = .54$ ）が選定された。それぞれのペアにおいて、一方の集団に典型的な特性を他方の集団に非典型的な特性とした。

なお、「現実的な」の評定値は男女で統計的に有意な差は見られなかったものの、男性の評定値がニュートラルポイントよりも有意に大きかった（ $t(27) = 2.56$, $p = .016$ ）のに対し、女性の評定値はニュートラルポイントと差が見られなかった（ $t(27) = 0.46$, $p = .650$ ）ため、男性に典型的な特性（i.e., 女性に非典型的な特性）とした。

表 5-2. 実験 2 で用いた性格特性語のリスト

	典型的特性	非典型的特性
一橋生	几帳面な、現実的な	大胆な、自己主張の強い
慶応生	大胆な、自己主張の強い	几帳面な、現実的な
男性	大胆な、現実的な	感情的な、几帳面な
女性	感情的な、几帳面な	大胆な、現実的な

5.2.2 方法

実験参加者 実験参加者は一橋大学の学生 63 名(男性 48 名, 女性 15 名; 年齢 $M = 19.5$, $SD = 1.4$)だった。参加者は排斥条件か受容条件のいずれかにランダムに割り当てられた。各条件の参加者の人数は、排斥条件が 31 名(男性 24 名, 女性 7 名)、受容条件が 32 名(男性 24 名, 女性 8 名)だった。

手続き 1セッションあたりの参加者は 3 名から 4 名で、互いに顔が見えない状態で実験は実施された。参加者にはカバーストーリーとして、想像力が対人認知に関する課題の遂行に及ぼす影響に関する研究であると教示した。初めに、想像力のトレーニングのゲームとして、サイバーボール課題に取り組んでもらった。ここで、排斥の操作が行われた。その後、各集団の成員の特性について評定を求め、集団の類似性をどの程度知覚しているか測定した。最後に、操作チェック項目を含むアンケートへの回答を求めた。アンケートへの回答終了後、デブリーフィングを行い、実験は終了した。各手続きの詳細は、以下の通りである。

排斥の操作 排斥の操作を行うため、サイバーボール課題 (Williams et al., 2000; Williams & Jarvis, 2006) を実施した。この課題は参加者とコンピュータープログラムのプレイヤー 2 名の計 3 名で行うキャッチボールゲームで、パソコン上で行われた。課題の内容により、参加者は受容条件と排斥条件のいずれかに割り振られた。受容条件では、参加者を含む全プレイヤーにほぼ均等な割合でボールが回って来た。対して排斥条件では、参加者にはゲームの序盤に 2 回ボールが回って来たが、それ以降はボールが全く来ず、他の 2 名のプレイヤー間でキャッチボールが行われた。参加者には、視覚的なイメージを作るトレーニングであり、相手のプレイヤーはコンピューターのプログラムであると教示した。これまでの研究で、コンピューターのプログラムであると伝えた場合であっても、

サイバーボールの相手が実在の人物であると伝えた場合と同程度の影響を所属欲求に与えることが示されている (Zadro et al., 2004)⁵。

類似性の知覚の程度の測定 対人認知に関する課題として、参加者に以下のような課題に取り組んでもらった。この課題では、集団名と性格を表す単語がペアで呈示された。1 つの集団につき 4 つの性格特性(典型的特性 2 つ、非典型的特性 2 つ)の評定を求めた。集団と特性の組み合わせは、前掲の表 5-2 の通りである。それぞれについて、まったくあてはまらない人を 1 ポイント、とてもよくあてはまる人を 7 ポイントとしたとき、その集団に属する人々が 1 ポイントから 7 ポイントまでの間で、どのように分布していると思うか、質問紙に記載された説明と回答例にならって、分布を表すヒストグラムを作成するよう求めた。この課題の説明に用いた用紙は、付録 B として付した。

排斥の操作チェック 類似性の知覚の程度の測定後、実験に関するアンケートに回答してほしいと伝え、そこで排斥の操作のチェックを行った。具体的には、「ゲームの部外者だと感じていた」、「他のプレーヤーから受け入れられているとは、あまり思わなかった」、「ゲームの間、少なくとも1人のプレーヤーとのつながりを感じていた」(逆転項目) の 3 項目に、「全くあてはまらない」(1 点) から「とてもあてはまる」(7 点) の 7 件法で評定を求めた。

5.2.3 結果

操作チェック 排斥の操作チェックに用いた 3 項目を合算し ($\alpha = .64$)、被排斥感の指標とした。この指標に対して t 検定を行った結果、受容条件 ($M = 4.02, SE = 0.23$) よりも排斥条件 ($M = 5.61, SE = 0.15$) の方が、所属欲求指標が高かった ($t(52.71) = 5.85, p < .001, Hedge's g = 1.44$)。この結果は、排斥条件の参加者において被排斥感が高まっていたことを表している。よって、サイバーボール課題による排斥の操作は有効であったと言える。

集団の類似性の知覚 作成されたヒストグラムについて各線分の長さを mm 単位で測定し、度数とみなして分散を算出した。そして、内集団に典型的な特性、内集団に非典型的な特性、外集団に典型的な特性、外集団に非典型的な特性、それぞれ 2 項目の分散の平均値を求めた ($r_s > .46, p_s < .001$)。この値が小さいほど、各集団の成員同士が類似していると知覚していたと考えられる (e.g., Park & Judd, 1990)。大学に関しては、一橋生を内集団、慶応生を外集団として計算した。性別に関しては、男性参加者にとっては男性が内集団で女性が外集団となり、女性参加者にとっては女性が内集団で男性が外集団となるよう計算した。

⁵ Zadro et al. (2004) では、通常のサイバーボール課題の操作 (i.e., 排斥) に加えて、半数の参加者には課題の相手が実在の相手であると教示し、残りの参加者には相手がコンピューターのプログラムであると教示した。サイバーボール課題後、所属欲求や被受容感・被排斥感に関する質問に回答を求めたが、排斥経験が所属欲求や被受容感・被排斥感に与えた影響は、教示によって差が見られなかった。

所属大学の2つのカテゴリーにおける特性評定の分散の平均値について、2(排斥: 排斥/受容) × 2(集団成員性: 内集団/外集団) × 2(特性の典型性: 典型/非典型)の混合要因計画の分散分析を実施した(図 5-1)。分析の結果、排斥の主効果が有意で($F(1, 61) = 4.58, p = .036, \eta^2_p = .07$)、受容条件($M = 2.93, SE = 0.09$)よりも排斥条件($M = 2.67, SE = 0.09$)の方が分散の値が小さくなっていた。

集団成員性の主効果($F(1, 61) = 2.94, p = .091, \eta^2_p = .05$)、特性の典型性の主効果($F(1, 61) = 0.90, p = .347, \eta^2_p = .01$)、およびすべての交互作用は有意でなかった(排斥 × 集団成員性 $F(1, 61) = 0.41, p = .524, \eta^2_p = .01$; 排斥 × 特性の典型性 $F(1, 61) = 0.97, p = .328, \eta^2_p = .02$; 集団成員性 × 特性の典型性 $F(1, 61) = 2.05, p = .157, \eta^2_p = .03$; 排斥 × 集団成員性 × 特性の典型性 $F(1, 61) = 1.05, p = .309, \eta^2_p = .02$)。

上記の結果は、排斥されると一橋生 (i.e., 内集団) と慶応生 (i.e., 外集団) のいずれに対しても集団の類似性を高く知覚するようになることを示しており、本研究の予測と一致するものであった。

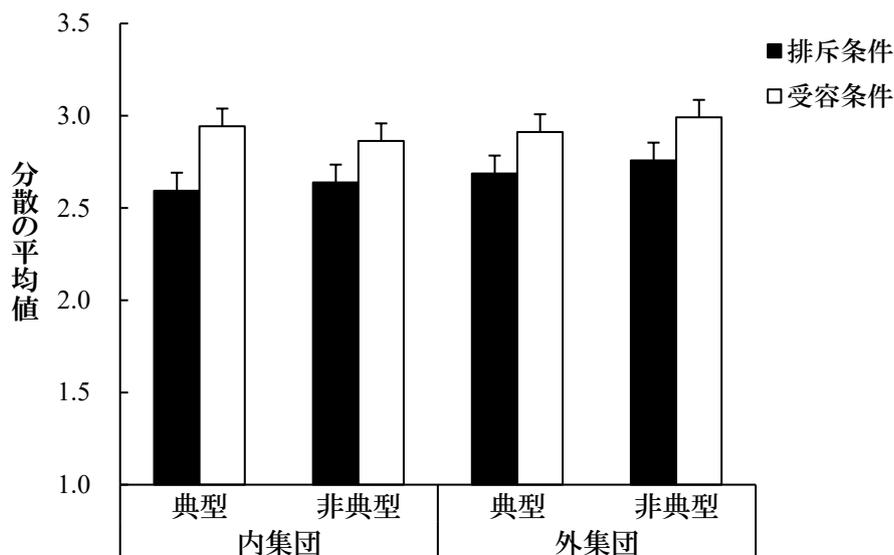


図 5-1. 大学カテゴリーの特性評定における分散の平均値(エラーバーは標準誤差)

註) 都内国立大学生が内集団で、都内私立大学生が外集団。

性別の2つのカテゴリーにおける特性評定の分散の平均値について、同様の分散分析を実施した(図 5-2)。分析の結果、排斥の主効果が有意で($F(1, 61) = 11.04, p = .002, \eta^2_p = .15$)、受容条件($M = 3.09, SE = 0.08$)よりも排斥条件($M = 2.71, SE = 0.08$)の方が分散の値が小さくなっていた。

また、集団成員性と特性の典型性の交互作用が有意だった ($F(1, 61) = 4.05, p = .048, \eta^2_p = .06$)。単純主効果検定の結果 (表 5-3)、集団成員性と特性の典型性の単純主効果はいずれも有意ではなく、いずれの条件間においても有意な差は見られなかった ($ts < 1.9, ps > .07, Hedges' gs < .16$)。

表 5-3. 特性の典型性と集団成員性の条件ごとの分散の平均値 (カッコ内は標準誤差)

	内集団	外集団
典型的特性	2.95 (0.09)	2.84 (0.09)
非典型的特性	2.88 (0.09)	2.94 (0.09)

註) 男性参加者にとっては男性が内集団で、女性が外集団。女性参加者にとっては女性が内集団で、男性が外集団。

集団成員性の主効果 ($F(1, 61) = 0.29, p = .590, \eta^2_p = .00$)、特性の典型性の主効果 ($F(1, 61) = 0.14, p = .714, \eta^2_p = .00$)、および他の交互作用は有意でなかった (排斥×集団成員性 $F(1, 61) = 1.16, p = .286, \eta^2_p = .02$; 排斥×特性の典型性 $F(1, 61) = 1.43, p = .236, \eta^2_p = .02$; 排斥×集団成員性×特性の典型性 $F(1, 61) = 0.10, p = .749, \eta^2_p = .00$)。

上記の結果は、排斥されると同性 (i.e., 内集団) と異性 (i.e., 外集団) のいずれに対しても集団の類似性を高く知覚するようになることを示しており、本研究の予測と一致するものであった。

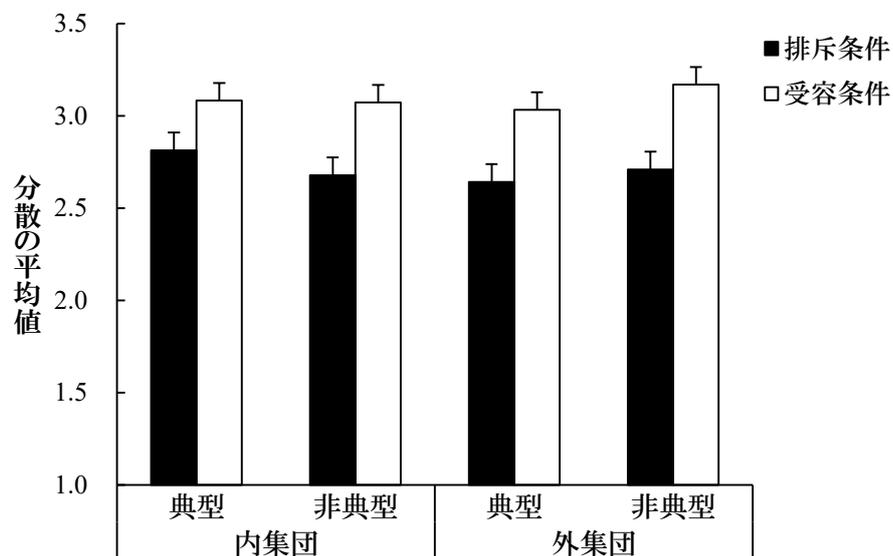


図 5-2. 性別カテゴリーの特性評定における分散の平均値 (エラーバーは標準誤差)

註) 男性参加者にとっては男性が内集団で、女性が外集団。女性参加者にとっては女性が内集団で、男性が外集団。

ヒストグラムの評定値の平均 作成されたヒストグラムについて、分散と同様に各線分の長さを度数とみなして、特性ごとに評定値の平均を算出した。内集団に典型的な特性、内集団に非典型的な特性、外集団に典型的な特性、外集団に非典型的な特性、それぞれ 2 項目の相関を求めたが一部を除いて有意な相関が見られなかった($r = -.03 \sim .61$)ため、合算せずに分析を行った。

大学のカテゴリーの評定で用いた 4 つの特性についてそれぞれ、2(排斥: 排斥/受容)×2(評定対象: 一橋生/慶応生)の混合要因計画の分散分析を実施した(表 5-4)。その結果、すべての特性において評定対象の主効果が有意($F_s > 36.0, p_s < .01, \eta^2_p > .37$)で、その特性が典型的である大学の方が非典型的である大学よりも、平均が高かった。すなわち、「几帳面な」と「現実的な」は一橋生に典型的な特性、「大胆な」と「自己主張の強い」は慶応生に典型的な特性であると評定されていた。また、すべての特性において、排斥の主効果と交互作用は有意でなかった($F_s < 4.00, p_s > .05, \eta^2_p < .06$)。

さらに、性別のカテゴリーの評定で用いた 4 つの特性についてもそれぞれ、2(排斥: 排斥/受容)×2(評定対象: 男性/女性)の混合要因計画の分散分析を実施した(表 5-5)。その結果、「大胆な」、「几帳面な」、「感情的な」の項目において評定対象の主効果が有意($F_s > 46.8, p_s < .01, \eta^2_p > .44$)で、その特性が典型的である性別の方が非典型的である性別よりも、平均が高かった。すなわち、「大胆な」は男性に典型的な特性、「几帳面な」と「感情的な」は女性に典型的な特性であると評定されていた。しかし、男性に典型的な特性である「現実的な」の項目では、男性の平均($M = 4.35, SE = 0.07$)と女性の平均($M = 4.18, SE = 0.06$)の間に有意な差は見られなかった($F(1,61) = 2.52, p = .12, \eta^2_p = .04$)。また、すべての特性において排斥の主効果は有意でなかった($F_s < 0.6, \eta^2_{ps} < .01$)。

上記の分析において、「現実的な」と「感情的な」の項目では交互作用は有意でなかった($F_s < 0.3, p_s > .60, \eta^2_p < .01$)が、「大胆な」と「几帳面な」の項目において交互作用が有意だった($F_s > 6.3, p_s < .05, \eta^2_{ps} > .09$)。それぞれ単純主効果検定を行った結果、「几帳面な」の項目に関しては、評価対象の単純主効果が排斥条件と受容条件のいずれにおいても有意で($F_s > 17.9, p_s < .001, \eta^2_{ps} > .22$)、女性の方が男性よりも几帳面であると評定されていた。また、排斥の単純主効果が女性では有意ではなかった($F(1,61) = 3.58, p = .06, \eta^2_p = .06$)が、男性では有意($F(1,61) = 4.24, p = .44, \eta^2_p = .07$)で、排斥された参加者の方が受容された参加者よりも、男性を几帳面でないと評定していた。また、「大胆な」の項目に関しては、評価対象の単純主効果が排斥条件と受容条件のいずれにおいても有意で($F_s > 9.5, p_s < .004, \eta^2_{ps} > .13$)、女性よりも男性の方が大胆だと評定されて

いたが、排斥の単純主効果は男性と女性のいずれにおいても有意ではなかった ($F_s < 3.6, p_s > .07, \eta^2_{ps} < .06$)。

表 5-4. 大学カテゴリーの各特性における評定の平均 (カッコ内は標準誤差)

		一橋生に典型的		慶応生に典型的	
		几帳面な	現実的な	大胆な	自己主張の強い
一橋生	排斥	4.33 (0.09)	4.80 (0.07)	3.50 (0.08)	4.07 (0.10)
	受容	4.31 (0.08)	4.81 (0.07)	3.60 (0.08)	3.81 (0.10)
慶応生	排斥	3.96 (0.08)	4.31 (0.07)	4.36 (0.09)	4.45 (0.09)
	受容	3.86 (0.08)	4.14 (0.07)	4.53 (0.08)	4.48 (0.09)

表 5-5. 性別カテゴリーの各特性における評定の平均 (カッコ内は標準誤差)

		男性に典型的		女性に典型的	
		大胆な	現実的な	感情的な	几帳面な
男性	排斥	4.29 (0.06)	4.40 (0.09)	3.92 (0.07)	3.82 (0.05)
	受容	4.17 (0.06)	4.29 (0.09)	3.90 (0.07)	3.98 (0.05)
女性	排斥	3.67 (0.08)	4.18 (0.09)	4.70 (0.07)	4.49 (0.07)
	受容	3.88 (0.08)	4.12 (0.09)	4.69 (0.07)	4.32 (0.06)

5.2.4 考察

実験2の目的は、実験1と同様に、排斥されると集団の類似性を高く知覚するようになるか検討することであった。実験2では、サイバーボール課題を用い、参加者に被排斥状況を実際に経験してもらい、被排斥経験後の反応を測定した。また、自己報告による尺度ではない測定法を用いることで、可能な限り参加者の動機等が反映されにくいようにした。

集団の類似性の知覚 実験の結果、受容条件よりも排斥条件の方が、内・外集団に関わらず、作成されたヒストグラムの分散の値が小さくなっていた。この結果は、排斥されると集団の類似性を高く知覚するようになることを示しており、本研究の仮説を支持するものであった。

内集団と比して外集団の類似性を高く見積もる傾向、いわゆる外集団同質性効果 (outgroup homogeneity effect) はいずれの集団においても確認されなかった。この効果は頑健であるとされているが、メタ分析によるとその効果量は比較的小さく、また外集団同質性効果が見られない、もしくは

逆に内集団同質性効果が確認されるケースも指摘されている (Mullen & Hu, 1989)。例えば、外集団と内集団の人数比が等しいと告げられている場合には、外集団同質性効果が消失し、内集団と外集団の間で同質性の知覚に差が見られなくなった (Simon & Mummendey, 1990)。今回用いた集団に当てはめて考えてみると、男性と女性の人数比はほぼ同数であるため、Simon & Mummendey (1990) と同様の結果を示している可能性が考えられる。あるいは別の研究では、マイノリティ集団に属している場合には、外集団と比べて内集団を同質的だとみなす傾向が見られた (Simon & Pettigrew, 1990)。一橋大学と慶応義塾大学を比べると、入学試験の難易度や卒業生の就職先などの水準に関しては同程度であるが、一橋大学の学生数が4,500人ほどであるのに対して、慶応義塾大学には数万人単位で学生が在籍しており、慶応義塾大学の方が圧倒的に規模の大きい大学である。実験参加者が自らの大学と慶応義塾大学に関して、集団の地位をどのように判断していたのか直接は分からないが、学生数の多寡が類似性の認知に影響を与えていた可能性も考えられる。

また、外集団の類似性の測定方法による影響も考えなくてはならないだろう。Haslam, Oakes, Turner, & McGarty (1995) では、以下のような知見が報告されている。外集団に対する類似性知覚だけ、もしくは内集団に対する類似性知覚だけを測定した際には、内集団よりも外集団の類似性をより高く知覚していた。自身が所属する集団内の文脈では、集団に対する同化の欲求を持つと同時に、他の内集団成員との差異化の欲求も生じる (cf. 最適弁別性理論、Brewer, 1991)。結果として内集団の成員と自身との差異にも注意が向けられ、内集団を(外集団と比較して)同質的でないと知覚する。他方で、外集団に対しては、内集団への同化の欲求から内集団と外集団を弁別しようとし、外集団の成員同士の差異には注意が向けられない(i.e., 類似性知覚が高まる)と考えられる。対して、外集団に対する類似性知覚と内集団に対する類似性知覚を同時に測定した際には、内集団の類似性と外集団の類似性の間に差が見られなかった。集団間の文脈では外集団と内集団の弁別に主眼が置かれ、外集団と内集団のいずれにおいても集団内での成員同士の差異には注意が向けられなくなる。結果として、外集団に対しても内集団に対しても類似性を知覚しやすいと考えられる。本研究では、実験1においても実験2においても、内集団に対する類似性知覚と外集団に対する類似性知覚を同時に測定していた。そのため、外集団同質性効果が生じなかった可能性がある。

本研究で外集団同質性が確認されなかったのが、測定方法に原因があるのか、あるいは用いた集団における集団間関係が影響しているのか、本研究の実験のみからは結論を導くことはできない。今後は、他の集団カテゴリー、あるいは最少条件集団を用いて検討する、異なる従属変数を用いて

測定するといったことも必要となってくるだろう。そして外集団同質性効果が見られた場合にも本研究と同様の知見が得られるのか、という点についても検討が必要である。

ヒストグラムにおける評定値の平均 特性ごとの評定値の平均について分析した結果、大学のカテゴリーに関する4つの特性に関しては、予備調査と一致して、「几帳面な」と「現実的な」は一橋生に典型的な特性、「大胆な」と「自己主張の強い」は慶応生に典型的な特性であると評定されていた。一方で、性別のカテゴリーに関しては、「大胆な」は男性に典型的な特性、「几帳面な」と「感情的な」は女性に典型的な特性であるという評定は予備調査と一致していたが、「現実的な」という特性に関しては男女の間で平均に有意な差が見られなかった。「現実的な」という特性に関しては、予備調査においても男女間で有意な差が見られなかったが、男性においてのみ評定値がニュートラルポイントを超えていたことから男性に典型的な特性とした。しかし、本実験の結果と合わせて鑑みると、「現実的な」という特性は、必ずしも男性に典型的(i.e., 女性に非典型的)な特性とは言えなかったのかもしれない。この点に関しては、本研究では典型的な特性と非典型的な特性のいずれにおいても類似性の知覚に関して同様の結果が得られていたため、本研究においては大きな問題ではなかったと考えられる。しかし、今後の研究においては、各集団に典型的あるいは非典型的な特性をより厳密に選定し、検討する必要があるだろう。

また、大学のカテゴリーと性別のカテゴリーのいずれの特性においても、排斥の主効果は見られなかった。ある特性のあてはまる程度が集団内で正規分布(あるいはそれに近い分布)していると仮定した場合、特性のあてはまる程度の平均値が変わらずに分散が小さくなったということは、平均値とその周辺に分布する人の度数をより多く見積もるようになったということである。本研究では、排斥を受けると、受容と排斥に関わる社会的なカテゴリーにおいて、カテゴリー内の差異よりもカテゴリー間の差異の方がよく見分けられるようになった結果、カテゴリー内の成員の類似性を高く知覚するようになると予測した。そのため、集団の類似性の知覚の程度について検討し、集団(の成員)が持つ特性の内容については検討の対象としなかった。しかし、再親和を求めるのを難しくさせるような特性(e.g., 内向的、攻撃的)といったものも想定できる。集団に典型的な特性が再親和を躊躇させるような特性であった場合、その集団の中で「平均的な人物」(i.e., その特性が当てはまる程度が平均的な人物)がより多くいると知覚するようになることが、再親和に対して負の影響を与える場合もあるだろう。本研究からはこの点については明らかにすることが出来ておらず、集団が持つ特性の内容が再親和に与える影響について今後研究が進められることが期待される。

さらにこの指標に関しては、今後検討すべき課題がいくつかある。1点目に、特性の評定値の平均に関して、予備調査では各集団に典型的・非典型的な特性同士で有意な相関があったのに対し

て、本実験では有意な相関が見られなかった点である。これには、評定方法の違いが影響していると考えられる。予備調査では、各性格特性が当てはまる程度について集団の成員の平均値を直接推定してもらった。それに対して本実験では、各性格特性のヒストグラムの作成を求めた。ヒストグラムを作成する際、分布の山や広がりや左寄り、あるいは右寄りにすることで、平均値の高低の差を表現することは可能である。しかし、予備調査で用いた方法のように、評定の平均値をピンポイントで表現することは難しい。その結果、本実験では評定の平均値において項目間で相関が見られなくなってしまった可能性がある。この点を鑑みると、ヒストグラムの評定値の平均に関する結果の解釈には、一定の注意が必要だろう。排斥経験後における、ある特性が集団成員にどのくらいあてはまるのかという知覚の変化については、別の評定方法も用いて検討する必要があるだろう。

また、性別のカテゴリーでは、2つの項目で交互作用効果が見られた。単純主効果検定の結果、「大胆な」の項目では評価対象の単純主効果のみが有意で、排斥の単純主効果は有意ではなく、他の項目と同様に排斥の影響は確認されなかった。「几帳面な」の項目では、「大胆な」の項目と同様に、評価対象の単純主効果が有意だった。加えて、男性に対する評価において排斥の単純主効果が有意で、排斥された参加者の方が受容された参加者よりも、男性を几帳面でないと評定していた。「几帳面な」という特性は、男性に非典型的な特性として用いたが、男性の非典型的な特性として用いたもう一つの特性(感情的な)や他の集団における非典型的な特性においては、排斥の単純主効果は見られなかったことから、特性の典型性による影響ではないと考えられる。「几帳面な」という特性の内容自体が影響を与えていたと考えられるが、排斥された際に男性を几帳面でないと知覚することが再親和を得るにあたってどのような意味があるのか、先述の通り、特性の内容が再親和に与える影響についても検討していく必要があるだろう。

5.3 実験1および実験2のまとめ

排斥されると、再親和の可能性が高い相手を見極めるため、受容と排斥の社会的手がかりに関するカテゴリー認知が変化する (Sacco et al., 2011)。具体的には、排斥されると、受容と排斥の社会的手がかりに関するカテゴリー認知において、カテゴリー間の差異をより正確に区別できるようになる。その一方で、カテゴリー内の差異を区別できなくなることも示されており、カテゴリー内において類似性の知覚が高まっていることが読み取れる。この点に関して受容と排斥に関わる社会的なカテゴリーの1つである集団成員性の観点から考えると、排斥されると、受容されたときと比べて、(内集団・外集団に関わらず) 集団の類似性を高く知覚するようになるだろう(仮説1)と考えられる。この

予測を検討するため、実験1および実験2を実施した。実験1は質問紙を用いた実験であった。参加者には架空のSNSサイト上での出来事についてのシナリオを読んでもらったが、このシナリオの内容によって参加者を排斥条件もしくは受容条件に割り振った。その後、男性および女性の類似性知覚に関する質問に回答を求めた。実験2ではパソコン上でサイバーボール課題を実施し、実際に参加者に排斥あるいは受容される状況を経験してもらった。その後、一橋生、慶応生、男性、女性の4つの集団について、性格特性が当てはまる程度についての成員の分布を表すヒストグラムの作成を求めた。

実験1および実験2の結果、排斥を受けると外集団の類似性の知覚が高まることが示された。しかし、実験2では内集団に対しても類似性の知覚が高まっていたのに対して、実験1では高まっていなかった。これは、実験1ではシナリオによる操作を用いており、実際に排斥を経験した際の反応を引き出せていなかった可能性がある。また、類似性の知覚に関して、実験2では集団成員の性格特性のヒストグラムを作成させたのに対して、実験1では自己報告による質問項目を用いて測定した。回答者の意図や動機を反映されやすい質問項目を用いた実験1と比べて、ヒストグラムを作成させた実験2の方が、参加者の意図や動機を排した回答を得ることができたと考えられる。また、ヒストグラムによる測定では、集団に対する全体的な類似性の知覚だけでなく、個々の事例間の類似性の知覚も含めた集団の類似性の知覚を測定できていたと考えられる。よって、実験2で得られた結果の通り、被排斥後には内集団・外集団に関わらず、集団の類似性をより高く知覚するようになるという予測(仮説1)は支持されたとと言える。

人は、外集団成員を脅威だと知覚しやすい (e.g., Hart et al., 2000; Olsson et al., 2005)。そのため、被排斥経験によって集団の類似性を高く知覚するようになり外集団と内集団を峻別するようになると、外集団成員に対して再親和を求めにくくなる、ということが予測される。続く実験3および実験4では、この点について検討した。

6章 再親和相手の集団成員性が被排斥経験後に再親和を求める程度に与える影響

人は、外集団成員を脅威だと知覚しやすい (e.g., Hart et al., 2000; Olsson et al., 2005) ことから、排斥を受け集団に対する類似性の知覚が高まり外集団と内集団を峻別するようになると、外集団成員をより脅威だと知覚し、相互作用に不安を抱くだろうと考えられる。外集団成員との相互作用における不安は、外集団との相互作用の回避につながる (Plant, 2004) ことから、外集団成員に対する再親和行動を取りにくくなると考えられる。さらにこの影響は、社会不安の高い者において顕著に現れると予測される。

社会不安の高い者は、他者からの否定的な評価や拒絶といった社会的脅威に関する手がかりに注意を向けやすく、また社会的脅威を過大視しやすい (Heinrichs & Hofmann, 2001)。よって、排斥され外集団の類似性を高く知覚するようになった結果、社会不安の高い人は外集団成員の脅威を (社会不安の低い人よりも) 強く知覚し、被排斥経験後に外集団成員に対して再親和を求めにくくなると予測される。対して内集団成員は、外集団成員と比べてポジティブに評価され (Brewer & Campbell, 1976; Tajfel, 1978)、相互作用において不安を喚起しにくい (e.g., Plant & Devine, 2003; Shelton et al., 2005; Trail et al., 2009)。また、概して外集団成員よりも社会的つながりの源泉となりやすい (Correll & Park, 2005)。そのため、社会不安の高い人であっても、内集団成員に対しては排斥経験後に再親和を求めることが出来るのではないかと考えられる。

以上をまとめると、本論文の 2 つ目の仮説は以下の通りとなる。被排斥経験後には再親和を求める程度が高くなるが、その程度は外集団成員に対してよりも、内集団成員に対しての方が高いだろう。さらに、この傾向は社会不安の低い者において、顕著に表れるだろう。実験 3 および実験 4 では、この仮説について検討した。

6.1 実験3⁶

実験 3 は、質問紙実験を実施した。架空のシナリオを用いて排斥される場面を想定してもらい、被排斥経験後には外集団よりも内集団に対して再親和を求めるだろうという予測を検討した。実験 3

⁶ 実験 3 は、津村・村田(2014)で発表した内容を博士論文の主張に従って構成しなおしたものである。

で用いたシナリオは、実験1とほぼ同様の内容であった。またこの実験では、集団のカテゴリとして性別を用いた。具体的には、男性参加者にとっては男性が内集団で、女性が外集団ということになる(女性参加者にとっては、その逆)。

6.1.1 方法

実験参加者と実験計画 一橋大学の学生120名(男性61名,女性59名;年齢 $M=19.6$, $SD=1.7$)が参加した。実験計画は2(シナリオ: 排斥/受容) × 2(社会不安: 低群/高群)の参加者間計画だった。社会不安の低群と高群は、実験冒頭で尋ねた社会不安に関する尺度の得点に基づき、事後的に分割した。

社会的不安の測定 まず質問紙の冒頭では、「他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度(FNE)短縮版」(笹川他, 2004)を用いて社会不安の程度を測定した。これは、社会不安の程度の測定によく用いられる Fear of Negative Evaluation (FNE) 尺度 (Watson & Friend, 1969) (日本版は、石川・佐々木・福井, (1992)) の短縮版であり、12項目(e.g., 「他の人が私の欠点に気づくのではないかとしばしば心配する」、「誰かと話しているとき、その人が自分のことをどう思っているか心配だ」)からなる5件法の尺度である。

排斥経験の有無の操作 全参加者が FNE 尺度短縮版への回答を終えたのを確認し、実験シナリオの呈示へと移った。参加者には、シナリオはとある架空のソーシャルネットワーキングサイト(SNS)における出来事について書かれたものであると教示し、実際にそういった場面に遭遇したところを想像しながら読むように求めた。制限時間は3分間とした。提示したシナリオは、架空のSNS内で他のユーザーとオンラインチャットをしている場面を描いたもの(1,200字程度)で、条件によりその内容が一部異なっていた。排斥条件では、チャットに参加しようと挨拶をしたものの、誰からも話しかけられず会話に参加できなかったためチャットから退出した、というシナリオが書かれていた。対して、受容条件では、他のチャット参加者との会話にうまく混ざることができたものの、回線の不都合が生じてしまいやむなくチャットから退出することになってしまった、というシナリオが書かれていた。なお、シナリオの全文は付録Cに記した。

チャットルーム退出後の行動と再親和相手の測定 シナリオ呈示後、シナリオを自身が経験したという想定の下、新しいチャットルームを探すとしたら、呈示した各チャットルームについてどのくらい参加したいと思うか尋ねた。具体的には、「同性の参加者が多い」、「異性の参加者が多い」といったチャットルームについて、「まったく参加したくない」(1点)から「非常に参加したい」(7点)の7件法で尋ねた。

操作チェック 続いて、操作チェックを行った。操作チェックは、Zadro et al. (2004) で用いられていたものを元に、本実験の内容に沿うように表現を改め、被排斥感に関して「自分はチャットの部外者だったと思う」、「チャットの他の参加者から自分が受け入れられていなかったと思う」、「チャットの間、他の参加者とつながりを感じることができていたと思う」(逆転項目)の3項目を尋ねた。いずれも、「まったくあてはまらない」(1点)から「非常にあてはまる」(7点)の7件法で尋ねた。

実験後のアンケート、およびデブリーフィング 最後に、実験に関するアンケートへの回答を求め、そこで実験の目的に気付いた参加者がいなかったかどうかを確認した。アンケートへの回答終了後、参加者に実験の目的等の説明が記された書面を配布し、実験は終了した。

6.1.2 結果

分析対象者 実験後のアンケートで、実験の目的に気付いていたと思われる参加者は確認できなかったが、チャットに興味を持ったことがなくシナリオの場면을想像することが難しかった旨を書いた参加者が2名いた。そのため、この2名の参加者は分析対象から除外した。

社会不安 実験冒頭で尋ねた社会不安尺度の得点 ($M = 3.43, SD = 0.91$)⁷に基づいて、社会不安の低群と高群に中央値 ($Me = 3.58$) で分割した。その結果、各条件の参加者の人数は表 6-1 の通りとなった。

表 6-1. 各条件の参加者数 (カッコ内は女性の参加者数)

	社会不安低群	社会不安高群
受容条件	34 (15)	27 (14)
排斥条件	27 (14)	30 (14)

操作チェック項目 被排斥感に関する3項目の合算平均値を求め、被排斥感の指標とした ($\alpha = .78$)。この指標について2 (シナリオ: 排斥/受容) \times 2 (社会不安: 低群/高群)の分散分析を行った(表 6-2)。その結果、シナリオの主効果が有意で ($F(1, 114) = 92.53, p < .001, \eta^2_p = .45$)、受容条件の参加者 ($M = 3.50, SE = 0.15$) よりも排斥条件の参加者 ($M = 5.53, SE = 0.15$) の方が、被排斥感の指標が高かった。この結果は、排斥条件の参加者において被排斥感が高まっていたことを表している。よって、シナリオによる排斥の操作は有効であったと言える。

⁷以降の実験を含め、本研究における FNE 短縮版の得点は、日本の一般大学生を対象とした過去の研究における FNE 短縮版の得点と比べて、大きな違いは見られなかった (e.g., Moriya & Sugiura (2013) $M = 3.39, SD = 0.71$; 城月・笹川・野村 (2010) $M = 3.53, SD = 0.77$; 山下 (2014) $M = 3.27, SD = 0.78$)。

また、社会不安の主効果が有意で ($F(1, 114) = 4.18, p = .043, \eta^2_p = .04$)、社会不安低群 ($M = 4.30, SE = 0.15$) よりも高群 ($M = 4.73, SE = 0.15$) の方が、被排斥感の指標が高かった。この結果は、社会不安高群の参加者の方が被排斥感が強かったことを表しているが、先行研究の結果と一致するものであった (Zadro et al., 2006)。

交互作用は有意でなかった ($F(1, 114) = 0.46, p = .500, \eta^2_p = .00$)。

表 6-2. 各条件における所属欲求に対する脅威の推定周辺平均 (カッコ内は標準誤差)

	社会不安低群	社会不安高群
排斥条件	5.39 (0.22)	5.68 (0.21)
受容条件	3.22 (0.20)	3.79 (0.22)

再親和の相手 「同性が多いチャットルーム」に参加したい程度から「異性が多いチャットルーム」に参加したい程度を引いた指標を内集団選好得点とした。この得点について 2×2 の分散分析を行った(表 6-3)。その結果、社会不安の主効果($F(1, 114) = 3.13, p = .080, \eta^2_p = .03$)が有意傾向だったが、シナリオの主効果($F(1, 114) = 0.42, p = .517, \eta^2_p = .00$)、および交互作用は有意でなかった。($F(1, 114) = 0.56, p = .456, \eta^2_p = .01$)

交互作用効果は有意ではなかったものの、単純主効果検定を行った。その結果、排斥条件において社会不安の単純主効果が有意傾向で ($F(1, 114) = 3.08, p = .082, \eta^2_p = .03$)、社会不安低群 ($M = 0.67, SE = 0.41$) よりも高群 ($M = 1.67, SE = 0.39$) の方が、内集団選好得点が高い傾向が見られた。対して受容条件では、社会的不安の単純主効果は有意でなかった ($F(1, 114) = 0.54, p = .466, \eta^2_p = .01$)。シナリオの単純主効果は、社会不安の低群と高群のいずれにおいても有意ではなかった (社会不安低群 $F(1, 114) = 0.01, p = .944, \eta^2_p = .00$; 社会不安高群 $F(1, 114) = 0.95, p = .332, \eta^2_p = .01$)。

加えて、排斥条件の社会不安低群および社会不安高群の内集団選好得点に対して、0 を検定値とした 1 サンプルの t 検定を行った。その結果、排斥条件の社会不安高群の内集団選好得点は有意に 0 よりも大きかったのに対して、排斥条件の社会不安低群の内集団選好得点は 0 と有意な差は見られなかった ($t(26) = 3.47, p = .002, r = .54$)。

これらの結果をまとめると、排斥条件において、社会不安低群の参加者よりも社会不安高群の参加者の方が、内集団選好得点が高い傾向が見られることを表している。また、社会不安低群の内集団選好得点が 0 と有意な差がなかったのに対して、社会不安高群の内集団選好得点は 0 よりも有

意に大きかった。よって、排斥されると社会的不安の高い参加者は再親和の相手として内集団を選好する傾向が見られ、仮説に沿った結果が得られた。対して、社会的不安の低い参加者ではそのような傾向は見られず、仮説は支持されなかった。

表 6-3. 各条件における内集団選好得点の推定周辺平均 (カッコ内は標準誤差)

	社会不安低群	社会不安高群
排斥条件	0.67 (0.41)	1.67 (0.39)
受容条件	0.71 (0.37)	1.11 (0.41)

6.1.3 考察

実験3の目的は、被排斥経験後の再親和において、再親和の相手として内集団成員を選好するのか、検討することであった。

操作チェックの結果 分析の結果、対人不安低群よりも対人不安高群の参加者の方が、被排斥感の指標が高かった。これは、先行研究の結果と一致するものである (Zadro et al., 2006)。社会不安の高い人は、社会的相互作用の場面において脅威の手がかりを符号化しやすく、そのため、曖昧な、あるいは露骨でない排斥でも脅威だと知覚しやすい (Clark & Wells, 1995)。これにより、社会不安の高い人において、排斥経験が属欲求に対して与える影響が大きくなったと考えられる (Zadro et al., 2006)。

再親和の相手について 実験の結果、排斥されると社会的不安の高い参加者は再親和の相手として内集団を選好する傾向が見られ、仮説に沿った結果が得られた。対して、社会的不安の低い参加者ではそのような傾向は見られず、仮説は支持されなかった。社会不安の低い人ほど、自身の社会的スキルの自己評価が高い (e.g., 原田・島田, 2002)。そのため、どのような相手であっても次のチャットは上手くできるであろう、と考えていた可能性が考えられる。

社会不安の高い人においては、本実験の結果は排斥経験後に外集団成員に対して再親和を求めようとしなが内集団成員には再親和を求める、ということを示唆しているが、この実験での質問は「チャットルームで排斥された後に新しいチャットルームを探すとしたら (i.e., 再親和を求めるとしたら)」という前提の下での質問であり、排斥された際に内集団成員を相手に実際に再親和を求めようとするのか、検討できていない。そこで、実験4ではサイバーボール課題を用い排斥状況を経験してもらい、排斥経験後に実際に再親和を求めようとするのか測定した。

また、実在の集団を用いた場合には、現実の集団間関係や集団の持つ特徴が実験結果に影響を与えている可能性がある。この点を改善するため、実験 4 では最小条件集団パラダイム (Tajfel, 1970; Tajfel et al., 1971) を用い、集団成員性を操作した。最小条件集団パラダイムでは、ささいな手がかりを基に架空の社会的カテゴリーに参加者を分類する。そのため、集団間関係の文脈とは切り離された社会的カテゴリーの影響を検討することができるかとされている。

6.2 実験⁸

実験 4 は、実験室実験を実施した。参加者には、サイバーボール課題を通じて排斥あるいは受容を経験してもらった。その後、排斥経験後の再親和において、相手が外集団成員である場合よりも内集団成員である場合の方が、再親和を求める程度が高まるのか、そしてこの傾向は社会不安の高い者においてより顕著になるのか、検討した。再親和相手の集団成員性の操作には、最小条件パラダイムを用い、実際の集団間関係や集団の特徴の影響をできる限り排した。

6.2.1 方法

実験参加者と実験計画 一橋大学の学生 85 名 (男性 52 名、女性 33 名; 年齢 $M = 19.3$, $SD = 1.3$) が参加した。実験計画は 2 (排斥: 排斥/受容) \times 2 (集団成員性: 外集団/内集団) \times 2 (社会不安: 低群/高群) の参加者間計画だった。社会不安の低群と高群は、実験に先立ち測定した日本版 FNE 尺度短縮版 (笹川他, 2004) の得点に基づき、事後的に分割した。

手続き 1 セッションあたりの参加者は 3 名から 4 名で、互いに顔が見えない状態で実験は実施された。参加者にはカバーストーリーとして、個人的特徴や想像力が意思決定課題の遂行に及ぼす影響に関する研究であると教示した。初めに、個人的特徴 (認知スタイル) を判定するための課題として、ドット数推量 (Dot Estimation) 課題に取り組んでももらった。課題終了後、判定結果は次のゲームの後にフィードバックされると伝えた。続いて、想像力のトレーニングのゲームとして、サイバーボール課題に取り組んでももらった。ここで、排斥の操作が行われた。サイバーボール課題後、排斥の操作チェック項目に回答を求めた。回答後、ドット数推量課題の判定結果を参加者にフィードバックし、フィードバックの内容を変えることで集団成員性を操作した。最後に、意思決定課題の 2 つのバージョン (一人で取り組むか、他の参加者と一緒に取り組む) のうち、どちらの課題に取り組みたいと思うか評定を求めた。他の参加者と一緒に取り組む課題に取り組みたいと思う程度を、再親和欲求の程度

⁸実験 4 は、Tsumura & Murata (2015) で発表した内容を博士論文の主張に従って構成しなおしたものである。

とした。実際にはこの意思決定課題は実施されず、デブリーフィングを行い、実験は終了した。各手続きの詳細は以下の通りである。

集団成員性の操作 最小条件集団パラダイムの一つであるドット数推量課題 (Tajfel, 1970; Tajfel et al., 1971) を援用し、集団成員性を操作した。この課題は、パソコン画面上に瞬時的 (800 ms) に表示された黒点の数を推量するもので、全 8 問が課された。参加者は画面上に表示された点の数を推量し、その回答を答案用紙に記入した。カバーストーリー上では情報処理のスタイルを測定するための課題であるとし、この課題における回答の傾向から実際の数よりも多く推測する傾向のある Over-estimator か、実際の数よりも少なく推測する傾向のある Under-estimator に分類されると伝えた。なお、これらの認知スタイルや、認知スタイルを判定するための課題は、実在しない架空のものであった。

ドット数推量課題の結果は、サイバーボール課題後に教示した。ドット数推量課題の結果をフィードバックする際、外集団条件では、参加者は Under-estimator であったが他の参加者は Over-estimator であったと伝えた。対して内集団条件の参加者には、その場にいる全ての実験参加者が Under-estimator であったと伝えた。これらのフィードバックは、実際の課題の回答とは無関係に行われた。なお、このフィードバックに用いた用紙は、付録 D として付した。

排斥の操作 排斥の操作は、サイバーボール課題によって行われた。実験 2 と同様に、参加者はコンピュータープログラムのプレーヤー 2 名とキャッチボールのゲームに取り組んだ。参加者には、視覚的なイメージを作るトレーニングであり、相手のプレーヤーはコンピューターのプログラムであると教示した。受容条件の参加者には、コンピュータープログラムのプレーヤーとほぼ均等な割合でボールが回ってきた。他方で、排斥条件の参加者には、ゲームの序盤に 2 回ボールが回ってきた以降は全くボールが回ってこなかった。

排斥の操作チェック サイバーボール課題の後、排斥の操作チェックを行った。参加者には、被排斥感に関する 2 つの項目(「ゲームの部外者になったかのように感じた」、「他のプレーヤーから相手にされていないように感じた」)に「まったくあてはまらない」(1 点) から「とてもあてはまる」(7 点) の 7 件法で回答を求めた。

再親和欲求の程度の測定 最後に実施する意思決定課題には 1 名で取り組むバージョンと他の参加者と一緒に取り組むバージョンがあり、どちらに取り組むのかを参加者が選択することができる、と教示した。そして、どちらのバージョンに取り組んでもらうか決めるため、それぞれの課題に取り組みたいと思う程度を「取り組みたいと思わない」(0 点) から「取り組みたいと思う」(8 点) の 9 件法で尋ねた。このうち、他の参加者と一緒に取り組む課題に取り組みたいと思っていた程度を、再親和欲求の

指標とした。この指標の値が大きいほど、再親和欲求の程度が高いことを表していると考えられる。なお、参加者にはこの課題の内容について詳しくは説明しなかったが、どちらを選択しても課題の遂行において有利・不利は無いと伝えた。

6.2.2 結果

社会不安 実験冒頭で尋ねた FNE 尺度短縮版 (5 件法 12 項目; $\alpha = .92$) の得点 ($M = 3.24$, $SD = 0.79$) に基づいて、社会不安の低群と高群に中央値 ($Me = 3.33$) で分割した。その結果、各条件の参加者の人数は表 6-4 の通りとなった。なお、参加者のうち 6 名については社会不安の程度を測定できなかったため、以降は除外して分析を行った。

表 6-4. 各条件の参加者数 (カッコ内は女性の参加者数)

		社会不安低群	社会不安高群
外集団条件	受容条件	8 (4)	13 (4)
	排斥条件	15 (4)	5 (3)
内集団条件	受容条件	10 (4)	9 (5)
	排斥条件	10 (3)	10 (4)

操作チェック 排斥の操作チェックに用いた 2 項目 (7 件法; $r = .73, p < .001$) を合算し、被排斥感の指標とし、2 (排斥: 排斥/受容) \times 2 (集団成員性: 外集団/内集団) \times 2 (社会不安: 低群/高群) の分散分析を行った (表 6-5)。分析の結果、排斥の主効果が有意で ($F(1, 72) = 81.47, p < .001, \eta^2_p = .53$)、受容条件の参加者 ($M = 3.08, SE = 0.21$) よりも排斥条件の参加者 ($M = 5.83, SE = 0.22$) の方が、被排斥感の指標が高かった。この結果は、排斥条件の参加者において所属欲求が脅威にさらされていたことを表している。よって、サイバーボール課題による排斥の操作は有効であったと言える。

また、社会不安の主効果が有意で ($F(1, 72) = 6.36, p = .014, \eta^2_p = .08$)、社会不安低群 ($M = 4.07, SE = 0.20$) よりも高群 ($M = 4.84, SE = 0.23$) の方が、被排斥感の指標が高かった。これは、先行研究 (Zadro et al., 2006)、あるいは本研究の実験 3 の結果と一致するものであった。

集団成員性の主効果 ($F(1, 72) = 0.02, p = .897, \eta^2_p = .00$) および交互作用 (排斥 \times 集団成員性 $F(1, 72) = 0.00, p = .984, \eta^2_p = .00$; 集団成員性 \times 社会不安 $F(1, 72) = 0.20, p = .654, \eta^2_p = .00$; 排斥 \times 社会不安 $F(1, 72) = 0.00, p = .961, \eta^2_p = .00$; 排斥 \times 集団成員性 \times 社会不安 $F(1, 72) = 0.16, p = .693, \eta^2_p = .00$) は、いずれも有意ではなかった。

表 6-5. 各条件における所属欲求に対する脅威の推定周辺平均 (カッコ内は標準誤差)

		社会不安低群	社会不安高群
外集団条件	受容条件	2.81 (0.46)	3.31 (0.36)
	排斥条件	5.43 (0.34)	6.20 (0.58)
内集団条件	受容条件	2.60 (0.41)	3.61 (0.43)
	排斥条件	5.45 (0.41)	6.25 (0.41)

再親和欲求の程度 再親和欲求の程度の指標 (9 件法) に対し、 $2 \times 2 \times 2$ の分散分析を行った(図 6-1)。その結果、排斥の主効果が有意で ($F(1, 72) = 4.92, p = .030, \eta^2_p = .06$)、受容条件の参加者 ($M = 3.08, SE = 0.21$) よりも排斥条件の参加者 ($M = 5.83, SE = 0.22$) の方が、再親和欲求の程度が高くなっていた。

また、集団成員性の主効果が有意で ($F(1, 72) = 5.43, p = .023, \eta^2_p = .07$)、外集団条件 ($M = 3.45, SE = 0.32$) の参加者よりも内集団条件の参加者 ($M = 4.48, SE = 0.30$) の方が、再親和欲求の程度が高くなっていた。

社会不安の主効果と 1 次の交互作用は、いずれも有意ではなかった(社会不安 $F(1, 72) = 0.69, p = .409, \eta^2_p = .01$; 排斥 \times 集団成員性 $F(1, 72) = 0.38, p = .542, \eta^2_p = .01$; 集団成員性 \times 社会不安 $F(1, 72) = 3.42, p = .068, \eta^2_p = .05$; 排斥 \times 社会不安 $F(1, 72) = 2.76, p = .101, \eta^2_p = .04$)。

また、2 次の交互作用が有意だった ($F(1, 72) = 4.00, p = .049, \eta^2_p = .05$) ため、単純単純主効果検定を行った。その結果、社会不安高群の排斥条件において集団成員性の単純単純主効果が有意で ($t(72) = 2.91, p = .005, \text{Hedges}' g = 1.60$)、外集団条件 ($M = 2.40, SE = 0.84$) よりも内集団条件 ($M = 5.40, SE = 0.60$) の方が、再親和欲求の程度が高かった。対して、社会不安低群の排斥条件では集団成員性の単純単純主効果は有意ではなく ($t(72) = 0.52, p = .604, \text{Hedges}' g = 0.21$)、内集団条件 ($M = 4.80, SE = 0.60$) と外集団条件 ($M = 5.20, SE = 0.49$) の間に差は見られなかった。

また、外集団条件の排斥条件において社会不安の単純単純主効果が有意で ($t(72) = 2.88, p = .005, \text{Hedges}' g = 1.48$)、社会不安低群 ($M = 5.20, SE = 0.49$) よりも社会不安高群 ($M = 2.40, SE = 0.84$) の方が、再親和欲求の程度が低かった。対して、内集団条件の排斥条件では社会不安の単純単純主効果は有意ではなく ($t(72) = 0.71, p = .479, \text{Hedges}' g = 0.32$)、社会不安低群 ($M = 4.80, SE = 0.60$) と高群 ($M = 5.40, SE = 0.60$) の間で差は見られなかった。

受容条件では、いずれの単純単純主効果も有意ではなかった (受容条件・社会不安低群 $t(72) = 0.92, p = .359, \text{Hedges}' g = 0.61$; 受容条件・社会不安高群 $t(72) = 0.85, p = .399, \text{Hedges}' g = 0.36$; 受容条件・外集団条件 $t(72) = 0.51, p = .611, \text{Hedges}' g = 0.32$; 受容条件・内集団条件 $t(72) = 0.35, p = .730, \text{Hedges}' g = 0.16$) (受容条件・社会不安低群・内集団条件 $M = 3.70, SE = 0.60$; 受容条件・社会不安低群・外集団条件 $M = 2.88, SE = 0.67$; 受容条件・社会不安高群・内集団条件 $M = 4.00, SE = 0.63$; 受容条件・社会不安高群・外集団条件 $M = 3.31, SE = 0.52$)。

以上の結果をまとめると、全体として受容条件よりも排斥条件の方が再親和を求める程度が高まっていた。さらに社会不安高群では、被排斥経験後の再親和の相手が外集団成員である場合よりも内集団成員である場合の方が、再親和を求める程度が高かった。これらの結果は、仮説と一致するものであった。

対して社会不安低群では、排斥経験後に再親和を求める程度が高まっていたが、再親和の相手が内集団成員である場合と外集団成員である場合で有意な差が見られなかった。この結果は、本研究の仮説を支持するものではなかった。

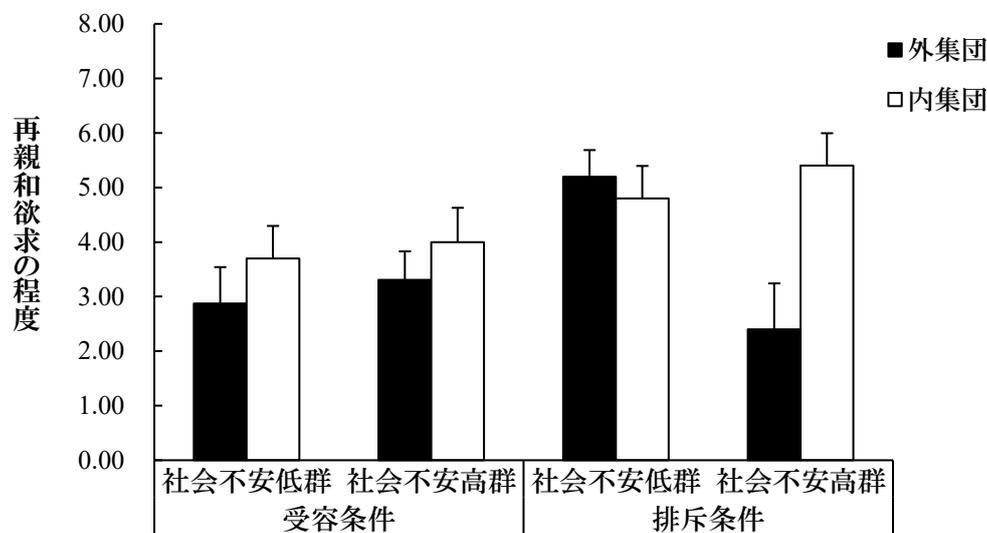


図 6-1. 各条件における再親和欲求の程度(エラーバーは標準誤差)

6.2.3 考察

実験 4 の目的は、被排斥経験後の再親和において、再親和の相手が外集団成員である場合よりも内集団成員である場合の方が、再親和を求める程度が高くなるのか検討することであった。実験 4 では、サイバーボール課題を用い、参加者に被排斥状況を実際に経験してもらい、被排斥経験後

の反応を測定した。また、最小条件集団パラダイムを用いて、現実の集団間関係や集団の持つ特徴による影響を、可能な限り排した状況で検討した。

実験の結果、全体として受容条件よりも排斥条件の方が再親和を求める程度が高まっていた。さらに社会不安高群では、被排斥経験後の再親和の相手が外集団成員である場合よりも内集団成員である場合の方が、再親和を求める程度が高かった。この結果は、仮説と一致するものであった。

対して社会不安低群では、排斥経験後に再親和を求める程度が高まっていたが、再親和の相手が内集団成員である場合と外集団成員である場合で有意な差が見られなかった。この結果は、本研究の仮説を支持するものではなかった。これには、社会不安の低い者が持つ特性が影響している可能性が考えられる。例えば、社会不安の低い者ほど、自身の社交的スキルを高く評価することがわかっている (e.g., 原田・島田, 2002)。また、社会不安の程度は、ビッグファイブ性格特性とも関連しており、社会不安の低い者ほど外向性が高い (e.g., Kaplan, Levinson, Rodebaugh, Menatti, & Weeks, 2015)。このように、社会不安の低い者は外向性が高く社会的スキルの自己評価が高いため、他者との相互作用を積極的に行うことが可能であると考えられる。加えて、他者への信頼が低い者においては、社会不安が低いほど経験への開放性 (openness to experience) が高いことも示されている (Kaplan et al., 2015)。この傾向は、特性として他者への信頼が低い者において見られたものであるが、他者を信頼できないような状況においても同様の傾向が生じることは十分に考えられる。経験への開放性は、知的好奇心、新奇性や多様性への選好等を反映した特性である。社会不安の低い者は、被排斥経験後に外集団成員と接触するといったような、他者を信頼するのが難しい状況において開放性を示し、外集団成員に再親和を求めることが可能なのかも知れない。この点に関しては、更なる研究が必要であろう。

6.3 実験3と実験4のまとめ

被排斥経験後には集団の類似性を高く知覚するようになり、外集団と内集団を峻別できるようになる。人は外集団成員を脅威だと知覚しやすい (Hart et al., 2000; Olsson et al., 2005) が、被排斥経験後には集団の類似性の知覚が高まり外集団成員をより脅威だと知覚しやすくなり、外集団成員に対する再親和行動を取りにくくなると予測される。加えて、社会不安の高い者は、他者からの否定的な評価や拒絶といった社会的脅威に関する手がかりに注意を向けやすく、社会的脅威を過大視しやすい (Heinrichs & Hofmann, 2001) ことから、上述の傾向は社会不安の高い者においてさらに顕著に現れると予測される。対して、内集団成員は外集団成員と比べてポジティブに評価され

(Brewer & Campbell, 1976; Tajfel, 1978)、相互作用において不安を喚起しにくい (e.g., Plant & Devine, 2003; Shelton et al., 2005; Trail et al., 2009)。また、概して外集団成員よりも社会的つながりの源泉となりやすい (Correll & Park, 2005)。そのため、社会不安の高い人であっても、内集団成員に対しては排斥経験後に再親和を求めることが出来るのではないかと考えられる。以上をまとめると、被排斥経験後には再親和を求める程度が高くなるが、その程度は外集団成員に対してよりも、内集団成員に対しての方が高いだろうと予測される。さらに、この傾向は社会不安の低い者において、顕著に表れるだろうと予測される。

上記の仮説を検討するため、実験 3 および実験 4 を検討した。実験 3 は質問紙を用いた場面想定法の実験であった。参加者には架空の SNS サイト上での出来事についてのシナリオを読んでもらったが、このシナリオの内容によって排斥条件もしくは受容条件に割り振られた。その後、シナリオに記された出来事を経験したと想定して、内集団あるいは外集団に対して再親和を求めるとするか、それぞれ評定してもらった。実験 4 ではパソコン上でサイバーボール課題を実施し、実際に参加者に排斥あるいは受容される状況を経験してもらった。その後、半数の参加者には再親和相手が内集団であると伝え、残りの参加者には外集団であると伝え、再親和を求める程度を測定した。いずれの実験でも、社会不安の程度は日本版 FNE 尺度の短縮版 (笹川他, 2004) を用いて測定した。

社会不安の高い人に関しては、実験 3 では排斥経験後に外集団よりも内集団の成員に対して再親和を求める傾向が見られた。実験 4 では再親和の相手が外集団成員である場合には再親和を求めていなかったが、内集団成員である場合は再親和を求めていた。また、社会不安の高い人が被排斥経験後に内集団成員に対して再親和を求めた程度は、社会不安の低い人が被排斥経験後に再親和を求めた程度と同水準であった。実験 3 および実験 4 で示された結果は、本研究の仮説を支持するものであった。これまでの研究では、社会不安の高い人が被排斥経験後に再親和を求めないことが示されていた (Mallott et al., 2009; Maner et al., 2007)。しかし、本論文で得られた結果は、内集団の成員に対してであれば社会不安の高い人であっても再親和を求めることができる可能性を示唆している。社会的なつながりを断たれた状態のままでは、心身の不適応につながる可能性があり、社会的なつながりを再び得ることは重要である。また、被排斥経験は他者に対する攻撃行動を引き起こす可能性もあり、実際に社会的に大きな問題となった殺傷事件の背景に犯人の社会からの孤立や強い孤独感が指摘されるケースも少なくない (e.g., Leary et al., 2003; 碓井, 2008; 木村, 2014)。過去の研究では、被排斥経験後に少しでも社会的なつながりを得ることができた場合には攻撃性が高まらないことが示されており (DeWall et al., 2010)、被排斥経験後の攻

撃性を抑制する、あるいは社会的な問題を未然に防ぐといった観点からも、本研究は大きな示唆を与えるものであり、意義があると言えるだろう。

対して社会不安の低い人に関しては、実験 3 では排斥経験後に再親和を求めるにあたって、内集団成員に対しても外集団成員に対しても、再親和を求める程度は変わらなかった。同様に実験 4 では、再親和の相手が外集団成員である場合でも内集団成員である場合でも、再親和を求めている。これは、外集団成員に対しては再親和を求めないであろうという予測とは反する結果であった。すでに述べたように、社会不安の低い者ほど社会的スキルの自己評価が高く (e.g., 原田・島田, 2002)、外向性も高い (e.g., Kaplan et al., 2015)。そのため、他者との相互作用を積極的に行うことが可能であると考えられる。加えて、他者への信頼が低い者においては、社会不安が低いほど経験への開放性 (openness to experience) が高いことも示されている (Kaplan et al., 2015) ことから、被排斥経験後に外集団成員と接触するといったような、他者を信頼するのが難しい状況において開放性を示し、外集団成員に再親和を求めることが可能になるということも考えられる。本研究ではこの点について明らかにすることはできておらず、今後の検討が必要となるだろう。

実験 3 および実験 4 の結果、社会不安の高い人は、排斥されても外集団成員に対しては再親和を求めないことが示された。では、社会不安の高い人々は、どのような条件下であれば外集団の成員に対しても再親和を求めることができるのであろうか。本論文では、実験 1 や実験 2 で検討した集団の類似性知覚に着目し、外集団の類似性知覚が低減すれば再親和を求めることができるのではないかと予測し、実験を行った。

7章 集団類似性の知覚の低減が被排斥経験後に外集団成員に再親和を求める程度に与える影響

実験 5 および実験 6 の目的は、特に社会不安の高い人において、どのような条件下であれば被排斥経験後に外集団成員に対しても再親和を求めることができるようになるか、検討することである。本論文では、実験 1 や実験 2 で検討した集団の類似性知覚に着目した。

排斥を受けると集団の類似性の知覚が高まり(実験 1 および実験 2)、外集団と内集団を峻別できるようになる。その結果、外集団成員を脅威であるとより知覚しやすくなり、外集団成員に対して再親和を求めるのが困難になると考えられる。特に、社会不安の高い者は社会的脅威に関する手がかりに注意を向けやすく、また社会的脅威を過大視しやすい (Heinrichs & Hofmann, 2001) ことから、社会不安の高い者は外集団成員に対して再親和を求めることが困難である(実験 3 および実験 4)。

Kashdan et al. (2008) によれば、社会不安の高い人は、他者と相互作用を持つことの利点はわかっていながらも、相互作用における社会的な脅威に対して不安を感じてしまうことが示されている。外集団との再親和に対する不安が、外集団の類似性の知覚が高まることで生じているとすれば、外集団の類似性の知覚を低減させることで高社会不安者も外集団成員に対しても再親和を求められるようになると予測される。この予測を検討するため、実験 5 および実験 6 を実施した。

7.1 実験5

実験 5 は、実験室実験を実施した。すべての参加者にサイバーボール課題を通じて排斥を経験してもらい、社会不安の高い人において、集団の類似性の知覚が高い場合と比べて低い場合には再親和の相手が外集団成員であっても再親和を求める程度が高まるのか、検討した。

7.1.1 方法

実験参加者と実験計画 一橋大学の学生 62 名 (男性 49 名、女性 13 名; 年齢 $M = 19.4$, $SD = 1.2$) が参加した。実験計画は 2 (社会不安: 低群/高群) \times 2 (類似性知覚: 低類似性/高類似性) の参加者間計画だった。社会不安の低群と高群は、実験に先立ち測定した日本版 FNE 尺度短縮版 (笹川他, 2004) の得点に基づき、事後的に分割した。

手続き 1セッションあたりの参加者は3名から4名で、互いに顔が見えない状態で実験は実施された。参加者にはカバーストーリーとして、個人的特徴や想像力が意思決定課題の遂行に及ぼす影響に関する研究であると教示した。初めに、個人的特徴(認知スタイル)を判定するための課題として、ドット数推量課題に取り組んでもらった。課題終了後、判定結果は次のゲームの後にフィードバックされると伝えた。続いて、想像力のトレーニングのゲームとして、サイバーボール課題に取り組んでもらった。ここで、参加者全員に排斥を経験してもらった。サイバーボール課題後、ドット数推量課題の結果として、自身以外のこの場にいる参加者は自身とは異なる認知スタイルであった(i.e. 外集団成員であった)とフィードバックした。さらに、フィードバック用紙に記載された認知スタイルに関する説明の内容を変えることで、集団類似性の知覚の程度を操作した。最後に、意思決定課題の2つのバージョン(一人で取り組むか、他の参加者と一緒に取り組む)のうち、どちらの課題に取り組みたいと思うか評定を求めた。他の参加者と一緒に取り組む課題に取り組みたいと思う程度を、外集団成員に対する再親和欲求の程度とした。実際にはこの意思決定課題は実施されず、デブリーフィングを行い、実験は終了した。各手続きの詳細は以下の通りである。

集団成員性の設定、および類似性の知覚の操作 最小条件集団パラダイムの一つであるドット数推量課題 (Tajfel, 1970; Tajfel et al., 1971) を援用し、集団成員性を設定した。この課題は、パソコン画面上に瞬時的 (800 ms) に表示された黒点の数を推量するもので、全8問が課された。参加者は画面上に表示された点の数を推量し、その回答を答案用紙に記入した。カバーストーリー上では情報処理のスタイルを測定するための課題であるとし、この課題における回答の傾向から実際の数よりも多く推測する傾向のある Over-estimator か、実際の数よりも少なく推測する傾向のある Under-estimator に分類されると伝えた。なお、これらの認知スタイルや、認知スタイルを判定するための課題は、実在しない架空のものであった。

ドット数推量課題の結果は、サイバーボール課題後に教示した。ドット数推量課題の結果をフィードバックする際、参加者自身は Under-estimator であったが他の参加者は Over-estimator であった、つまり、自身以外の実験に参加している者は外集団成員であると伝えた。また、フィードバック用紙には、認知スタイルに関する簡単な説明が記載されていたが、その内容によって低類似性条件と高類似性条件に分けられた。低類似性条件では、「同じ認知スタイルの人でも異なった判断や決定をする場合も多く、性格にも異なる点が見られる。また、判定テストでの回答傾向が異なる。」という内容が記載されていた。対して、高類似性条件では、「同じ認知スタイルの人は似た判断や決定をしやすく、性格にも多くの共通点が見られる。また、判定テストでの回答傾向も類似している。」という内容が記載されていた。なお、このフィードバックに用いた用紙は、付録Eとして付した。

被排斥状況の設定 実験 5 では、サイバーボール課題を通じて全ての参加者に被排斥経験をしてもらった。これまでの実験と同様に、参加者はコンピュータープログラムのプレーヤー2名とキャッチボールのゲームに取り組んだ。参加者には、視覚的なイメージを作るトレーニングであり、相手のプレーヤーはコンピューターのプログラムであると教示した。すべての参加者が、ゲームの序盤に2回ボールが回ってきた以降は全くボールが回ってこない、という経験をした。

外集団成員に対する再親和欲求の程度の測定 最後に実施する意思決定課題には1名で取り組むバージョンと他の参加者と一緒に取り組むバージョンがあり、どちらに取り組むのかを参加者が選択することができる、と教示した。そして、どちらのバージョンに取り組んでもらうか決めるため、それぞれの課題に取り組みたいと思う程度を「取り組みたいと思わない」(0点)から「取り組みたいと思う」(8点)の9件法で尋ねた。このうち、他の参加者と一緒に取り組む課題に取り組みたいと思っていた程度を、外集団成員に対する再親和欲求の指標とした。実験5では、他の参加者と一緒に関題に取り組むことを選択した場合、すべての参加者において課題の相手は異なる認知スタイルの人(i.e., 外集団の成員)であるため、この指標の値が大きいほど外集団に対する再親和欲求の程度が高いことを表していると考えられる。なお、参加者にはこの課題の内容について詳しくは説明しなかったが、どちらを選択しても課題の遂行において有利・不利は無いと伝えた。

類似性知覚の操作チェック 外集団成員に対する再親和欲求の程度の測定後、実験に関するアンケートに回答してほしいと伝え、そこで集団類似性の知覚の操作チェックを行った。具体的には、「同じ認知スタイルの人同士は、全体的に似ていると思う」、「同じ認知スタイルの人は、価値観や意見が一致していると思う」の2項目に、「全くあてはまらない」(1点)から「とてもあてはまる」(5点)の5件法で評定を求めた。

7.1.2 結果

分析対象者 実験に関するアンケートにおいて、実験の目的に気が見られた2名の実験参加者を、分析対象者から除外した。

社会不安 実験に先立ち測定したFNE尺度短縮版(5件法12項目; $\alpha = .89$)の得点($M = 3.42$, $SD = 0.76$)に基づいて、社会不安の低群と高群に中央値($Me = 3.45$)で分割した。その結果、各条件の参加者の人数は表7-1の通りとなった。なお、参加者のうち1名については社会不安の程度を測定できなかったため、以降は除外して分析を行った。

表 7-1. 各条件の参加者数 (カッコ内は女性の参加者数)

	社会不安低群	社会不安高群
低類似性条件	20 (7)	13 (3)
高類似性条件	11 (1)	17 (2)

類似性知覚の操作チェック 類似性知覚の操作チェックに用いた 2 項目 (5 件法; $r = .66, p < .001$) を合算し、類似性知覚の指標とした。この指標について 2 (社会不安: 低群/高群) \times 2 (類似性知覚: 低類似性/高類似性) の分散分析を行った (表 7-2)。分析の結果、社会不安の主効果 ($F(1,57) = 0.03, p = .863, \eta^2_p = .00$)、類似性知覚の主効果 ($F(1,57) = 0.00, p = .997, \eta^2_p = .00$)、交互作用 ($F(1,57) = 0.34, p = .564, \eta^2_p = .01$) のいずれも有意ではなかった。

分析の結果、低類似性条件と高類似性条件の間で集団の類似性知覚の程度に有意な差は見られず、ドット数推量課題のフィードバック用紙における教示文による類似性知覚の操作は成功していなかった可能性が考えられる。

表 7-2. 各条件における集団類似性知覚の程度の推定周辺平均 (カッコ内は標準誤差)

	社会不安低群	社会不安高群
低類似性条件	2.88 (0.18)	3.04 (0.23)
高類似性条件	3.00 (0.25)	2.91 (0.20)

外集団成員に対する再親和欲求の程度 外集団成員に対する再親和欲求の程度の指標 (9 件法) に対し、 2×2 の分散分析を行った (表 7-3)。その結果、社会不安の主効果 ($F(1,56) = 0.07, p = .795, \eta^2_p = .00$)、類似性知覚の主効果 ($F(1,56) = 0.63, p = .431, \eta^2_p = .01$)、交互作用 ($F(1,56) = 0.15, p = .698, \eta^2_p = .00$) のいずれも有意ではなかった。

交互作用は有意ではなかったものの、単純主効果検定を行った。その結果、社会不安の単純主効果は有意ではなかった (低類似性条件 $F(1,56) = 0.24, p = .627, \eta^2_p = .00$; 高類似性条件 $F(1,56) = 0.01, p = .932, \eta^2_p = .00$)。また、類似性知覚の単純主効果も有意ではなかった (社会不安低群 $F(1,56) = 0.67, p = .417, \eta^2_p = .01$; 高類似性条件 $F(1,56) = 0.09, p = .771, \eta^2_p = .00$)。

分析の結果、低類似性条件においても外集団成員に対して再親和を求める程度は高まっておらず、仮説を支持するような結果は得られなかった。

表 7-3. 各条件における外集団に対する再親和欲求の程度の推定周辺平均 (カッコ内は標準誤差)

	社会不安低群	社会不安高群
低類似性条件	4.05 (0.46)	3.69 (0.57)
高類似性条件	3.40 (0.65)	3.47 (0.50)

7.1.3 考察

実験 5 の目的は、特に社会不安の高い人において、集団の類似性の知覚を低減させることで外集団成員に対しても再親和を求められるようになるのか、検討することであった。実験 5 では、サイバールール課題を用い、参加者に被排斥状況を実際に経験してもらい、被排斥経験後の反応を測定した。また、最小条件集団パラダイムを用いて、現実の集団間関係や集団の持つ特徴による影響を、可能な限り排した状況で検討した。

操作チェックの結果 分析の結果、低類似性条件と高類似性条件の間で、集団に対する類似性知覚の程度に有意な差が見られなかった。この結果から、ドット数推量課題のフィードバック用紙における教示文による類似性知覚の操作に失敗していた可能性が考えられる。

外集団成員に対する再親和欲求の程度 分析の結果、社会不安の低群と高群のいずれにおいても、高類似性条件と低類似性条件の間で外集団成員に対する再親和欲求の程度に有意な差は見られなかった。この結果は、本研究の仮説を支持するものではなかった。

以上のように、実験 5 では本研究の仮説を支持するような結果は得られなかった。仮説が支持されなかった原因としては、類似性知覚の操作がうまくいっていなかったことが考えられる。実験 5 では、ドット数推量課題の判定結果をフィードバックする用紙に、認知スタイルに関する説明の一部として、集団の類似性の情報が記載されていた。参加者にとっては、同一の用紙上に記載されていた自身や他の参加者の判定結果の方がより関心を引く情報であると考えられ、集団類似性に関する記述にはあまり注意を払っていなかった可能性がある。実験 6 では、ドット数推量課題の結果のフィードバックと集団の類似性に関する情報は同時には与えないようにし、参加者がそれぞれの情報に十分な注意を払うことができるようにした。

加えて、実験 5 における集団類似性に関する記述は、単に文章で性格や判断傾向が似ていると書かれているだけで、具体性に欠けていた。そのため、集団類似性の実験操作のインパクトが十分でなかった可能性が考えられる。そこで、実験 6 では単に文章で集団類似性の情報を与えるだけでなく、集団内における性格特性の分布を表すグラフを呈示し、このグラフの裾の広さを変えることで、類似性の情報を操作した。先に述べたように、集団の類似性の知覚は、グラフやヒストグラム(の形

状)で表すことが可能であると考えられる (cf. Park & Judd, 1990)。また、実験 2 では、排斥を経験して集団類似性の知覚が高まることで、作成したヒストグラムにおける評定値の平均値は変わらずに、分散が小さくなっていった。これは、(正規分布かそれに近い分布をしていた場合)ヒストグラムの山の位置は変わらずに、分布の裾が狭くなったことを意味している。以上を踏まえ、実験 6 では集団類似性の操作として、単に文章で情報を与えるだけでなく、集団内における性格特性の分布を表すグラフを用いて、視覚的な情報も与えることとした。また、グラフの山の位置を(ほとんど)変えずに、分布の裾を変えることによって、集団類似性の知覚を操作した。

また、実験 6 は教場で一斉に実験を実施したため、これまでの実験のように他の実験参加者の集団成員性の情報を与えるのが困難になった。そこで、集団成員性のフィードバック方法と従属変数の測定方法を変更した。具体的には、実験参加者には自身の集団成員性(ドット数推量課題)のみをフィードバックした。また、再親和相手として内集団成員と外集団成員のどちらを求めるのか尋ねる両極尺度を用い再親和欲求の程度を測定し、外集団成員に対して再親和を求める程度を測定した。

7.2 実験6

実験 6 はパソコンを用い、教場で一斉に実施した。すべての参加者にサイバーボール課題を通じて排斥を経験してもらい、社会不安の高い人において、集団の類似性の知覚が高い場合と比べて低い場合には再親和の相手が外集団成員であっても再親和を求める程度が高まるのか、検討した。

7.2.1 方法

実験参加者と実験計画 東洋大学の学生 77 名 (男性 21 名、女性 56 名; 年齢 $M = 18.3$, $SD = 0.8$) が参加した。実験計画は 2 (社会不安: 低群/高群) \times 2 (類似性知覚: 低類似性/高類似性) の参加者間計画だった。社会不安の低群と高群は、実験の冒頭で測定した日本版 FNE 尺度短縮版 (笹川他, 2004) の得点に基づき、事後的に分割した。

手続き 実験は東洋大学のパソコン教室で、一斉に実施された。参加者にはカバーストーリーとして、個人的特徴や想像力が意思決定課題の遂行に及ぼす影響に関する研究であると教示した。初めに、日本版 FNE 尺度短縮版 (笹川他, 2004) を用いて参加者の社会不安の程度を測定した。続いて、個人的特徴 (認知スタイル) を判定するための課題として、ドット数推量課題に取り組んでもらった。課題終了後、判定結果は次のゲームの後にフィードバックされると伝えた。続いて、想像力の

トレーニングのゲームとして、サイバーボール課題に取り組んでもらった。ここで、参加者全員に排斥を経験してもらった。サイバーボール課題後、ドット数推量課題の判定結果として、全ての参加者に対して Under-estimator であったと教示した。判定結果に続いて認知スタイルに関する説明を行ったが、その内容を変えることで、集団類似性の知覚の程度を操作した。最後に、実験の最後に行う意思決定課題は他の参加者と一緒に取り組むものであるが、Under-estimator の人と Over-estimator の人のどちらと一緒に課題に取り組みたいと思うか評定を求めた。Over-estimator の人と一緒に課題に取り組みたいと思う程度を、外集団成員に対する再親和欲求の程度とした。実際にはこの意思決定課題は実施されず、デブリーフィングを行い、実験は終了した。各手続きの詳細は以下の通りである。

集団成員性の設定、および類似性の知覚の操作 最小条件集団パラダイムの一つであるドット数推量課題 (Tajfel, 1970; Tajfel et al., 1971) を援用し、社会的カテゴリーを設定した。この課題は、パソコン画面上に瞬時的 (800 ms) に表示された黒点の数を推量するもので、全 8 問が課された。参加者は画面上に表示された点の数を推量し、その回答をパソコンで入力した。カバーストーリー上では情報処理のスタイルを測定するための課題であるとし、この課題における回答の傾向から実際の数よりも多く推測する傾向のある Over-estimator か、実際の数よりも少なく推測する傾向のある Under-estimator に分類されると伝えた。なお、これらの認知スタイルや、認知スタイルを判定するための課題は、実在しない架空のものであった。

ドット数推量課題の結果は、サイバーボール課題後に教示した。ドット数推量課題の結果として、参加者は Under-estimator であったと伝えた。また、課題の結果をフィードバックした次の画面では、認知スタイルに関する簡単な説明が記載されていたが、その内容によって低類似性条件と高類似性条件に分けられた。低類似性条件では、「同じ認知スタイルの人でも異なった判断や決定をする場合も多く、性格にも異なる点が見られる」という内容が記載されていた。対して、高類似性条件では、「同じ認知スタイルの人は似た判断や決定をしやすく、性格にも多くの共通点が見られる」という内容が記載されていた。これらの文章による教示に加えて、実験 6 では類似性知覚に関する視覚的な手がかりも与えた。具体的には、性格特性の分布のイメージ図として、Over-estimator の人の中で「大胆な人」がどのように分布しているのかを表すグラフを例示した。低類似性条件では分布の裾が広いグラフを呈示し、高類似性条件では分布の裾が狭いグラフを呈示した(図 7-1, 7-2)。なお、フィードバックの際に表示されたパソコン画面の詳細は、付録Fとして付した。

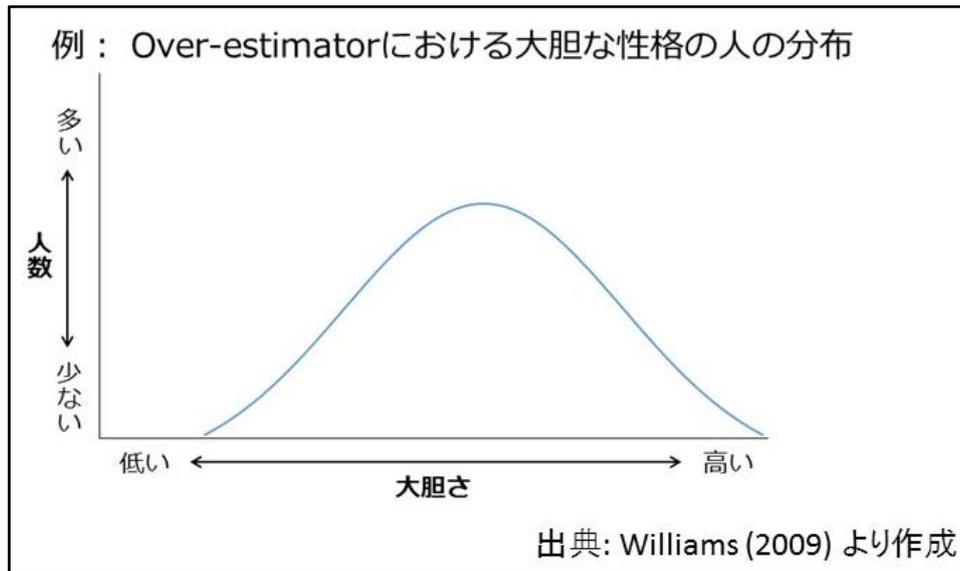


図 7-1. 低類似性条件で呈示したグラフ

註) 図中の出典は、グラフの信憑性を高めるために付したもので、実在しないものである。

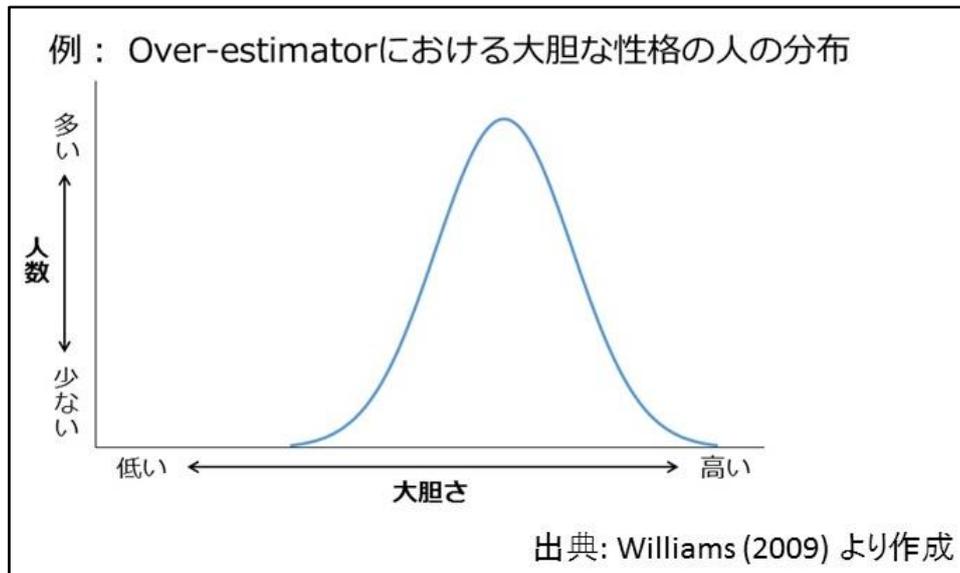


図 7-2. 高類似性条件で呈示したグラフ

註) 図中の出典は、グラフの信憑性を高めるために付したもので、実在しないものである。

被排斥状況の設定 実験 6 では実験 5 と同様に、サイバーボール課題を通じて全ての参加者に被排斥経験をしてもらった。これまでの実験と同様に、参加者はコンピュータープログラムのプレイヤー2名とキャッチボールのゲームに取り組んだ。参加者には、視覚的なイメージを作るトレーニング

であり、相手のプレーヤーはコンピューターのプログラムであると教示した。すべての参加者が、ゲームの序盤に2回ボールが回ってきた以降は全くボールが回ってこない、という経験をした。

外集団成員に対する再親和欲求の程度の測定 最後に実施する意思決定課題は他の参加者と一緒に取り組むものであるが、Over-estimator の人と Under-estimator の人のどちらと一緒に取り組むのかを参加者が選択することができる、と教示した。そして、どちらの認知スタイルの人と一緒に取り組んでもらうか決めるため、どちらの認知スタイルの人と取り組みたいと思うか「アンダー・エスティメーターの人」(1点) から「オーバー・エスティメーターの人」(6点) の6件法の両極尺度で尋ねた。この指標の値が大きいほど、外集団に対する再親和欲求の程度が高いことを表していると考えられる。なお、参加者にはこの課題の内容について詳しくは説明しなかったが、どちらの人と課題に取り組んでも課題の遂行において有利・不利は無いと伝えた。

類似性知覚の操作チェック 外集団成員に対する再親和欲求の程度の測定後、実験に関するアンケートに回答してほしいと伝え、そこで集団類似性の知覚の操作チェックを行った。具体的には、「同じ認知スタイルの人同士は、全体的に似ていると思う」、「同じ認知スタイルの人は、価値観や意見が一致していると思う」の2項目に、「全くあてはまらない」(1点) から「とてもあてはまる」(7点) の7件法で評定を求めた。

7.2.2 結果

分析対象者 実験に関するアンケートにおいて、自身の認知スタイルの判定結果を正しく答えられなかった1名の実験参加者を、分析対象者から除外した。その結果、低類似性条件の参加者は39名(男性10名、女性29名)、高類似性条件の参加者は36名(男性9名、女性27名)となった。

類似性知覚の操作チェック 類似性知覚の操作チェックに用いた2項目(5件法; $r = .66, p < .001$)を合算し、類似性知覚の指標とした。この指標を従属変数、社会不安(連続変数, $M = 3.25, SD = 0.90$)、類似性知覚(低類似性条件 = 0, 高類似性条件 = 1)、およびこれらの交互作用項を独立変数とする重回帰分析を行った(表7-4)。分析の結果、類似性知覚の主効果($\beta = .19, t(72) = 1.70, p = .093$)と社会不安の主効果($\beta = .07, t(72) = 0.59, p = .557$)は有意ではなかったが、交互作用が有意だった($\beta = .24, t(72) = 2.17, p = .034$)。

交互作用が有意だったので、単純傾斜検定を行った。その結果、社会不安の高群(+1SD)では類似性知覚の効果が有意で($\beta = .60, t(72) = 2.71, p = .008$)、低類似性条件よりも高類似性条件の方が、類似性知覚の指標が高かった。しかし、社会不安の低群(-1SD)では類似性知覚の条件の効果が有意ではなく($\beta = -.06, t(72) = 0.35, p = .731$)、低類似性条件と高類似性条件の間で類似性

知覚指標に有意な差は見られなかった。なお、社会不安の効果は、低類似性条件($\beta = -.18, t(72) = 1.17, p = .245$)と高類似性条件のいずれにおいても有意ではなかった($\beta = .31, t(72) = 1.86, p = .067$)。

以上の結果より、社会不安の高い人においては、高類似性条件の参加者よりも低類似性条件の参加者の方が、集団の類似性知覚の程度が低かった。よって、社会不安の高い人においては、集団類似性知覚の操作は有効であったと言える。

他方で社会不安の低い人では、低類似性条件と高類似性条件の間で、類似性知覚の程度に有意な差が見られなかった。この結果から、低社会不安者においては類似性の操作が有効ではなく、低類似性条件と高類似性条件の間で集団の類似性知覚の程度に差が生じなかったと考えられる。

表 7-4. 各条件における集団類似性知覚の程度の予測値 (カッコ内は標準誤差)

	社会不安低群(-1SD)	社会不安高群(+1SD)
低類似性条件	4.12 (0.26)	3.73 (0.23)
高類似性条件	4.00 (0.24)	4.70 (0.28)

外集団成員に対する再親和欲求の程度 外集団成員に対する再親和欲求の程度の指標 (6 件法) を従属変数、社会不安(連続変量)、類似性知覚(低類似性条件 = 0, 高類似性条件 = 1)、およびこれらの交互作用項を独立変数とする重回帰分析を行った (図 7-3)。分析の結果、社会不安の主効果($\beta = -.10, t(72) = 0.90, p = .371$)、類似性知覚の主効果($\beta = -.21, t(72) = 1.85, p = .069$)、および交互作用($\beta = -.13, t(72) = 1.15, p = .254$)は有意ではなかった。

交互作用は有意ではなかったものの、単純傾斜検定を行った。その結果、社会不安の高群(+1SD)では類似性知覚の効果は有意だった($\beta = .35, t(72) = 2.10, p = .039$)が、社会不安の低群(-1SD)では有意ではなかった($\beta = -.08, t(72) = 0.48, p = .630$)。社会不安の効果は、低類似性条件($\beta = .03, t(72) = 0.19, p = .853$)と高類似性条件($\beta = -.24, t(72) = 1.39, p = .170$)のいずれにおいても有意ではなかった。

以上の結果より、社会不安の高い人においては、高類似性条件よりも低類似性条件の方が、外集団成員に対して再親和を求める程度が高くなっていた。これは本研究の仮説を支持するものであった。他方で社会不安の低い人においては、低類似性条件と高類似性条件の間で、外集団成員に対する再親和欲求の程度に有意な差は見られず、仮説とは一致しない結果となった。

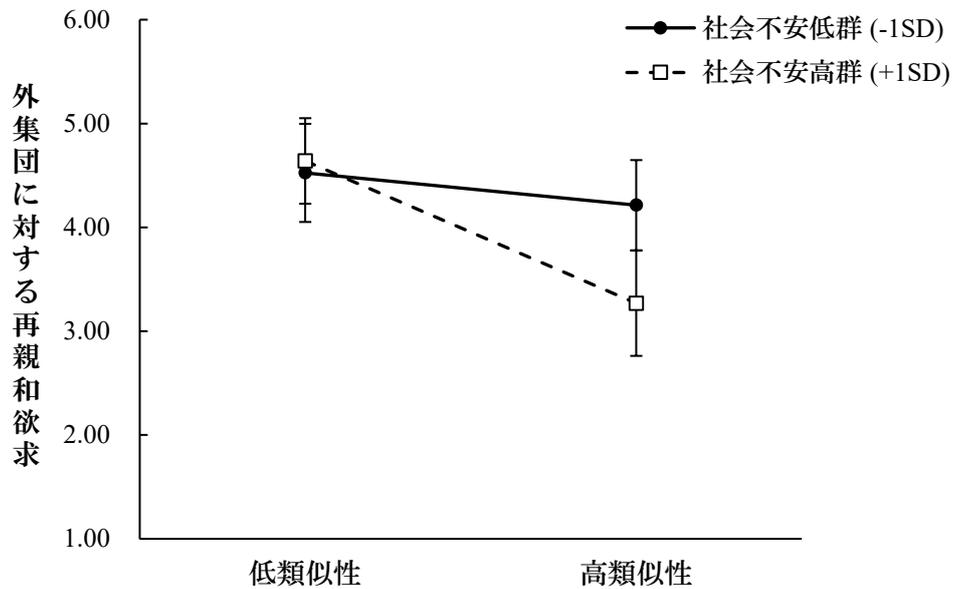


図 7-3. 各条件における外集団に対する再親和欲求の程度の予測値 (エラーバーは標準誤差)

7.2.3 考察

実験6の目的は実験5と同様に、特に社会不安の高い人において、集団の類似性の知覚を低減させることで外集団成員に対しても再親和を求められるようになるのか、検討することであった。先の実験では集団類似性知覚の操作に成功しなかったと考えられるため、本実験では集団類似性の操作方法に変更を加えた。

操作チェックの結果 分析の結果、社会不安高群では、高類似性条件よりも低類似性条件の方が集団の類似性を低く知覚していた。それに対して、社会不安低群では、低類似性条件と高類似性条件の間で集団の類似性知覚の程度において有意な差が認められなかった。この結果から、低社会不安者においては類似性の操作が有効ではなく、低類似性条件と高類似性条件の間で類似性知覚の程度に差が生じなかったと考えられる。社会不安の高い人の間では類似性知覚の程度に差が生じたのに対して、社会不安の低い人では実験操作が有効でなかったのはなぜなのであろうか。

一つに考えられるのは、社会不安の高い人と比べて、社会不安の低い人においては被排斥経験後でも類似性の知覚が高まりにくい、という可能性である。本実験での操作チェック項目に対する分散分析では、社会不安の単純傾斜は有意ではなかったが、高類似性条件において社会不安高群よりも社会不安低群の参加者の方が、類似性知覚の程度が低い傾向が見られた。この結果は、低社会不安者は排斥されても集団を類似していると知覚していない、すなわち多様性があると知覚し

ている、ということを示唆している。被排斥経験後に、集団成員性とはじめとする受容と排斥に関わる社会的カテゴリーの類似性を高く知覚するのは、再親和を得るために受容の可能性の高い他者を見極めるためであると考えられる。つまり、社会不安の低い人が排斥を経験しても集団を類似していると知覚しないとするのであれば、低社会不安者は被排斥経験後に受容の可能性の高い他者を見極める必要性が(高社会不安者と比較して)低い、という解釈が可能である。実際に、本研究の実験3や実験4においても、低社会不安者は被排斥経験後に、相手が外集団であっても内集団であっても再親和を求める程度は変わらなかった。本研究や先行研究では、被排斥経験後における集団類似性知覚の変化に対する社会不安による調整効果を予測しておらず、この点については検討できていない。低社会不安者が排斥を経験した後に、集団の類似性をどのように知覚するようになるのかについては、今後の検討課題である。また、本研究で用いた社会的カテゴリーは集団成員性のみであり、上述のような傾向も集団の類似性知覚のみに限られるのか、受容と排斥に関わる他の社会的カテゴリー(e.g., 笑顔と怒り顔)での類似性の知覚についても検討する必要があるだろう。

外集団成員に対する再親和欲求の程度 社会不安の低い人においては、低類似性条件と高類似性条件の間で、外集団成員に対する再親和欲求の程度に有意な差は見られなかった。これは、社会不安低群で類似性知覚の操作が有効ではなかったためであると考えられる。本研究の実験3では、社会不安の低い人は、相手が外集団の成員であっても内集団の成員であっても再親和を求めている。実験3の結果と併せて鑑みると、本実験での結果は、社会不安低群では低類似性条件においても高類似性条件においても、外集団成員に対して再親和を求めている、と解釈することができるであろう。

他方の社会不安の高い人においては、高類似性条件よりも低類似性条件の方が、外集団成員に対して再親和を求める程度が高くなっていた。社会不安高群の低類似性条件における再親和欲求の指標($M = 4.64, SE = 0.41$)は中点よりも有意に高い($t(72) = 2.76, p = .007, r = .31$)ことから、外集団を類似していないと知覚することで、被排斥経験後の再親和欲求が高まるという仮説に沿った結果であった。

7.3 実験5と実験6のまとめ

被排斥経験後には集団の類似性の知覚が高まり(実験1、実験2)、内集団と外集団をより正確に見極められるようになる(Sacco et al., 2011)。その結果、外集団成員に対する脅威の知覚(e.g., Hart et al., 2000; Olsson et al., 2005)が強まり、外集団成員に対して再親和を求めるのが困難にな

ると考えられる。特に、社会不安の高い者は社会的脅威に関する手がかりに注意を向けやすく、また社会的脅威を過大視しやすい (Heinrichs & Hofmann, 2001) ことから、社会不安の高い者は外集団成員に対して再親和を求めることが困難となる(実験 3 および実験 4)。

Kashdan et al. (2008) によれば、社会不安の高い人は他者と相互作用を持とうとしながらも、相互作用における社会的な脅威に対して不安を感じてしまい、結果として他者との相互作用を避けてしまう。このことから、外集団との再親和に対する不安が外集団への類似性の知覚が高まることで生じているとすれば、外集団の類似性の知覚を低減させることで高社会不安者も外集団成員に対しても再親和を求められるようになると予測される。この予測を検討するため、実験 5 および実験 6 を実施した。

実験 5 では、全ての参加者にサイバーボール課題で被排斥経験をしてもらった。また、すべての参加者に、再親和の相手が外集団成員であると伝えた。その際、半数の参加者には当該の集団の類似性が低いと教示し、残りの参加者には類似性が高いと教示した。実験の結果、社会不安高群と低群のいずれにおいても、集団類似性の知覚の高低によって再親和を求める程度に有意な差は見られなかった。類似性の操作チェックの指標において、低類似性条件と高類似性条件の間に有意な差が見られなかったことから、類似性知覚の操作に失敗していた可能性が考えられる。そこで、実験 6 では類似性知覚の操作に変更を加えた。

実験 6 でも、全ての参加者にサイバーボール課題で被排斥経験をしてもらった。また、実験 5 と同様の教示文による類似性知覚の操作に加えて、性格特性の分布のイメージ図として呈示したグラフを用いて、視覚的な手がかりを与えた。具体的には、低類似性条件では分布の裾が広いグラフを呈示し、高類似性条件では分布の裾が狭いグラフを呈示した。実験の結果、対人不安の高い参加者においては、高類似性条件よりも低類似性条件の方が、類似性知覚の指標が低く、また、外集団成員に対して再親和を求める程度が高かった。この結果は本研究の仮説を支持するもので、被排斥経験後に集団類似性の知覚を低減させることで、外集団に対しても再親和を求められるようになることを示唆している。他方で、対人不安の低い参加者においては、類似性知覚の指標と外集団に対する再親和欲求の程度 of のいずれにおいても、高類似性条件と低類似性条件の間に有意な差が見られず、仮説と一致するような結果ではなかった。本研究の一連の実験から示されたのは、対人不安の低い人は被排斥経験後に、内集団に対しても外集団に対しても再親和を求める、という結果であった。本研究の目的は(特に対人不安の高い人において)どのような相手であれば再親和を求められるのか検討することであり、この目的に照らし合わせれば、対人不安の低い人々は内集団に対し

でも外集団に対しても再親和を求められるという結果は、本研究の目的にもとるような結果ではなく、大きな問題ではないと言えるだろう。

第三部

総合考察

8章 総合考察

本章では、本研究での議論をもう一度概観し、第Ⅱ部の実証研究で得られた知見をまとめる。続いて、本研究の意義や本研究の知見が与える示唆、そして今後の展望について論じる。

8.1 実証研究の結果のまとめ

本研究の目的は、社会的排斥経験後に生じる認知上の変化と、その認知上の変化が被排斥経験後の再親和に与える影響を検討することであった。特に、これまでの研究で排斥経験後に他者に再親和を求めるのが困難である可能性が示されている、社会不安の高い人々がどのような相手であれば再親和を求めることができるのかを検討した。具体的には、再親和相手の集団成員性と、集団に対する類似性の知覚に着目し、以下の3つの予測を検討することを目的としていた。まず、排斥を経験しなかった場合と比べて、排斥を経験した場合の方が、集団に対する類似性の知覚が高まるだろうと予測される。また、排斥されると、他者との再親和を求めるようになるが、外集団成員と比べると内集団成員に対する再親和欲求の方が高まる、と予測される。さらに、社会不安の高い者においてはこの傾向が顕著に表れるが、再親和相手が内集団の成員性である場合には再親和を求めることができるのではないかという予測を検討した。加えて、外集団に対する類似性の知覚の程度が高い時よりも低い時の方が、被排斥経験後に外集団成員に対して再親和を求める程度が高くなるだろう、という予測を検討した。

8.1.1 社会的排斥が集団の類似性の知覚に与える影響

実験1および実験2では、被排斥経験後には集団の類似性を高く知覚するようになるだろうと予測し、検討した。

人は一人では生きていくことが出来ないため、社会的排斥経験後には、再び他者とのつながりを得ることが重要である。実際にこれまでの研究で、人は排斥に敏感に反応し (e.g., Zadro et al., 2004)、被排斥経験後には再親和を果たそうとすることが示されている (e.g., Maner et al., 2007)。しかし、相手によっては再親和を得ることが難しい場合もあり、被排斥者は自身を受容してくれる可能性の高い他者を見極める必要があるだろう。実際に、排斥されると、受容と排斥に関わる社会的カテゴリーをより正確に峻別できるようになると報告されている (Sacco et al., 2011)。この実験の参加者

は排斥を経験した後は、笑顔と怒り顔、あるいは内集団成員の顔と外集団成員の顔をより正確に峻別できるようになっていた。他方で、カテゴリー内(e.g., 笑顔と笑顔)に関しては、その差異を見極められなくなっていた。このことから、カテゴリー内の事例同士の類似性の知覚が高まっていることが読み取れる。

実験 1 は、質問紙実験を実施した。実験では、参加者に呈示したシナリオの内容により、排斥条件と受容条件に参加者を割り振った。シナリオ呈示後、男性および女性に対して類似性をどの程度知覚しているのか尋ねた。実験の結果、異性(i.e., 外集団)に対しては、被排斥経験後に類似性の知覚が高まっていた。しかし、同性(i.e., 内集団)に対しては被排斥経験後でも類似性の知覚は高まっていなかった。内集団を類似していないとみなす背景には、内集団成員の独自性を認めることで内集団(ひいては、そこに所属する自己)を肯定的に捉えようとしている可能性がある(see Wilder, 1984)。そのため実験 2 では、個人の動機が反映されやすいと考えられる自己報告の尺度以外の方法を用いて検討した。また、実験 1 ではシナリオを用いて排斥を操作したが、参加者は実際に排斥を経験したわけではなかった。そこで実験 2 では、実験室で排斥状況を参加者に経験してもらい、集団に対する類似性知覚が変化するか検討した。

実験 2 は、実験室実験を実施した。実験では初めに、サイバーボール課題(Williams et al., 2000; Williams & Jarvis, 2006)に取り組んでもらい、そこで参加者を受容条件か排斥条件のいずれかに割り振った。その後、各集団内での性格特性の分布を表すヒストグラムを作成してもらい、類似性知覚の程度を測定した。実験 2 では、所属大学(一橋生、慶応生)と性別(男性、女性)のカテゴリーを用いて検討した。実験の結果、いずれのカテゴリーにおいても、受容条件の参加者よりも排斥条件の参加者の方が、集団の類似性知覚が高まっていた。

以上の結果から、排斥されると集団の類似性知覚が高まるという本研究の仮説が支持された。

8.1.2 再親和相手の集団成員性が被排斥経験後に再親和を求める程度に与える影響

実験 3 および実験 4 で検討した予測は、以下の通りであった。被排斥経験後には再親和を求める程度が高くなるが、その程度は外集団成員に対してよりも、内集団成員に対しての方が高いだろう。そして、この傾向は社会不安の低い者において顕著に表れるだろう。

人は、外集団成員を脅威だと知覚しやすい(e.g., Hart et al., 2000; Olsson et al., 2005)ことから、排斥を受け集団に対する類似性の知覚が高まり外集団と内集団を峻別するようになると、外集団成員に対して再親和を求めにくくなると考えられる。さらにこの影響は、社会不安の高い者において顕著に現れると予測される。社会不安の高い者は、社会的脅威に関する手がかりに注意を向けやすく、また社会的脅威を過大視しやすい(Heinrichs & Hofmann, 2001)。よって、被排斥経験後には、社

会不安の高い人は社会不安の低い人よりも外集団成員を脅威であると知覚しやすく、被排斥経験後に外集団成員に対して再親和を求めにくくなると予測される。対して内集団成員は、外集団成員と比べてポジティブに評価され (Brewer & Campbell, 1976; Tajfel, 1978)、相互作用において不安を喚起しにくい (e.g., Plant & Devine, 2003; Shelton et al., 2005; Trail et al., 2009)。また、概して外集団成員よりも社会的つながりの源泉となりやすい (Correll & Park, 2005)。加えて、排斥されると内集団の類似性を高く知覚するだけでなく、自身と内集団成員を類似していると知覚するようになる (渡辺・唐沢, 2012)。その結果、内集団への同一視が高まり (Leach et al., 2008)、内集団やその成員に対してより愛着を感じる (e.g., Karasawa, 1991)、あるいは内集団成員をより信頼するようになる (e.g., Han & Harms, 2013; Kramer et al., 2001)。そのため、社会不安の高い人であっても、内集団成員に対しては排斥経験後に再親和を求めることが出来るのではないかと考えられる。

実験 3 は、質問紙実験を実施した。実験では初めに、日本版 FNE 尺度短縮版 (笹川他, 2004) を用いて実験参加者の社会不安の程度を測定した。その後、実験 1 と同様のシナリオを呈示し、排斥条件と受容条件に参加者を割り振った。その後、シナリオを自身が経験したという想定の下、再親和の相手として同性 (i.e., 内集団成員) あるいは異性 (i.e., 外集団成員) を選好する程度を尋ねた。

実験の結果、排斥条件では社会不安高群の参加者は再親和の相手として内集団成員を選好していたが、社会不安低群ではそのような傾向は見られなかった。この実験での質問は「チャットルームで排斥された後に新しいチャットルームを探すとしたら (i.e., 再親和を求めるとしたら)」という前提の下での質問であり、排斥された際に内集団成員を相手に実際に再親和を求めようとするのか、検討できていない。そこで、実験 4 ではサイバーボール課題を用い排斥状況を経験してもらい、排斥経験後に実際に再親和を求めようとするのか測定した。また、実験 3 では実在の集団を用いて実験をしており、現実の集団間関係や集団の持つ特徴が実験結果に影響を与えている可能性がある。そこで、実験 4 では最小条件集団パラダイム (Tajfel, 1970; Tajfel et al., 1971) を用いた。

実験 4 は、実験室実験を実施した。実験に先立ち、日本版 FNE 尺度短縮版 (笹川他, 2004) を用いて実験参加者の社会不安の程度を測定した。実験は 1 セッション 3 名から 4 名で実施された。実験ではドット数推量課題を用いて、再親和相手の集団成員性を操作した (cf. Tajfel, 1970; Tajfel et al., 1971)。また、サイバーボール課題によって、参加者を排斥条件と受容条件のいずれかに割り振った。最後に、後続の課題を他の参加者と一緒に取り組みたいと思う程度を尋ね、これを再親和欲求の程度とした。実際にはこの課題は実施されず、実験は終了した。

実験の結果、全体として受容条件よりも排斥条件の方が、再親和を求める程度が高まっていた。さらに社会不安高群では、被排斥経験後の再親和の相手が外集団成員である場合よりも内集団成員である場合の方が、再親和を求める程度が高かった。この結果は、仮説と一致するものであった。対して社会不安低群では、排斥経験後に再親和を求める程度が高まっていたが、再親和の相手が内集団成員である場合と外集団成員である場合で有意な差が見られなかった。この結果は、本研究の仮説を支持するものではなかった。

以上の結果から、社会不安の高い人においては、被排斥経験後に内集団成員に対しては再親和を求めることができる、ということが示された。

8.1.3 集団類似性の知覚の低減が被排斥経験後に外集団成員に再親和を求める程度に与える影響

実験 3 や実験 4 で示されたように、社会不安の高い人は、被排斥経験後に外集団成員に対しては再親和を求めようとしない。そこで実験 5 および実験 6 では、外集団の類似性の知覚を低減させることで高社会不安者も外集団成員に対しても再親和を求められるようになるのか、検討することを目的とした。

被排斥者は、自身を受容してくれる可能性の他者を見極めるため、受容と排斥に関わる社会的カテゴリーをより正確に弁別できるようになる (Sacco et al., 2011) が、これはカテゴリー内の類似性を高く知覚するようになることで可能になると考えられる。人は、外集団成員を脅威だと知覚しやすい (e.g., Hart et al., 2000; Olsson et al., 2005) ことから、排斥を受け集団に対する類似性の知覚が高まり外集団と内集団を峻別するようになると、外集団成員に対して再親和を求めにくくなると考えられる。特に高社会不安者は社会的脅威を過大視しやすいため (Heinrichs & Hofmann, 2001)、外集団の類似性の知覚が高まることで外集団成員との再親和に不安が大きくなり、再親和を求めることが困難になった(実験 3、実験 4)と考えられる。外集団との再親和に対する不安が外集団への類似性の知覚が高まることで生じているとすれば、外集団の類似性の知覚を低減させることで、高社会不安者も外集団成員に対しても再親和を求められるようになると予測される。

実験 5 は、実験室実験を実施した。実験に先立ち、日本版 FNE 尺度短縮版 (笹川他, 2004) を用いて実験参加者の社会不安の程度を測定した。実験は 1 セッション 3 名から 4 名で実施された。実験では初めに、個人的特徴(認知スタイル)を判定するための課題として、ドット数推量課題に取り組んでもらった。課題終了後、判定結果は次のゲームの後にフィードバックされると伝えた。続いて、サイバーボール課題に取り組んでもらった。ここで、参加者全員に排斥を経験してもらった。サイバーボール課題後、ドット数推量課題の結果として、自身以外のこの場にいる参加者は自身とは異なる

認知スタイルであった(i.e. 外集団成員であった)とフィードバックした。さらに、フィードバック用紙に記載された認知スタイルに関する説明の内容を変えることで、集団類似性の知覚の程度を操作した。最後に、意思決定課題の 2 つのバージョン(一人で取り組むか、他の参加者と一緒に取り組む)のうち、どちらの課題に取り組みたいと思うか評定を求めた。他の参加者と一緒に取り組む課題に取り組みたいと思う程度を、外集団成員に対する再親和欲求の程度とした。実際にはこの意思決定課題は実施されず、実験は終了した。

実験の結果、社会不安の低群と高群のいずれにおいても、高類似性条件と低類似性条件の間で外集団成員に対する再親和欲求の程度に有意な差は見られなかった。この結果は、本研究の仮説を支持するものではなかった。本実験では集団に対する類似性の操作がうまくいかなかったと考えられるため、実験 6 では類似性知覚の程度の操作方法を改良し、実験を行った。

実験 6 はパソコンを用い、教場で一斉に実施した。実験では初めに、日本版 FNE 尺度短縮版(笹川他, 2004)を用いて参加者の社会不安の程度を測定した。続いて、個人的特徴(認知スタイル)を判定するための課題として、ドット数推量課題に取り組んでもらった。課題終了後、判定結果は次のゲームの後にフィードバックされると伝えた。続いて、サイバーボール課題に取り組んでもらった。ここで、参加者全員に排斥を経験してもらった。サイバーボール課題後、ドット数推量課題の判定結果として、全ての参加者に対して Under-estimator であったと教示した。判定結果に続いて認知スタイルに関する説明を行ったが、その内容を変えることで、集団類似性の知覚の程度を操作した。最後に、実験の最後に行う意思決定課題は他の参加者と一緒に取り組むものであるが、Under-estimator の人と Over-estimator の人のどちらと一緒に課題に取り組みたいと思うか評定を求めた。Over-estimator の人と一緒に課題に取り組みたいと思う程度を、外集団成員に対する再親和欲求の程度とした。実際にはこの意思決定課題は実施されず、実験は終了した。

実験の結果、高社会不安の参加者においては、高類似性条件よりも低類似性条件の方が集団を類似してないと知覚しており、外集団成員に対して再親和を求める程度が高くなっていた。この結果は、外集団を類似していないと知覚することで被排斥経験後の再親和欲求が高まるということを示唆しており、仮説に沿った結果であった。他方で、社会不安の低い参加者においては、低類似性条件と高類似性条件の間で、集団類似性知覚の程度に有意な差が見られず、外集団成員に対する再親和欲求の程度も有意な差は見られなかった。実験 3 や実験 4 でも、社会不安の低い人は排斥経験後に外集団と内集団のいずれに対しても再親和を求めることができると示されており、これらの結果は本研究の目的にもとるような結果ではなかったと言えるだろう。

8.2 本研究の意義と今後の展望

8.2.1 集団類似性の知覚に関して

これまでの研究で、被排斥経験後には受容可能性のある再親和相手を見極められるようになる、ということが示されてきた。具体的には、笑顔と怒り顔、あるいは内集団成員の顔と外集団成員の顔を正確に見分けられるようになることが報告されている (Sacco et al., 2011)。この研究では個々の事例間での類似性の知覚が検討されているが、集団の類似性の知覚には、集団の全体的な同質性の知覚も重要である (Park & Judd, 1990)。集団の全体的なイメージとしての類似性の知覚も含めた集団の類似性の知覚について検討したことは、本研究の意義の一つとして挙げることができるだろう。また、被排斥経験後における集団類似性の知覚の高まりという認知的な変化から、他の社会的排斥研究で得られた知見の背景プロセスを説明できる可能性もある。例えば、排斥を経験した後に中性表情の中から笑顔が素早く見つけられるようになる (DeWall, Maner, et al., 2009) のも、中性表情同士を類似していると知覚するようになった結果、(中性表情とは“異質”な)笑顔が素早く見つけられるようになった、と考えることができる。

また、類似性の知覚は人の認知活動の基盤を支える基礎的なプロセスであり (cf. 中本・椎名, 2001)、後続の認知や行動等に大きな影響を及ぼすことが予測される。今後、社会的カテゴリーにおける類似性の知覚が高まることで、被排斥者の認知や行動に対してどのような影響をもたらすのか、再親和行動以外の側面からも検討する必要があるだろう。例えば、被排斥経験後の外集団への攻撃行動が、集団類似性の知覚の高まりによって引き起こされている可能性がある。集団間葛藤に関する研究では、内集団と外集団の価値観の違いを知覚することが、外集団への攻撃につながることを示されている (e.g., Struch & Schwartz, 1989)。本研究の実験 1 で用いた集団の類似性知覚の指標には、集団内で価値観や意見は一致していると思いか尋ねる項目が含まれていた。このことから、被排斥経験後の集団の類似性の知覚は、外見や性格特性だけでなく意見や価値観といった側面にも及ぶと考えられる。内集団と外集団のいずれに対しても類似性の知覚が高まることで、内集団と外集団の価値観の違いが顕現化し、被排斥経験後に外集団への攻撃行動に影響を与える可能性がある。これまでは、敵意や怒り感情が被排斥経験後の攻撃に与える影響が主に検討されてきたが (e.g., DeWall, Twenge, et al., 2009)、本研究の知見は被排斥経験後の攻撃行動に関する研究に新たな視座を与えうるだろう。あるいは、集団の類似性の知覚は、集団アイデンティティや集団凝集性の知覚とも大きく関連している。集団の類似性や集団アイデンティティ、集団凝集性の知覚は集団間の行動や認知に様々な影響を与える (e.g., Tajfel, 1982) ことから、集団類似性の知覚

は、被排斥経験後における内集団や外集団に対する行動や認知の変化を検討する一つの観点となるだろう。

ただし、本研究では受容と排斥に関わる社会的な手がかりのカテゴリーのうち、集団(社会的カテゴリー)に対する類似性の知覚しか検討できておらず、この点は本研究の限界点の一つである。被排斥経験後における集団類似性の知覚の高まりは、受容と排斥に関わる社会的な手がかりのどのカテゴリーにおいても生じるものであると予測される。しかし、本研究では再親和相手の集団成員性に着目して研究を行ったため、他の社会的な手がかりに関しては検討できていない。他の社会的手がかりについても、本研究の知見と同様の実験結果が得られるのか、という点については、今後の検討課題である。

8.2.2 高社会不安者の再親和について

先行研究では、社会不安の高い人が社会的排斥を経験した後に、再親和を求めるのが困難である可能性が指摘されてきた (Mallott et al., 2009; Maner et al., 2007)。本研究の主眼の一つは、どのような相手に対してであれば、社会不安の高い人でも被排斥経験後に再親和を得ることができるのか検討することであった。

これまでにも述べてきたように、人にとって他者や集団との社会的なつながりを持つことは非常に重要であるため、人は自身が他者から受け入れられるかどうかということを気に掛ける。社会不安が他者からの評価にまつわる不安であることからわかるように、社会的排斥に対する懸念と社会不安は大きく関連している (Baumeister & Tice, 1990; Leary, 1990)。例えば、社会的排斥の経験は社会不安を引き起こす (MacDonald & Leary, 2005) 一方で、高社会不安者が相互作用の相手から排斥されやすいということも示されている (e.g., Papsdorf & Alden, 1998)。また社会不安は、社会的な場面における認知や行動にも影響を与える。例えば、社会不安の高い人は新しい社会的相互作用の場面でもネガティブな期待を形成しやすく (e.g., Maddux et al., 1988)、新規の社会的相互作用場面においても苦痛を予期してしまい、結果として相互作用を持とうとしなくなってしまう (Heimberg et al., 1995)。このように、社会不安の高い者は他者との相互作用に困難を抱えやすい。

これらの点を鑑みれば、社会不安の高い者が排斥を経験した際に、どのようにして再親和を得ることが可能となるのか検討することが重要であると考えられる。しかし、管見の限りでは、この点に関して検討した研究は見当たらない。本研究では、再親和相手の集団成員性に着目し、内集団成員の相手であれば高社会不安者でも再親和を求められることを示した(実験3、実験4)。加えて、集団類似性の知覚を低減させることができれば、高社会不安者も外集団成員に対しても再親和を求められる可能性を示した(実験6)。社会的排斥が心身の不適応をもたらす (e.g., Berkman et al., 2004;

Eng et al., 2002) ことから、被排斥経験後には再親和を得ることが重要である。これまでの研究では明らかにされてこなかった高社会不安者の再親和の可能性を示したことは、本研究の大きな意義である。また、被排斥経験後の攻撃性の昂進を抑制する (cf. DeWall et al., 2010) といった側面においても、本研究は寄与するものと考えられる。

本研究では高社会不安者の外集団成員への再親和を促進する方略として、外集団の類似性知覚を低減させるという方法を採用した。これ以外にも、外集団成員に対する再親和を促す方法はいくつか考えられる。例えば、社会不安が高い人に対しては、社会的スキルのトレーニングが有効であることが知られている。社会的スキルトレーニングは、社会的スキルを向上させるだけでなく、社会不安を緩和させる効果も期待される (e.g., DeRosier, 2004; 原田恵理子 & 渡辺, 2011)。社会的スキルを向上させていくことには大きな意義があると思われるが、社会的スキルトレーニングの成果は一朝一夕に得られるものではない。そういった点から見ると、外集団の類似性を低く知覚するだけで外集団成員に対する再親和が促進される可能性が示された本研究の結果には、少なくとも短期的には一定の意義があると考えられる。一般的には外集団に対しては類似性を高く知覚しやすい傾向 (外集団同質性効果) がある。この認知バイアスは現実を反映したものでは必ずしもなく、実際には外集団も多様性を持った集団であることが多い。外集団のステレオタイプと一致した成員に注意が向きやすいが (確証バイアス, for a review, see Nickerson, 1998)、反証事例に着目させたり、本研究のように実際の分布を示したりすることで、外集団の類似性の知覚を低減させることができるかもしれない。ただし、ステレオタイプ反証事例は例外として下位集団にまとめられやすいこと (i.e., サブタイプ化) も知られており (e.g., Weber & Crocker, 1983)、具体的にどのような方略が有効であるのか、今後検討する必要があるだろう。

あるいは、別の方法として、共通内集団アイデンティティを形成させる、といった方法が考えられる。すでに述べたとおり、社会的カテゴリーは階層的な構造を成している。共通内集団アイデンティティとは、内集団・外集団を同時に包含するような、より上位の社会的カテゴリーにおける集団アイデンティティを指す。この共通内集団アイデンティティを形成させることで、集団間のバイアスを低減させることができる、とされている (Gaertner, Dovidio, Anastasio, Bachman, & Rust, 1993)。しかし、単純に共通の上位集団を顕現化させるだけでは集団間バイアスを低減させるのには不十分で、当該の外集団の成員が、共通の上位集団における内集団として認知的に再体制化される必要がある可能性が指摘されている (縄田・山口, 2008)。被排斥経験後に対峙した外集団成員に対して、内集団成員であると認知的に再体制化できるような共通の上位集団が存在する保証は必ずしもなく、また、そのような上位集団が存在していたとしても認知的な再体制化が即時に生じるとは限らないだろう。そ

のため、共通内集団アイデンティティを形成することが有用な場面は限られる恐れがある。それと比べて、外集団成員を類似していないと知覚する方略を適用できる外集団は多いと考えられ、本研究の知見の有用性は高いと言えるのではないだろうか。

上述のように本研究の意義や有用性を挙げるができる一方で、本研究には限界点も存在する。本研究では、被排斥経験後に他者と共に実験課題に取り組みたいと思うか、ということを探っており、被排斥経験後の再親和の意図を測定したと考えることができる。実験の結果、社会不安の高い人でも、内集団成員、あるいは類似性の低い外集団の成員に対しては、再親和を求めようとする事が示された。この研究知見はこれまでの研究で示されてこなかったものであり、意義のあるものであると考えられる。しかし本研究では、被排斥経験後に社会不安の高い人が実際に他者と社会的なつながりを構築することができるか、という点については検討できていない。すでに述べたように、社会不安の高い人は社会的スキルの自己評価の低く、また他者から否定的な印象を持たれやすいことから、再親和を求めようとしても社会的関係をうまく構築できない、といった事態も起きかねない。この点に関しては、今後十分に検討すべき課題であろう。

8.2.3 低社会不安者の再親和に関して

社会不安の低い人について、本研究では仮説を支持するような結果が得られなかった。実験3および実験4では、外集団成員よりも内集団成員に対しての方が、被排斥経験後に再親和を求める程度が高いと予測したが、実験の結果は予測とは異なり、低社会不安者は外集団成員に対しても内集団成員に対しても再親和を求めている。社会不安の低い者ほど社交的スキルの自己評価が高く (e.g., 原田・島田, 2002)、また、外向性が高い (e.g., Kaplan et al., 2015)。あるいは、他者への信頼が低い者においては、社会不安が低いほど経験への開放性が高いこと (Kaplan et al., 2015) から、他者を信頼できないような状況において経験への開放性を示すことができる可能性が考えられる。このような特徴を持つ低社会不安者は、被排斥経験後においても外集団成員に対して再親和が可能であったのかもしれない。外集団成員に対しても内集団成員に対しても再親和を求める、という結果自体は本研究の目的にもとるものではなく、仮説が支持されなかったとはいえ大きな問題ではなかったと言える。しかし、なぜこのような知見が得られたのかということに関しては、本研究ではこれ以上の議論ができないため、今後の検討課題としたい。

また、実験6においても、集団類似性知覚が高い場合と比べて低い場合の方が、被排斥経験後に外集団成員に対して再親和を求める程度が高まるだろうという仮説は支持されず、低社会不安者が外集団に対して再親和を求め程度において集団類似性の高い条件と低い条件の間で有意な差が見られなかった。これは一つに、社会不安の低い人が、(集団類似性知覚の操作を行わない

状況下で)被排斥経験後に外集団に対しても内集団に対しても再親和を求めていたことが原因となっているのではないだろうか。すなわち、低社会不安者は排斥され集団の類似性の知覚が高まっている状態でも外集団に対して再親和を求めることができるので、類似性知覚を低減させた場合とそうでない場合とで外集団成員に対して再親和を求める程度が変わらなかった、と考えられる。しかし、集団類似性の操作チェック指標において、高社会不安者では類似性の操作に成功していたことが確認されたが、低社会不安者では低類似性条件と高類似性条件の間で類似性知覚の指標に有意な差が見られなかった。このことは、低社会不安者において類似性知覚の操作が有効でなかった可能性を示唆している。あるいは、低社会不安者が外集団成員に対しても内集団成員に対しても再親和を求めていたことから、そもそも被排斥経験後に集団類似性知覚が高まっていなかった可能性も否定できない。本研究で用いた類似性知覚の操作が低社会不安者に対しては有効でなかったのか、あるいは低社会不安者は被排斥経験後に集団の類似性知覚が高まらないのか、本研究では結論を導くのは困難である。これまでの研究は高社会不安者に重きが置かれ、低社会不安者に関しては高社会不安者が持つ特徴との比較で語られることが多かった。社会不安の高い人との比較という文脈での研究ではなく、社会不安の低い人がどのような特徴を持つのか直接検討するような、新たな視座を持った研究が望まれる。

8.3 結語

本研究は、社会心理学研究の観点から、社会的排斥を経験した後に生じる認知的な変化と、その認知的な変化が再親和に与える影響について検討した。特に、排斥経験後に再親和を求めることが困難である可能性が示されていた社会不安の高い人が、どのような相手であれば再親和を求めることができるのか、集団成員性の観点から検討した。

第一に、被排斥経験後に生じる認知的な変化として、内・外集団のいずれにおいても集団の類似性の知覚の高まることを示した。本研究によって、被排斥経験後に再親和の相手を見極める際の、基礎的なプロセスを明らかにすることができただろう。さらに、社会不安の高い人でも、内集団成員に対してであれば再親和を求められること、そして、類似性の知覚が低減すれば外集団成員に対しても再親和を求められるようになることが示された。社会不安の高い人がどのようにして再親和を得るのか、という点に関してはこれまでに検討されてきておらず、本研究の知見は意義のあるものである。他方で、社会不安の低い人では、内集団成員に対しても外集団成員に対しても再親和を求めることができることが示された。社会不安の低い人の被排斥経験後の反応について、先行研究では着

目されることが少なかったが、本研究の知見は新たな視座を与えるものであろう。今後は、本研究の知見を現実の社会的な場面に応用していくことが課題となるだろう。

引用文献

- Atkinson, J. W., Heyns, R. W., & Veroff, J. (1954). The effect of experimental arousal of the affiliation motive on thematic apperception. *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 49, 405–410.
- Batson, C. D. (1987). Prosocial motivation: Is it ever truly altruistic? *Advances in Experimental Social Psychology*, 20, 65–122.
- Baumeister, R. F., DeWall, C. N., Ciarocco, N. J., & Twenge, J. M. (2005). Social exclusion impairs self-regulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 88, 589–604.
- Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497–529.
- Baumeister, R. F., & Tice, D. M. (1990). Point-counterpoints: Anxiety and social exclusion. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 9, 165–195.
- Berkman, L. F., Melchior, M., Chastang, J. F., Niedhammer, I., Leclerc, A., & Goldberg, M. (2004). Social integration and mortality: A prospective study of french employees of electricity of France-Gas of France: The GAZEL cohort. *American Journal of Epidemiology*, 159, 167–174.
- Bernstein, M. J., Sacco, D. F., Brown, C. M., Young, S. G., & Claypool, H. M. (2010). A preference for genuine smiles following social exclusion. *Journal of Experimental Social Psychology*, 46, 196–199.
- Bernstein, M. J., Young, S. G., Brown, C. M., Sacco, D. F., & Claypool, H. M. (2008). Adaptive responses to social exclusion: Social rejection improves detection of real and fake smiles. *Psychological Science*, 19, 981–983.
- Bernstein, M. J., Young, S. G., & Hugenberg, K. (2007). The cross-category effect: Mere social categorization is sufficient to elicit an own-group bias in face recognition. *Psychological Science*, 18, 706–712.
- Brewer, M. B. (1991). The social self: On being the same and different at the same time. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 17, 475–482.
- Brewer, M. B., & Campbell, D. T. (1976). *Ethnocentrism and Intergroup Attitudes: East African Evidence*. New York: Wiley.
- Brewer, M. B., Manzi, J. M., & Shaw, J. S. (1993). In-group identification as a function of depersonalization, distinctiveness, and status. *Psychological Science*, 4, 88–92.
- Brown, W. M., & Moore, C. (2002). Smile asymmetries and reputation as reliable indicators of likelihood to cooperate: An evolutionary analysis. *Advances in Psychology Research*, 11, 59–78.

- Buckley, K. E., Winkel, R. E., & Leary, M. R. (2004). Reactions to acceptance and rejection: Effects of level and sequence of relational evaluation. *Journal of Experimental Social Psychology, 40*, 14–28.
- Calder, A. J., Young, A. W., Perrett, D. I., Ectoff, N. L., & Rowland, D. (1996). Categorical perception of morphed facial expressions. *Visual Cognition, 3*, 81–117.
- Carver, C. S., & Harmon-Jones, E. (2009). Anger is an approach-related affect: Evidence and implications. *Psychological Bulletin, 135*, 183–204.
- Clark, D. M., & Wells, A. (1995). A cognitive model of social phobia. In R. G. Heimberg, M. R. Liebowitz, D. A. Hope, & F. R. Schneier (Eds.), *Social phobia: Diagnosis, assessment and treatment* (pp. 69–93). New York: The Guilford Press.
- Correll, J., & Park, B. (2005). A model of the ingroup as a social resource. *Personality and Social Psychology Review, 9*, 341–359.
- Cosmides, L., & Tooby, J. (1992). Cognitive adaptations for social exchange. In J. Barkow, L. Cosmides, & J. Tooby (Eds.), *The adapted mind: Evolutionary psychology and the generation of culture*. New York: Oxford University Press.
- Depret, E., & Fiske, S. T. (1993). Social cognition and power: Some cognitive consequences of social structure as a source of control deprivation. In G. Weary, F. Gleicher, & K. L. Marsh (Eds.), *Control motivation and social cognition* (pp. 176–202). New York: Springer-Verlag.
- DeRosier, M. E. (2004). Building relationships and combating bullying: Effectiveness of a school-based social skills group intervention. *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology, 33*, 196–201.
- Devine, P. G. (1989). Stereotypes and prejudice: Their automatic and controlled components. *Journal of Personality and Social Psychology, 56*, 5–18.
- DeWall, C. N., Maner, J. K., & Rouby, D. A. (2009). Social exclusion and early-stage interpersonal perception: Selective attention to signs of acceptance. *Journal of Personality and Social Psychology, 96*, 729–741.
- DeWall, C. N., & Pond, R. S. (2011). Loneliness and smoking: The costs of the desire to reconnect. *Self and Identity, 10*, 375–385.
- DeWall, C. N., & Richman, S. B. (2011). Social exclusion and the desire to reconnect. *Social and Personality Psychology Compass, 5*, 919–932.
- DeWall, C. N., Twenge, J. M., Bushman, B., Im, C., & Williams, K. D. (2010). A little acceptance goes a long way: Applying social impact theory to the rejection–aggression link. *Social Psychological and Personality Science, 1*, 168–174.
- DeWall, C. N., Twenge, J. M., Gitter, S. A., & Baumeister, R. F. (2009). It's the thought that counts: The role of hostile cognition in shaping aggressive responses to social exclusion. *Journal of Personality and Social Psychology, 96*, 45–59.

- DeWall, C. N., Twenge, J. M., Koole, S. L., Baumeister, R. F., Marquez, A., & Reid, M. W. (2011). Automatic emotion regulation after social exclusion: Tuning to positivity. *Emotion, 11*, 623–636.
- Duchenne, G. (1990). *The mechanism of human facial expression* (R. A. Cuthbertson, Ed. & Trans.). Cambridge: Cambridge University Press. (Original work published 1862)
- Eimas, P. D., & Quinn, P. C. (1994). Studies on the formation of perceptually based basic-level categories in young infants. *Child Development, 65*, 903–17.
- Eisenberger, N. I., Lieberman, M. D., & Williams, K. D. (2003). Does rejection hurt? An fMRI study of social exclusion. *Science, 302*, 290–292.
- Ekman, P., Davidson, R. J., & Friesen, W. V. (1990). The Duchenne smile: Emotional expression and brain physiology II. *Journal of Personality and Social Psychology, 58*, 342–353.
- Ekman, P., Friesen, W. V., & O’Sullivan, M. (1988). Smiles when lying. *Journal of Personality and Social Psychology, 54*, 414–420.
- Eng, P. M., Rimm, E. B., Fitzmaurice, G., & Kawachi, I. (2002). Social ties and change in social ties in relation to subsequent total and cause-specific mortality and coronary heart disease incidence in men. *American Journal of Epidemiology, 155*, 700–709.
- Etcoff, N. L., & Magee, J. J. (1992). Categorical perception of facial expressions. *Cognition, 44*, 227–240.
- Fiske, S. T., & Yamamoto, M. (2005). Coping with rejection: Core social motives across cultures. In K. D. Williams, J. P. Forgas, & W. von Hippel (Eds.), *The social outcast: Ostracism, social exclusion, rejection, and bullying* (pp. 185–198).
- Foa, E. B., Franklin, M. E., Perry, K. J., & Herbert, J. D. (1996). Cognitive Biases in Generalized Social Phobia. *Journal of Abnormal Psychology, 105*, 433–439.
- Frischen, A., Bayliss, A. P., & Tipper, S. P. (2007). Gaze cueing of attention: Visual attention, social cognition, and individual differences. *Psychological Bulletin, 133*, 694–724.
- Gaertner, S. L., Dovidio, J. F., Anastasio, P. A., Bachman, B. A., & Rust, M. C. (1993). The common ingroup identity model: Recategorization and the reduction of intergroup bias. *European Review of Social Psychology, 4*, 1–26.
- Gardner, W. L., Pickett, C. L., & Brewer, M. B. (2000). Social exclusion and selective memory: How the need to belong influences memory for social events. *Personality and Social Psychology Bulletin, 26*, 486–496.
- Gerber, J., & Wheeler, L. (2009). On being rejected: A meta-analysis of experimental research on rejection. *Perspectives on Psychological Science, 4*, 468–488.
- Gibson, J. J. (1979). *The ecological approach to visual perception*. Boston, MA: Houghton Mifflin.
- Gil - White, F. J. (2001). Are ethnic groups biological “species” to the human brain?: Essentialism in our cognition of some social categories. *Current Anthropology, 42*, 515–553.

- Gonsalkorale, K., & Williams, K. D. (2007). The KKK won't let me play: Ostracism even by a despised outgroup hurts. *European Journal of Social Psychology, 37*, 1176–1186.
- Goodwin, S. A., Williams, K. D., & Carter-Sowell, A. R. (2010). The psychological sting of stigma: The costs of attributing ostracism to racism. *Journal of Experimental Social Psychology, 46*, 612–618.
- Han, G. H., & Harms, P. D. (2013). Team identification, trust and conflict: A mediation model. *International Journal of Conflict Management, 21*, 20–43.
- 原田 恵理子・渡辺 弥生 (2011). 高校生を対象とする感情の認知に焦点をあてたソーシャルスキルトレーニングの効果 カウンセリング研究, 44, 81–91.
- 原田 朋枝・島田 修 (2002). 社会的スキルの自己評価と対人不安との関連 川崎医療福祉学会誌, 12, 75–81.
- 原島 雅之・小口 孝司 (2007). 顕在的自尊心と潜在的自尊心が内集団ひいきに及ぼす効果 実験社会心理学研究, 47, 69–77.
- Hart, A. J., Whalen, P. J., Shin, L. M., McInerney, S. C., Fischer, H., & Rauch, S. L. (2000). Differential response in the human amygdala to racial outgroup vs ingroup face stimuli. *Neuro Report, 11*, 2351–2354.
- Haselton, M. G., & Buss, D. M. (2000). Error management theory: A new perspective in cross-sex mind reading. *Journal of Personality and Social Psychology, 78*, 81–91.
- Haslam, S. A., Oakes, P. J., Turner, J. C., & McGarty, C. (1995). Social categorization and group homogeneity: Changes in the perceived applicability of stereotype content as a function of comparative context and trait favourableness. *British Journal of Social Psychology, 34*, 139–160.
- Heimberg, R. G., Liebowitz, M. R., Hope, D. A., & Schneier, F. R. (1995). *Social phobia: Diagnosis, assessment, and treatment*. New York: Guilford Press.
- Heinrichs, N., & Hofmann, S. G. (2001). Information processing in social phobia: A critical review. *Clinical Psychology Review, 21*, 751–770.
- 樋口 明彦 (2004). 現代社会における社会的排除のメカニズム: 積極的労働市場政策の内在的ジレンマをめぐって 社会学評論, 55, 2–18.
- Hirschfeld, L. A. (1998). *Race in the making: Cognition, culture, and the child's construction of human kinds*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Hitlan, R. T., Kelly, K. M., Schepman, S., Schneider, K. T., & Zárate, M. A. (2006). Language exclusion and the consequences of perceived ostracism in the workplace. *Group Dynamics: Theory, Research, and Practice, 10*, 56–70.
- Hogg, M. A., & Turner, J. C. (1987). Intergroup behaviour, self-stereotyping and the salience of social categories. *British Journal of Social Psychology, 26*, 325–340.
- 池上 知子 (2001). 学歴アイデンティティと内集団卑下—学歴社会における社会的アイデンティティ理論の検証— 愛知教育大学研究報告, 50, 95–103.

- 石川 利江・佐々木 和義・福井 至 (1992). 社会的不安尺度FNE・SADSの日本版標準化の試み
行動療法研究, 18, 10–17.
- 岩田 正美 (2008). 社会的排除——参加の欠如・不確かな帰属—— 有斐閣.
- Jamieson, J. P., Harkins, S. G., & Williams, K. D. (2010). Need threat can motivate performance
after ostracism. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 36, 690–702.
- Kaplan, S. C., Levinson, C. A., Rodebaugh, T. L., Menatti, A., & Weeks, J. W. (2015). Social
anxiety and the Big Five personality traits: The interactive relationship of trust and openness.
Cognitive Behaviour Therapy, 44, 212–22.
- Karasawa, M. (1991). Toward an assessment of social identity: The structure of group identification
and its effects on in-group evaluations. *British Journal of Social Psychology*, 30, 293–307.
- Kashdan, T. B., Elhai, J. D., & Breen, W. E. (2008). Social anxiety and disinhibition: An analysis of
curiosity and social rank appraisals, approach-avoidance conflicts, and disruptive risk-taking
behavior. *Journal of Anxiety Disorders*, 22, 925–939.
- Kashdan, T. B., McKnight, P. E., Richey, J. A., & Hofmann, S. G. (2009). When social anxiety
disorder co-exists with risk-prone, approach behavior: Investigating a neglected, meaningful
subset of people in the National Comorbidity Survey-Replication. *Behaviour Research and
Therapy*, 47, 559–568.
- 河崎 千枝・岩永 誠・生和 秀敏 (2004). 対人不安者の携帯電話の手段選択、社会的ネットワー
ク、及び精神的健康との関連性 広島大学総合科学部紀要IV理系編, 30, 39–52.
- 木村 隆夫 (2014). 秋葉原無差別殺傷事件、加害者Kの育ちと犯罪過程の考察 日本福祉大学
子ども発達学論集, 6, 65–85.
- Kramer, R. M., Hanna, B. A., Su, S., & Wei, J. (2001). Collective identity, collective trust, and
social capital: Linking group identification and group cooperation. In M. E. Turner (Ed.),
Groups at work: Theory and research (pp. 173–196). Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum
Associates Publishers.
- Krueger, J., & Clement, R. W. (1994). The truly false consensus effect: An ineradicable and
egocentric bias in social perception. *Journal of Personality and Social Psychology*, 67, 596–
610.
- 久崎 孝浩 (2006). 向社会的行動に対する恥・罪悪感の機能 *VISIO*, 35, 1–15.
- 京屋 郁子 (2007). カテゴリ研究におけるモデルの競合と統合化への動きの展望 立命館人間科
学研究, 13, 103–116.
- Leach, C. W., van Zomeren, M., Zebel, S., Vliek, M. L. W., Pennekamp, S. F., Doosje, B., ... Spears,
R. (2008). Group-level self-definition and self-investment: A hierarchical (multicomponent)
model of in-group identification. *Journal of Personality and Social Psychology*, 95, 144–165.
- Leary, M. R. (1990). Responses to social exclusion: Social anxiety, jealousy, loneliness, depression,
and low self-esteem. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 9, 221–229.

- Leary, M. R. (2001). Toward a conceptualization of interpersonal rejection. In M. R. Leary (Ed.), *Interpersonal rejection* (pp. 3–20). New York: Oxford University Press.
- Leary, M. R., & Alenn, A. B. (2011). Belonging motivation: Establishing, maintaining, and repairing relational value. In D. Dunning (Ed.), *Social motivation* (pp. 37–55). New York: Psychology Press.
- Leary, M. R., & Baumeister, R. F. (2000). The nature and function of self-esteem: Sociometer theory. *Advances in Experimental Social Psychology*, *32*, 1–62.
- Leary, M. R., Kowalski, R. M., Smith, L., & Phillips, S. (2003). Teasing, rejection, and violence: Case studies of the school shootings. *Aggressive Behavior*, *29*, 202–214.
- Levin, D. T., & Beale, J. M. (2000). Categorical perception occurs in newly learned faces, other-race faces, and inverted faces. *Perception & Psychophysics*, *62*, 386–401.
- Lickel, B., Hamilton, D. L., & Sherman, S. J. (2001). Elements of a lay theory of groups: Types of groups, relational styles, and the perception of group entitativity. *Personality and Social Psychology Review*, *5*, 129–140.
- Lickel, B., Hamilton, D. L., Wierzchowska, G., Lewis, A., Sherman, S. J., & Uhles, A. N. (2000). Varieties of groups and the perception of group entitativity. *Journal of Personality and Social Psychology*, *78*, 223–246.
- Lieberman, J. D., Solomon, S., Greenberg, J., & McGregor, H. A. (1999). A hot new way to measure aggression: Hot sauce allocation. *Aggressive Behavior*, *25*, 331–348.
- Linville, P. W., Fischer, G. W., & Salovey, P. (1989). Perceived distributions of characteristics of in-group and out-group members: Empirical evidence and a computer simulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, *57*, 165–188.
- Linville, P. W., Salovey, P., & Fischer, G. W. (1986). Stereotyping and perceived distributions of social characteristics: An application to ingroup-outgroup perception. In J. F. Dovidio & S. L. Gaertner (Eds.), *Prejudice, discrimination, and racism* (pp. 165–208), New York: Academic Press.
- MacDonald, G., & Leary, M. R. (2005). Why does social exclusion hurt? The relationship between social and physical pain. *Psychological Bulletin*, *131*, 202–23.
- Maddux, J. E., Norton, L. W., & Leary, M. R. (1988). Cognitive components of social anxiety: An investigation of the integration of self-presentation theory and self-efficacy theory. *Journal of Social and Clinical Psychology*, *6*, 180–190.
- Mallott, M. A., Maner, J. K., DeWall, C. N., & Schmidt, N. B. (2009). Compensatory deficits following rejection: The role of social anxiety in disrupting affiliative behavior. *Depression and Anxiety*, *26*, 438–446.
- Maner, J. K., DeWall, C. N., Baumeister, R. F., & Schaller, M. (2007). Does social exclusion motivate interpersonal reconnection? Resolving the “porcupine problem”. *Journal of Personality and Social Psychology*, *92*, 42–55.

- Maner, J. K., Kenrick, D. T., Becker, D. V., Robertson, T. E., Hofer, B., Neuberg, S. L., ... Schaller, M. (2005). Functional projection: How fundamental social motives can bias interpersonal perception. *Journal of Personality and Social Psychology*, *88*, 63–78.
- Mason, M. F., Tatkov, E. P., & Macrae, C. N. (2005). The look of love: Gaze shifts and person perception. *Psychological Science*, *16*, 236–239.
- McGarty, C. (1999). *Categorization in social psychology*. London: SAGE Publications.
- Mead, N. L., Baumeister, R. F., Stillman, T. F., Rawn, C. D., & Vohs, K. D. (2011). Social exclusion causes people to spend and consume strategically in the service of affiliation. *The Journal of Consumer Research*, *37*, 902–919.
- Medin, D. L., & Schaffer, M. M. (1978). Context theory of classification learning. *Psychological Review*, *85*, 207–238.
- Mendes, W. B., Major, B., McCoy, S., & Blascovich, J. (2008). How attributional ambiguity shapes physiological and emotional responses to social rejection and acceptance. *Journal of Personality and Social Psychology*, *94*, 278–291.
- Moriya, J., & Sugiura, Y. (2013). Socially anxious individuals with low working memory capacity could not inhibit the goal-irrelevant information. *Frontiers in Human Neuroscience*, *7*, 840.
- Morris, J. S., Frith, C. D., Perrett, D. I., Rowland, D., Young, A. W., Calder, A. J., & Dolan, R. J. (1996). A differential neural response in the human amygdala to fearful and happy facial expressions. *Nature*, *383*, 812–5.
- Mullen, B., & Hu, L.-T. (1989). Perceptions of ingroup and outgroup variability: A meta-analytic integration. *Basic and Applied Social Psychology*, *10*, 233–252.
- Murphy, G. L., & Medin, D. L. (1985). The role of theories in conceptual coherence. *Psychological Review*, *92*, 289–316.
- 中本 敬子・椎名 乾平 (2001). 認知心理学における類似性研究 日本フアジイ学会誌, *13*, 3–10.
- 縄田 健悟・山口 裕幸 (2008). 階層的な集団間関係において上位集団の顕現性が集団間バイアスに及ぼす影響 九州大学心理学研究, *9*, 27–33.
- Nickerson, R. S. (1998). Confirmation bias: A ubiquitous phenomena in many guises. *Review of General Psychology*, *2*, 175–220.
- Nolan, S. A., Flynn, C., & Garber, J. (2003). Prospective relations between rejection and depression in young adolescents. *Journal of Personality and Social Psychology*, *85*, 745–755.
- 小熊 英二 (1995). 単一民族神話の起源:「日本人」の自画像の系譜 新曜社.
- Olsson, A., Ebert, J. P., Banaji, M. R., & Phelps, E. A. (2005). The role of social groups in the persistence of learned fear. *Science*, *309*, 785–787.
- 小野田 慶一 (2010). なぜ心が痛いのか—社会神経科学における排斥研究の現状— 生理心理学と精神生理学, *28*, 29–44.
- Ostrom, T. M., & Sedikides, C. (1992). Out-group homogeneity effects in natural and minimal groups. *Psychological Bulletin*, *112*, 536–552.

- Papsdorf, M., & Alden, L. (1998). Mediators of social rejection in social anxiety: Similarity, self-disclosure, and overt signs of anxiety. *Journal of Research in Personality, 32*, 351–369.
- Park, B., & Judd, C. M. (1990). Measures and models of perceived group variability. *Journal of Personality and Social Psychology, 59*, 173–191.
- Parkinson, B. (2005). Do facial movements express emotions or communicate motives? *Personality and Social Psychology Review, 9*, 278–311.
- Pickett, C. L., Silver, M. D., & Brewer, M. B. (2002). The impact of assimilation and differentiation needs on perceived group importance and judgments of ingroup size. *Personality and Social Psychology Bulletin, 28*, 546–558.
- Plant, E. A. (2004). Responses to interracial interactions over time. *Personality and Social Psychology Bulletin, 30*, 1458–1471.
- Plant, E. A., & Devine, P. G. (2003). The antecedents and implications of interracial anxiety. *Personality and Social Psychology Bulletin, 29*, 790–801.
- Powlisha, K. K. (2004). Gender as a social category: Intergroup processes and gender-role development. In M. Bennett & F. Sani (Eds.), *The development of the social self* (pp. 103–133). New York: Psychology Press.
- Rosch, E., & Mervis, C. B. (1975). Family resemblances: Studies in the internal structure of categories. *Cognitive Psychology, 7*, 573–605.
- Rosch, E., Mervis, C. B., Gray, W. D., Johnson, D. M., & Boyes-Braem, P. (1976). Basic objects in natural categories. *Cognitive Psychology, 8*, 382–439.
- Sacco, D. F., Wirth, J. H., Hugenberg, K., Chen, Z., & Williams, K. D. (2011). The world in black and white: Ostracism enhances the categorical perception of social information. *Journal of Experimental Social Psychology, 47*, 836–842.
- 笹川 智子・金井 嘉宏・村中 泰子・鈴木 伸一・嶋田 洋徳・坂野 雄二 (2004). 他者からの否定的評価に対する社会的不安測定尺度(FNE)短縮版作成の試み: 項目反応理論による検討行動療法研究, *30*, 87–98.
- Schaafsma, J., & Williams, K. D. (2012). Exclusion, intergroup hostility, and religious fundamentalism. *Journal of Experimental Social Psychology, 48*, 829–837.
- Schlenker, B. R., & Leary, M. R. (1982). Social anxiety and self-presentation: A conceptualization model. *Psychological Bulletin, 92*, 641–669.
- Sedikides, C., Olsen, N., & Reis, H. T. (1993). Relationships as natural categories. *Journal of Personality and Social Psychology, 64*, 71–82.
- Seligman, M. E. P. (1975). *Helplessness: On depression, development, and death*. San Francisco: Freeman.
- Shelton, J. N., Richeson, J. A., & Salvatore, J. (2005). Expecting to be the target of prejudice: Implications for interethnic interactions. *Personality and Social Psychology Bulletin, 31*, 1189–1202.

- 城月 健太郎・笹川 智子・野村 忍 (2010). コスト・予測バイアスが社会不安症状に影響するプロセス 心理学研究, 81, 381-387.
- Simon, B., & Mummendey, A. (1990). Perceptions of relative group size and group homogeneity: We are the majority and they are all the same. *European Journal of Social Psychology*, 20, 351–356.
- Simon, B., & Pettigrew, T. F. (1990). Social identity and perceived group homogeneity: Evidence for the ingroup homogeneity effect. *European Journal of Social Psychology*, 20, 269–286.
- Smart Richman, L., & Leary, M. R. (2009). Reactions to discrimination, stigmatization, ostracism, and other forms of interpersonal rejection: A multimotive model. *Psychological Review*, 116, 365–83.
- Solomon, S., Greenberg, J., & Pyszczynski, T. (1991). A terror management theory of social behavior: The psychological functions of self-esteem and cultural worldviews. *Advances in Experimental Social Psychology*, 24, 93–159.
- Sommer, K. L., & Baumeister, R. F. (2002). Self-evaluation, persistence, and performance following implicit rejection: The role of trait self-esteem. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28, 926–938.
- Spoor, J., & Williams, K. D. (2007). The evolution of an ostracism detection system. In J. P. Forgas, M. G. Haselton, & W. von Hippel (Eds.), *The Evolution of the Social Mind: Evolutionary Psychology and Social Cognition* (pp. 279–292). New York: Psychology Press.
- Steele, C., Kidd, D. C., & Castano, E. (2015). On social death: Ostracism and the accessibility of death thoughts. *Death Studies*, 39, 19–23.
- Steele, C. M. (1988). The psychology of self-affirmation: Sustaining the integrity of the self. *Advances in Experimental Social Psychology*, 21, 261–302.
- Struch, N., & Schwartz, S. H. (1989). Intergroup aggression: Its predictors and distinctness from in-group bias. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 364–373.
- Tajfel, H. (1970). Experiments in intergroup discrimination. *Scientific American*, 223, 96–102.
- Tajfel, H. (1978). *Differentiation between social groups: Studies in the social psychology of intergroup relations*. New York: Academic Press.
- Tajfel, H. (1982). Social psychology of intergroup relations. *Annual Review of Psychology*, 33, 1–39.
- Tajfel, H., Billig, M. G., Bundy, R. P., & Flament, C. (1971). Social categorization and intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, 1, 149–178.
- Tajfel, H., & Wilkes, A. L. (1963). Classification and quantitative judgement. *British Journal of Psychology*, 54, 101–114.
- 高橋 直樹・大坊 郁夫・趙 鏞珍 (2007). 感情教示法を用いた幸福と怒りの表情表出における日韓比較 対人社会心理学研究, 7, 61–65.

- テイラー, D. M. & モグハッダム, F. M. 野波 寛・岡本 卓也・小杉 考司(訳)(2010). 集団間関係の社会心理学——北米と欧州における理論の系譜と発展—— 晃洋書房
- Tedeschi, J. T. (2001). Social power, influence, and aggression. In J. P. Forgas & K. D. Williams (Eds.), *Social influence: Direct and indirect processes* (pp. 109–128). New York: Psychology Press.
- 寺口 司・釘原 直樹 (2015). 攻撃評価に評価者の不快感情が与える影響: 調整要因としての加害者の集団カテゴリー 対人社会心理学研究, 15, 101–107.
- Tesser, A. (1988). Toward a self-evaluation maintenance model of social behavior. *Advances in Experimental Social Psychology*, 21, 181–227.
- Trail, T. E., Shelton, J. N., & West, T. V. (2009). Interracial roommate relationships: Negotiating daily interactions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 35, 671–684.
- 坪井 寿子 (2003). カテゴリー化における類似性の役割に関する一考察 鎌倉女子大学紀要, 10, 93–99.
- 津村 健太・村田 光二 (2014). 社会的排斥経験後における再親和相手の選択と対人不安の関連—集団成員性を用いた検討— 日本社会心理学会第55回大会発表論文集, 154.
- Tsumura, K., & Murata, K. (2015). Effects of social anxiety and group membership of potential affiliates on social reconnection after ostracism. *Current Research in Social Psychology*, 23, 18–25.
- 津村 健太・村田 光二 (2016). 社会的排斥が集団成員の類似性の知覚に与える影響 社会心理学研究, 32, 1–9.
- Turner, J. C. (1975). Social comparison and social identity: Some prospects for intergroup behaviour. *European Journal of Social Psychology*, 5, 1–34.
- Turner, J. C., Hogg, M. A., Oakes, P. J., Reicher, S. D., & Wetherell, M. S. (1987). *Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford: Basil Blackwell.
- Twenge, J. M., Baumeister, R. F., Tice, D. M., & Stucke, T. S. (2001). If you can't join them, beat them: Effects of social exclusion on aggressive behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 1058–1069.
- Twenge, J. M., Zhang, L., Catanese, K. R., Dolan-Pascoe, B., Lyche, L. F., & Baumeister, R. F. (2007). Replenishing connectedness: Reminders of social activity reduce aggression after social exclusion. *British Journal of Social Psychology*, 46, 205–224.
- 碓井 真史 (2008). 誰でもいいから殺したかった! : 追い詰められた青少年の心理 ベストセラーズ.
- United Nations. (2016). *International migration wallchart 2015*. New York: United Nations.
- Warburton, W. A., Williams, K. D., & Cairns, D. R. (2006). When ostracism leads to aggression: The moderating effects of control deprivation. *Journal of Experimental Social Psychology*, 42, 213–220.
- 渡辺 匠 (2014). 自己と内集団の連合が自己防衛に果たす機能: 類似性および概念連合という観点から 東京大学人文社会系研究科博士論文(未公開).

- 渡辺 匠・唐沢 かおり (2012). 社会的排斥が自己と内集団の類似性に与える影響 日本社会心理学第53回大会発表論文集, 236.
- Watson, D., & Friend, R. (1969). Measurement of social-evaluative anxiety. *Journal of Consulting and Clinical Psychology, 33*, 448–457.
- Weber, R., & Crocker, J. (1983). Cognitive processes in the revision of stereotypic beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology, 45*, 961–977.
- Wilder, D. A. (1984). Empirical contributions: Predictions of belief homogeneity and similarity following social categorization. *British Journal of Social Psychology, 23*, 323–333.
- Wilder, D. A., & Thompson, J. E. (1980). Intergroup contact with independent manipulations on in-group and out-group interaction. *Journal of Personality and Social Psychology, 38*, 589–603.
- Wilkowski, B. M., Robinson, M. D., & Friesen, C. K. (2009). Gaze-triggered orienting as a tool of the belongingness self-regulation system. *Psychological Science, 20*, 495–501.
- Williams, K. D. (2007a). Ostracism. *Annual Review of Psychology, 58*, 425–452.
- Williams, K. D. (2007b). Ostracism: The kiss of social death. *Social and Personality Psychology Compass, 1*, 236–247.
- Williams, K. D. (2009). Ostracism: A temporal need-threat model. *Advances in Experimental Social Psychology, 41*, 275–314.
- Williams, K. D., Cheung, C. K. T., & Choi, W. (2000). Cyberostracism: Effects of being ignored over the Internet. *Journal of Personality and Social Psychology, 79*, 748–762.
- Williams, K. D., & Jarvis, B. (2006). Cyberball: A program for use in research on interpersonal ostracism and acceptance. *Behavior Research Methods, 38*, 174–180.
- Williams, K. D., & Sommer, K. L. (1997). Social ostracism by coworkers: Does rejection lead to loafing or compensation? *Personality and Social Psychology Bulletin, 23*, 693–706.
- Wirth, J. H., Sacco, D. F., Hugenberg, K., & Williams, K. D. (2010). Eye gaze as relational evaluation: Averted eye gaze leads to feelings of ostracism and relational devaluation. *Personality and Social Psychology Bulletin, 36*, 869–882.
- Wright, C. I., Fischer, H., Whalen, P. J., McNerney, S. C., Shin, L. M., & Rauch, S. L. (2001). Differential prefrontal cortex and amygdala habituation to repeatedly presented emotional stimuli. *Neuroreport, 12*, 379–83.
- Wright, S. C., Aron, A., McLaughlin-Volpe, T., & Ropp, S. A. (1997). The extended contact effect: Knowledge of cross-group friendships and prejudice. *Journal of Personality and Social Psychology, 73*, 73–90.
- 山下 沙織 (2014). 大学生における社交不安と社会的スキルとの関連 大阪経大論集, 65, 129-135.
- Zadro, L., Boland, C., & Richardson, R. (2006). How long does it last? The persistence of the effects of ostracism in the socially anxious. *Journal of Experimental Social Psychology, 42*, 692–697.

Zadro, L., Williams, K. D., & Richardson, R. (2004). How low can you go? Ostracism by a computer is sufficient to lower self-reported levels of belonging, control, self-esteem, and meaningful existence. *Journal of Experimental Social Psychology, 40*, 560–567.

付録

付録 A 実験 1 で用いたシナリオの内容

付録 B 実験 2 における集団類似性の知覚の程度を測定する課題の説明文

付録 C 実験 3 で用いたシナリオの内容

付録 D 実験 4 においてドット数推量課題の結果をフィードバックする際に用いた用紙

付録 E 実験 5 においてドット数推量課題の結果をフィードバックする際に用いた用紙

付録 F 実験 6 においてドット数推量課題の結果をフィードバックする際に表示したパソコン画面

付録 A 実験 1 で用いたシナリオ

受容条件で呈示したシナリオ

あなたは友人に誘われ、とある SNS に新しく登録しました。ここでは Facebook のように、実名での登録が基本で、多くの方が実名で登録しているようです。ほかに、性別・年齢や職業(会社員、学生など)といった属性がわかるようになっています。この SNS の特徴の一つが、チャットルームでのオンラインチャットで、実際の知人・友人以外の人たちとの交流も盛んです。チャットルームは SNS 利用者が自由に作成することができ、たくさんのチャットルームが毎日つくられています。特定のテーマについて話し合っているものから、ただ雑談をしているものまで、チャットの内容も様々です。チャットルームに集まる人たちは、実際には会ったことのない、お互いに知らない人たちばかりですが、チャットルームに入室する前に、参加者の簡単な情報(年齢・性別など)はわかるようになっています。

あなたは、この SNS の特徴であるチャットルームを利用しようと、チャットルームを探していました。すると、ただひたすら雑談をしているというチャットルームを見つけました。これまでチャットルームを利用したことはありませんでしたが、雑談するだけなら気軽に参加できるのではと思い、チャットルームに入室してみることにしました。参加者の人たちは、いろんな年代の人たちがいるようでした。各チャットルームには参加者の人数制限があるのですが、幸いそのチャットルームはもう一人、入室できそうです。

チャットルームに入室してみると、非常に賑わっており、いろんな参加者が活発に発言しています。とりあえず挨拶をしなければと思い、タイミングを見計らって「こんばんは。よろしくお願いします。」と発言してみました。すると、参加者の一人があなたの発言に反応し、話しかけてくれました。これをきっかけに、あなたは会話に混ざることができ、楽しくチャットに参加していました。ところがしばらくすると、チャットでの発言が出来なくなっていることに気が付きました。どうやら、インターネット回線の不具合で接続が切れてしまい、チャットルームから自動的に退出してしまったようです。そのうちに接続が回復したので、あなたは元のチャットルームに戻ろうとしました。しかし、すでに別の参加者が入室してしまったようで、そのチャットルームは満員になっていたため入室することができず、退出したままになってしまいました。

註) 下線部が排斥条件と文言が異なる部分である。下線は本稿のために付したもので、実験実施時には下線は付されていなかった。

付録 A(続き) 実験 1 で用いたシナリオ

排斥条件で呈示したシナリオ

あなたは友人に誘われ、とある SNS に新しく登録しました。ここでは Facebook のように、実名での登録が基本で、多くの方が実名で登録しているようです。ほかに、性別・年齢や職業(会社員、学生など)といった属性がわかるようになっています。この SNS の特徴の一つが、チャットルームでのオンラインチャットで、実際の知人・友人以外の人たちとの交流も盛んです。チャットルームは SNS 利用者が自由に作成することができ、たくさんのチャットルームが毎日つくられています。特定のテーマについて話し合っているものから、ただ雑談をしているものまで、チャットの内容も様々です。チャットルームに集まる人たちは、実際には会ったことのない、お互いに知らない人たちばかりですが、チャットルームに入室する前に、参加者の簡単な情報(年齢・性別など)はわかるようになっています。

あなたは、この SNS の特徴であるチャットルームを利用しようと、チャットルームを探していました。すると、ただひたすら雑談をしているというチャットルームを見つけました。これまでチャットルームを利用したことはありませんでしたが、雑談するだけなら気軽に参加できるのではと思い、チャットルームに入室することにしました。参加者の人たちは、いろんな人たちがいるようでした。各チャットルームには参加者の人数制限があるのですが、幸いそのチャットルームはもう一人、入室できそうです。

チャットルームに入室してみると、非常に賑わっており、いろんな参加者が活発に発言しています。とりえず挨拶をしなければと思い、タイミングを見計らって「こんばんは。よろしくお願いします。」と発言してみました。すると、参加者の一人があなたの発言に反応し、話しかけてくれました。これをきっかけに、あなたは会話に混ざることができ、楽しくチャットに参加していました。ところがしばらくすると、だんだんとあなたのよく知らない話題になってきました。質問してみようと思い、タイミングを見計らって何についての話なのか訊いてみました。しかし運悪く、ちょうど他の参加者の発言とタイミングが重なってしまい、あなたの質問は無視されてしまいました。しばらくチャットの成り行きを眺めていましたが、その後も誰からも話しかけられることはなかったため、あなたはそのチャットルームを退出することにしました。

註) 下線部が受容条件と文言が異なる部分である。下線は本稿のために付したもので、実験実施時には下線は付されていなかった。

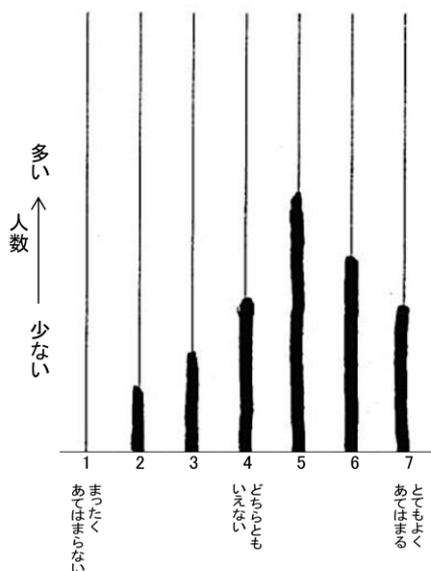
付録 B 実験 2 における集団類似性の知覚の程度を測定する課題の説明文

これから、性格を表す単語と社会的なカテゴリーを表す単語が、ペアで提示されます。

その単語について、まったくあてはまらない人を 1 ポイント、とてもよくあてはまる人を 7 ポイントとしたとき、そのカテゴリーに属する人々は、1 ポイントから 7 ポイントまでの間で、どのように分布していると思いますか？

例にならって、分布を表すグラフを作成してください。

例: 関西人・おもしろい



※ 関西人というカテゴリーに属する人たちを、“おもしろい”に当てはまるかどうか、“まったくあてはまらない(0 ポイント)”から“とてもよくあてはまる(7 ポイント)”で評価していったときに、それぞれのポイントにどのくらいの数(割合)の人が該当すると思うか、縦軸の線の長さで表してください。

※ 線が長いほど、そのポイントに該当する人が多いということを表しています。縦軸の長さがどのくらいの人数を表しているのか(例えば 1cm あたり何人か)は、グラフごとにバラバラでも構いません。およその分布がどのようになっているのか、イメージをグラフにしてください。

付録 C 実験 3 で用いたシナリオ

受容条件で呈示したシナリオ

あなたは友人に誘われ、とある SNS に新しく登録しました。ここでは Facebook のように、実名での登録が基本で、多くの方が実名で登録しているようです。ほかに、性別・年齢や職業(会社員、学生など)といった属性がわかるようになっています。この SNS の特徴の一つが、チャットルームでのオンラインチャットで、実際の知人・友人以外の人たちとの交流も盛んです。チャットルームは SNS 利用者が自由に作成することができ、たくさんのチャットルームが毎日つくられています。特定のテーマについて話し合っているものから、ただ雑談をしているものまで、チャットの内容も様々です。チャットルームに集まる人たちは、実際には会ったことのない、お互いに知らない人たちばかりですが、チャットルームに入室する前に、参加者の簡単な情報(年齢・性別など)はわかるようになっています。

あなたは、この SNS の特徴であるチャットルームを利用しようと、チャットルームを探していました。すると、ただひたすら雑談をしているというチャットルームを見つけました。これまでチャットルームを利用したことはありませんでしたが、雑談するだけなら気軽に参加できるのではと思い、チャットルームに入室することにしました。参加者の人たちは、いろんな年代の人たちがいるようでした。各チャットルームには参加者の人数制限があるのですが、幸いそのチャットルームはもう一人、入室できそうです。

チャットルームに入室してみると、非常に賑わっており、どの参加者も活発に発言しています。とりあえず挨拶をしなければと思い、タイミングを見計らって「こんばんは。よろしくお願ひします。」と発言してみました。すると、参加者の一人があなたの発言に反応し、話しかけてくれました。これをきっかけに、他の参加者たちもどンドン話しかけてくれたので、あなたは会話に混ざることができました。ところが突然、チャットでの発言が出来なくなりました。どうやら、インターネット回線の混雑で接続が切れてしまい、チャットルームから退出してしまったようです。しばらくすると接続が回復したので、元のチャットルームに戻ろうとしました。しかし、そのチャットルームにはすでに別の参加者が入室して満員になっていたため、入室することができず、退出したままということになってしまいました。

註) 下線部が排斥条件と文言が異なる部分である。下線は本稿のために付したもので、実験実施時には下線は付されていない。

付録 C(続き) 実験 3 で用いたシナリオ

排斥条件で呈示したシナリオ

あなたは友人に誘われ、とある SNS に新しく登録しました。ここでは Facebook のように、実名での登録が基本で、多くの方が実名で登録しているようです。ほかに、性別・年齢や職業(会社員、学生など)といった属性がわかるようになっています。この SNS の特徴の一つが、チャットルームでのオンラインチャットで、実際の知人・友人以外の人たちとの交流も盛んです。チャットルームは SNS 利用者が自由に作成することができ、たくさんのチャットルームが毎日つくられています。特定のテーマについて話し合っているものから、ただ雑談をしているものまで、チャットの内容も様々です。チャットルームに集まる人たちは、実際には会ったことのない、お互いに知らない人たちばかりですが、チャットルームに入室する前に、参加者の簡単な情報(年齢・性別など)はわかるようになっています。

あなたは、この SNS の特徴であるチャットルームを利用しようと、チャットルームを探していました。すると、ただひたすら雑談をしているというチャットルームを見つけました。これまでチャットルームを利用したことはありませんでしたが、雑談するだけなら気軽に参加できるのではと思い、チャットルームに入室することにしました。参加者の人たちは、いろんな年代の人たちがいるようでした。各チャットルームには参加者の人数制限があるのですが、幸いそのチャットルームはもう一人、入室できそうです。

チャットルームに入室してみると、非常に賑わっており、どの参加者も活発に発言しています。あなたもチャットに参加しようと思いますが、途中から参加したあなたには何について話しているのか、よくわかりません。参加者の過去の発言を読み返してみると、あなたも興味があることについて話しているようだとわかりました。とりえず挨拶をしなければと思い、タイミングを見計らって「こんばんは。よろしくお願ひします。」と発言してみました。しかし運悪く、ちょうど他の参加者の発言とタイミングが重なってしまい、あなたの挨拶は無視されてしまいました。しばらくチャットの成り行きを眺めていましたが、その後も誰からも話しかけられることもなく、話がどんどん進んでしまったので、あなたは仕方がなく、そのチャットルームを退出することにしました。

註) 下線部が受容条件と文言が異なる部分である。下線は本稿のために付したもので、実験実施時には下線は付されていないかった。

付録 D 実験 4 においてドット数推量課題の結果をフィードバックする際に用いた用紙

認知スタイルの判定結果	
ご自分の座席番号の判定結果をご確認ください	
座席番号	認知スタイル
1	<input type="checkbox"/> Over-estimator (実際の数よりも、多く推測する傾向の強い人) <input type="checkbox"/> Under-estimator (実際の数よりも、少なく推測する傾向の強い人)
2	<input type="checkbox"/> Over-estimator (実際の数よりも、多く推測する傾向の強い人) <input type="checkbox"/> Under-estimator (実際の数よりも、少なく推測する傾向の強い人)
3	<input type="checkbox"/> Over-estimator (実際の数よりも、多く推測する傾向の強い人) <input type="checkbox"/> Under-estimator (実際の数よりも、少なく推測する傾向の強い人)
4	<input type="checkbox"/> Over-estimator (実際の数よりも、多く推測する傾向の強い人) <input type="checkbox"/> Under-estimator (実際の数よりも、少なく推測する傾向の強い人)

註)座席番号ごとに、Under-estimatorもしくはUnder-estimatorのいずれかの左にあるカッコ内に○が付されていた。外集団条件では、自身は Under-estimator で、他の参加者は Over-estimator であつたと記されていた。内集団条件では、全ての参加者が Under-estimator であつたと記されていた。

低類似性条件で用いた用紙

認知スタイルの判定結果

認知スタイルについて

認知スタイルには、**Over-estimator** と **Under-estimator** の 2 種類が存在しています。判定テストにおいて、黒点の実際の数よりも多く推測する傾向の強い人を **Over-estimator**、少なく推測する傾向の強い人を **Under-estimator** といいます。

これまでの研究で、これら 2 つの認知スタイルの間で、情報処理や意思決定の方法に違いがあると言われてしています。(能力の優劣の差を示すものではありません。)

ただし、同じ認知スタイルを持つ人でも、**異なった判断や決定をする場合も多く、性格にも異なる点が見られる**、ということも知られています。判定テストでの回答も個人によるばらつきが大きく、同じ認知スタイルに属する人でも**回答傾向が異なります**。

ご自分の座席番号の判定結果をご確認ください

座席番号	認知スタイル	
1	<input type="checkbox"/> Over-estimator	(実際の数よりも、多く推測する傾向の強い人)
	<input type="checkbox"/> Under-estimator	(実際の数よりも、少なく推測する傾向の強い人)
2	<input type="checkbox"/> Over-estimator	(実際の数よりも、多く推測する傾向の強い人)
	<input type="checkbox"/> Under-estimator	(実際の数よりも、少なく推測する傾向の強い人)
3	<input type="checkbox"/> Over-estimator	(実際の数よりも、多く推測する傾向の強い人)
	<input type="checkbox"/> Under-estimator	(実際の数よりも、少なく推測する傾向の強い人)
4	<input type="checkbox"/> Over-estimator	(実際の数よりも、多く推測する傾向の強い人)
	<input type="checkbox"/> Under-estimator	(実際の数よりも、少なく推測する傾向の強い人)

註) 下部には、自身は Under-estimator であったが他の参加者は Over-estimator であったと記されていた。

高類似性条件で用いた用紙

認知スタイルの判定結果

認知スタイルについて

認知スタイルには、**Over-estimator** と **Under-estimator** の 2 種類が存在しています。判定テストにおいて、黒点の実際の数よりも多く推測する傾向の強い人を **Over-estimator**、少なく推測する傾向の強い人を **Under-estimator** といいます。

これまでの研究で、これら 2 つの認知スタイルの間で、情報処理や意思決定の方法に違いがあると言われてしています。(能力の優劣の差を示すものではありません。)

また、同じ認知スタイルを持つ人は、**似た判断や決定をしやすく、性格にも多くの共通点が見られる**、ということも知られています。判定テストでの回答も個人によるばらつきが小さく、同じ認知スタイルに属する人は類似した回答傾向を示します。

ご自分の座席番号の判定結果をご確認ください

座席番号	認知スタイル	
1	() Over-estimator	(実際の数よりも、多く推測する傾向の強い人)
	() Under-estimator	(実際の数よりも、少なく推測する傾向の強い人)
2	() Over-estimator	(実際の数よりも、多く推測する傾向の強い人)
	() Under-estimator	(実際の数よりも、少なく推測する傾向の強い人)
3	() Over-estimator	(実際の数よりも、多く推測する傾向の強い人)
	() Under-estimator	(実際の数よりも、少なく推測する傾向の強い人)
4	() Over-estimator	(実際の数よりも、多く推測する傾向の強い人)
	() Under-estimator	(実際の数よりも、少なく推測する傾向の強い人)

註) 下部には、自身は Under-estimator であったが他の参加者は Over-estimator であったと記されていた。

付録 F 実験 6 においてドット数推量課題の結果をフィードバックする際に表示したパソコン画面

判定結果のフィードバックおよび認知スタイルの説明に用いたパソコン画面(両条件で共通)

①

認知スタイル判定テストの結果、あなたは

アンダー・エスティメーター
(実際の数よりも少なく推測する傾向のある人)

でした。

(後で判定結果に関して質問するので、忘れないようにしてください。)

[エンターキーを押して、次のページに進んでください]

②

認知スタイルには、**アンダー・エスティメーター**(=実際の数よりも少なく推測する傾向のある人)と**オーバー・エスティメーター**(=実際の数よりも多く推測する傾向のある人)の2種類が存在しています。

これまでの研究で、これら2つの認知スタイルの間で、情報処理や意思決定の方法に違いがあるといわれています。(能力には優劣の差は見られません)

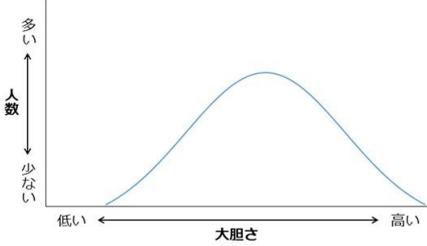
[エンターキーを押して、次のページに進んでください]

付録 F(続き) 実験 6 においてドット数推量課題の結果をフィードバックする際に表示したパソコン画面

低類似性条件で表示したパソコン画面

ただし、同じ認知スタイルを持つ人でも異なった判断や決定をする場合も多く、また性格でも異なる点が多い、ということも知られています。

例： Over-estimatorにおける大胆な性格の人の分布



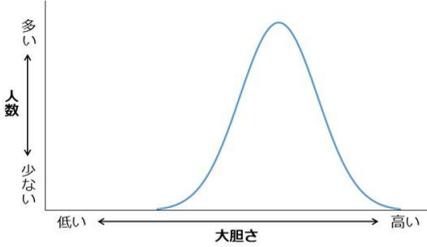
出典: Williams (2009) より作成

[エンターキーを押して、次のページに進んでください]

高類似性条件で表示したパソコン画面

また、同じ認知スタイルを持つ人は似た判断や決定をしやすく、また性格にも多くの共通点が見られる、ということも知られています。

例： Over-estimatorにおける大胆な性格の人の分布



出典: Williams (2009) より作成

[エンターキーを押して、次のページに進んでください]

註) この2つの画像の内のいずれかが、前頁の2つの画像の後に表示された。

